

京都市 子どもの生活状況等に関する調査 【結果報告書】 (概要版)

本調査については、令和2年度を始期とする「子ども・若者に係る総合的な計画」を今年度に策定するに当たり、昨年9月から順次実施してきた子育て支援に関する市民ニーズ調査などの6つの市民ニーズ調査・意識調査にあらかじめ設定していた子どもの生活状況等に関する調査項目を抽出し、家庭の経済状況と生活状況等の相関関係等を把握したものです。

令和元年6月
京都市

1. 調査の概要

1 調査の目的

「京都市貧困家庭の子ども・青少年対策に関する実施計画」（平成29年3月策定）の基礎資料とすることを目的に実施した「京都市子どもの生活状況等に関する調査」（平成28年8月実施）からの経年変化を補足するとともに、新たに18歳以上の青少年・若者について、幼少期の家族との関わりや社会体験の有無による、現在の生活状況、就職、自己肯定感の違いを調査することにより、新計画策定に向けた基礎資料とすること。

2 調査設計

●調査方法

令和2年度を始期とする「子ども・若者に係る総合的な計画」を今年度に策定するに当たり、昨年9月から順次実施してきた以下の市民ニーズ調査・意識調査にあらかじめ設定していた子どもの生活状況等に関する調査の項目を抽出し、家庭の経済状況と生活状況等の相関関係等を把握しました。

調査区分		調査対象者 (配布数)	有効回収数	有効回収率
①	子育て支援に関する市民ニーズ調査（小学校入学前児童）	6,500件	3,191件	49.1%
②	子育て支援に関する市民ニーズ調査（小学生児童）	6,500件	3,202件	49.3%
③	家族や家庭生活のあり方に関する意識調査	6,500件	1,866件	28.7%
	ひとり親家庭に関する実態調査	5,000件	1,272件	25.4%
④-1	うち ひとり親家庭に関する実態調査（母子家庭）	3,700件	999件	27.0%
④-2	うち ひとり親家庭に関する実態調査（父子家庭）	1,300件	273件	21.0%
⑤	母子保健に関する意識調査	3,162件	1,327件	42.0%
⑥-1 ⑥-2	青少年・若者に関する意識行動と 思春期保健に関する調査（青少年・ 若者）	6,500件	1,393件	21.4%
⑥-3	青少年・若者に関する意識行動と 思春期保健に関する調査（保護者）	2,500件	638件	25.5%
⑦	放課後の過ごし方に関する調査 （小学校用）	31,696件	14,218件	44.9%
⑧	放課後の過ごし方に関する調査 （総合支援学校用）	1,133件	475件	41.9%

※⑥については、「京都市子どもの生活状況等に関する調査」においては、設問によって、「⑥-1 青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査（13歳～18歳）」と「⑥-2 青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査（19歳～30歳）」に分けているもの

があります。また、保護者に対する調査は「⑥-3 青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査（保護者）」としています。

(参考) 各調査の概要

調査期間：平成30年9月7日～9月21日（①～④，⑥～⑧）

平成30年9月3日～10月12日（⑤）

①② 子育て支援に関する市民ニーズ調査

対象：①市内在住の小学校入学前児童の保護者

② 〃 小学生児童の保護者

方法：無作為抽出を行い，調査票を郵送

目的：小学校入学前及び小学生の子どもを養育する家庭の子育ての状況，子どもや子育て支援に関するニーズを把握し，今後の本市の子育て支援施策の充実に向けた基礎資料とすること。

③ 家族や家庭生活のあり方に関する意識調査

対象：市内在住の18歳から49歳までの市民

方法：無作為抽出を行い，調査票を郵送

目的：結婚・出産に関する意識や，働き方などに対する意識等を把握し，今後の本市の少子化対策や真のワーク・ライフ・バランスの推進に向けた基礎資料とすること。

④ ひとり親家庭に関する実態調査

対象：市内在住の母子・父子家庭

方法：無作為抽出を行い，調査票を郵送

目的：ひとり親家庭の生活実態や要望・意見等を把握し，今後の本市のひとり親家庭への支援施策の検討に向けた基礎資料とすること。

⑤ 母子保健に関する意識調査

対象：平成30年9月3日～9月28日の間に区役所・支所子どもはぐくみ室における乳幼児健康診査（4か月児，8か月児，1歳6か月児，3歳児）に来所した保護者

方法：区役所・支所子どもはぐくみ室における乳幼児健康診査会場でアンケート票配布・郵送回収

目的：子育て中の母親の健康に対する意識や家庭での育児の状況，母子保健サービスについての意見等を把握し，今後の本市の母子保健施策等の充実に向けた基礎資料とすること。

⑥ 青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査

対象：市内在住の13歳～18歳とその保護者

〃 19歳～30歳

方法：無作為抽出を行い，調査票を郵送

目的：青少年の意識や生活状況等について現状を把握し，今後の本市の青少年施策の充実に向けた基礎資料とすること。

⑦⑧ 放課後の過ごし方に関する調査

対象：⑦市立小学校及び市立小中学校前期課程に通う1年生，4年生，6年生の全ての児童の保護者

⑧総合支援学校に通学する全児童・生徒の保護者

方法：各学校を通じ調査票を配布し，郵送で回収

目的：⑦小学生の放課後の過ごし方の状況や，放課後に利用している事業に関するニーズを把握し，今後の本市の放課後児童施策の充実に向けた基礎資料とすること。

⑧児童・生徒の放課後の過ごし方の実態を把握するとともに，学童クラブ機能，放課後等デイサービスの利用状況や利用ニーズ，地域ごとの状況を把握し，今後の本市の放課後児童施策の充実に向けた基礎資料とすること。

3 報告書の見方

- 各調査名の表記は以下のとおりとします。

なお、調査によって対象が異なるため（子どもの保護者又は本人）、調査名には対象が分かるよう表記しています。

調査区分		調査対象	本報告書での表記
①	子育て支援に関する市民ニーズ調査 (小学校入学前児童)	保護者	①小学校入学前児童調査 (保護者)
②	子育て支援に関する市民ニーズ調査 (小学生児童)	保護者	②小学生児童調査 (保護者)
③	家族や家庭生活のあり方に関する意識調査	本人	③家族・家庭生活調査 (18～49歳)
	ひとり親家庭に関する実態調査		
④-1	うち ひとり親家庭に関する実態調査 (母子家庭)	保護者	④-1 ひとり親家庭調査 (保護者 (母子家庭))
④-2	うち ひとり親家庭に関する実態調査 (父子家庭)	保護者	④-2 ひとり親家庭調査 (保護者 (父子家庭))
⑤	母子保健に関する意識調査	保護者	⑤母子保健調査 (保護者)
⑥-1	青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査 (13歳～18歳)	本人	⑥-1 青少年調査 (本人 (13歳～18歳))
⑥-2	青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査 (19歳～30歳)	本人	⑥-2 青少年調査 (本人 (19歳～30歳))
⑥-3	青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査 (保護者)	保護者	⑥-3 青少年調査 (保護者)
⑦	放課後の過ごし方に関する調査 (小学校用)	保護者	—
⑧	放課後の過ごし方に関する調査 (総合支援学校用)	保護者	—

※⑦、⑧の調査は、放課後の過ごし方に限定した全数調査であり、所得を質問していないため、本報告書に結果を掲載していません。

- 回答については、家庭の経済状況との相関関係を把握するため、所得に応じた結果（国が示す貧困線を下回るか）を各々記載しています。
- 回答は、各質問の回答者数（図表中の「N」）を基数とした百分率（%）で示しています。また、有効サンプル数に対して、それぞれの回答数の割合を小数点以下第2位で四捨五入しているため、SA：単数回答（複数の選択肢から1つの選択肢を選ぶ方式）であっても合計値が100.0%にならない場合があります。このことは、本報告書内の分析文、グラフ、表においても同様です。
- MA：複数回答（複数の選択肢から2つ以上の選択肢を選ぶ方式）の設問の場合、回答は選択肢ごとの有効回答数に対して、それぞれの割合を示しています。そのため、合計が100.0%を超える場合があります。
- 図表中において「不明・無回答」とあるものは、回答が示されていない、又は回答の判別が困難なものです。

- 本文中の設問の選択肢について、長い文は簡略化している場合があります。
- 設問によっては、結果を詳細に分析するため、クロス集計表（※）を掲載しています。クロス集計の場合、無回答を排除しているため、クロス集計の有効回答数の合計と単純集計（全体）の有効回答数が合致しないことがあります。

※クロス集計

複数項目の組み合わせで分類した集計のことで、複数の質問項目を交差して並べ、表やグラフを作成することにより、その相互の関係を明らかにするための集計方法です。

- 平成28年度に実施した「京都市子どもの生活状況等に関する調査」（※）からの経年変化を補足するため、一部の項目には当該調査の数値を記載していますが、今回の調査と調査対象及び回答者数の分母が異なるため、経年比較を見る際は留意する必要があります。

※平成28年度「京都市子どもの生活状況等に関する調査」

住民基本台帳から無作為抽出した京都市内の0～17歳の子どもがいる世帯に対し実施した調査です。調査は、乳幼児（0～5歳）、小学生（6～11歳）、中高生等（12～17歳）に各々6,000件ずつ実施しました。

【本調査における世帯の所得が「貧困線」を下回るとする基準の算定方法】

国においては、国民生活基礎調査を基に、世帯人員ごとの等価可処分所得（可処分所得（いわゆる手取り収入）を世帯人員の平方根で割ったもの。世帯人員当たりの概ねの可処分所得）の分布の中央値の半分の額を「貧困線」とし、これを基に全国の貧困率を算出しています。

一方、貧困線の都道府県、市町村別の数値が出されていないため、本調査においては、便宜的に、国が国民生活基礎調査により算出した全国の貧困線を基に、回答いただいた世帯の経済状況を判断しています。

また、国の貧困線算定に当たっての所得の把握方法としては、回答者が金額を記入する方式を採っていますが、本市の調査では、回答いただく方の負担を考慮し、100万円単位等で区分した金額の選択肢から選んでいただく方式により、概ねの可処分所得を把握しています。

◆貧困線の基準（国の基準（平成28年度国民生活基礎調査）に基づき算出したもの）

世帯人員	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人
世帯人員当たりの概ねの可処分所得	173万円	212万円	244万円	273万円	299万円	323万円	345万円

◆本調査における「貧困線」以上・以下の判定方法

アンケート調査で回答いただく収入の選択肢には幅があるため（①0～100万円、②101～200万円など）、回答いただいた選択肢の中央値を所得額と仮定して判定しています。

（例）手取り収入（可処分所得）を「201～300万円」と回答した3人世帯と2人世帯の場合

- ・手取り収入の算定…選択肢における収入幅の中央値の250万円と仮定
- ・「貧困線」以上・以下の判定

等価可処分所得：250万円÷「 $\sqrt{3}$ 」 \approx 144.3万円<212万円（3人世帯の貧困線）
⇒当該世帯は「貧困線」以下にあると推計

等価可処分所得：250万円÷「 $\sqrt{2}$ 」 \approx 177.1万円>173万円（2人世帯の貧困線）
⇒当該世帯は「貧困線」以上にあると推計

II. 調査結果

(1) 基本属性

ア 世帯の昨年1年間（平成29年1月1日～同年12月31日の期間）の可処分所得（SA）

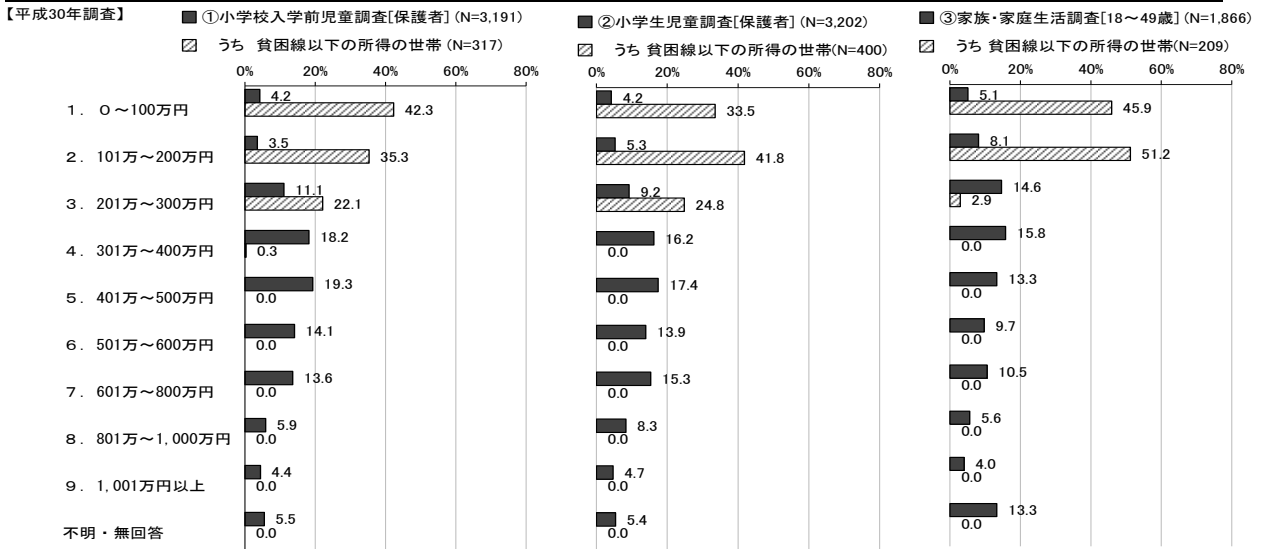
・全体では、「わからない」又は「不明・無回答」を除き、①小学校入学前児童調査（保護者）、②小学生児童調査（保護者）、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））、⑤母子保健調査（保護者）において「401万～500万円」、③家族・家庭生活調査（18～49歳）において「301万～400万円」、⑥-2青少年調査（本人（19歳～30歳）において「201万～300万円」、⑥-3青少年調査（保護者）において、「501万～600万円」の割合が最も高くなっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、①小学校入学前児童調査（保護者）、⑤母子保健調査（保護者）、⑥-2青少年調査（本人（19歳～30歳）において「0～100万円」、②小学生児童調査（保護者）、③家族・家庭生活調査（18～49歳）、⑥-3青少年調査（保護者）において「101万～200万円」の割合が最も高くなっています。

・一方、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））では、「不明・無回答」を除くと、全体、「貧困線以下の所得の世帯」のいずれにおいても「100万～150万円未満」の割合が最も高くなっています。

・本調査において、所得が「貧困線」を下回ると考えられる世帯の割合について、①小学校入学前児童調査（保護者）では「9.9%」、②小学生児童調査（保護者）では「12.5%」、③家族・家庭生活調査（18～49歳）では「11.2%」、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））では「23.5%」、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））では「10.3%」、⑤母子保健調査では「12.1%」、⑥-2青少年調査（本人（19歳～30歳）では「15.0%」、⑥-3青少年・若者調査〔保護者〕では「13.6%」となっています。なお、ひとり親家庭に関する実態調査については、可処分所得に関する設問結果の「不明・無回答」の割合が多かったこと等から、国の調査結果（50.8%（平成28年国民生活基礎調査））と異なっています。

・平成28年度調査からの経年変化では、①小学校入学前児童調査（保護者）の「貧困線以下の所得の世帯」において、平成28年度調査よりも「0～100万円」の割合が高くなっていますが、おおむね大きな違いは見られませんでした。



【平成30年調査】

■ ⑤母子保健調査[保護者] (N=1,327)

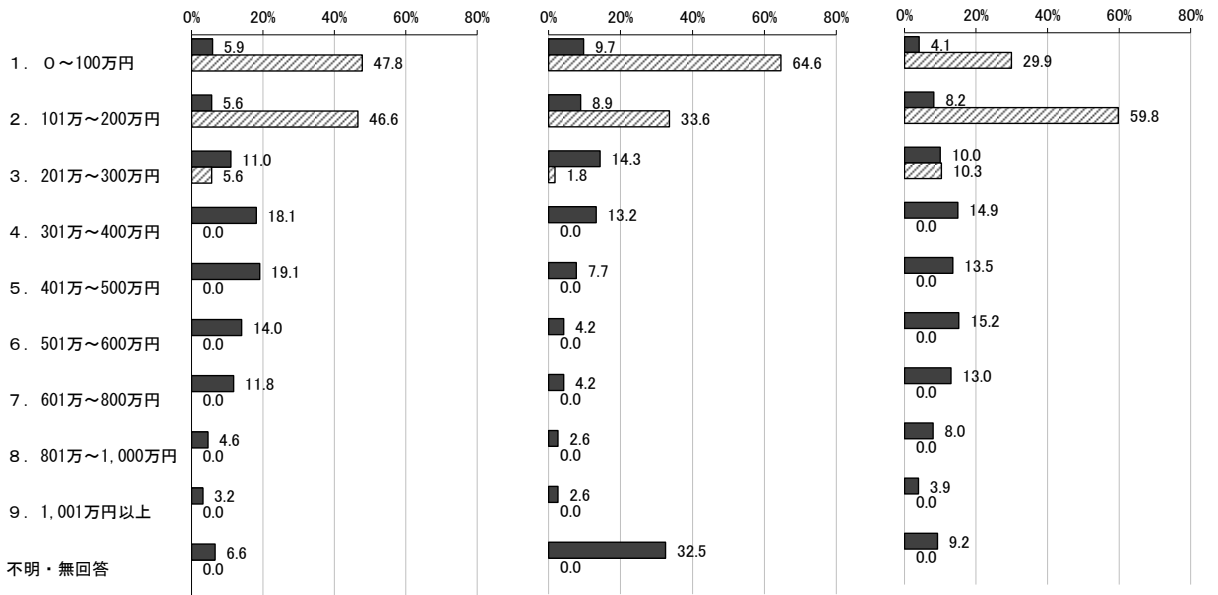
■ ⑥-2青少年調査[本人(19歳～30歳)] (N=755)

■ ⑥-3青少年調査[保護者] (N=638)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=161)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯(N=113)

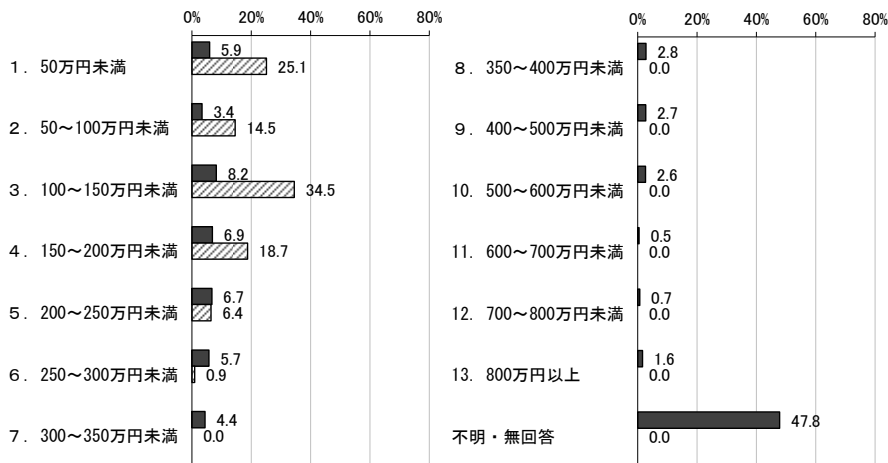
▨ うち 貧困線以下の所得の世帯(N=87)



【平成30年調査】

■ ④-1ひとり親家庭調査[保護者(母子家庭)] (N=999)

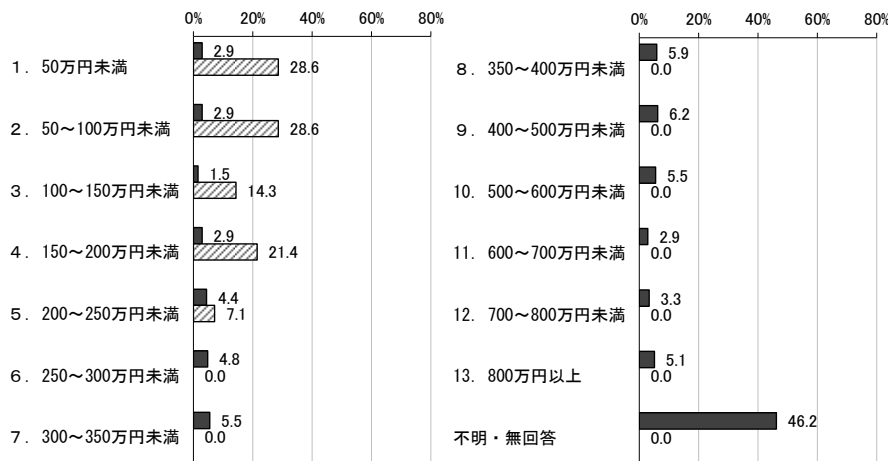
▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=235)

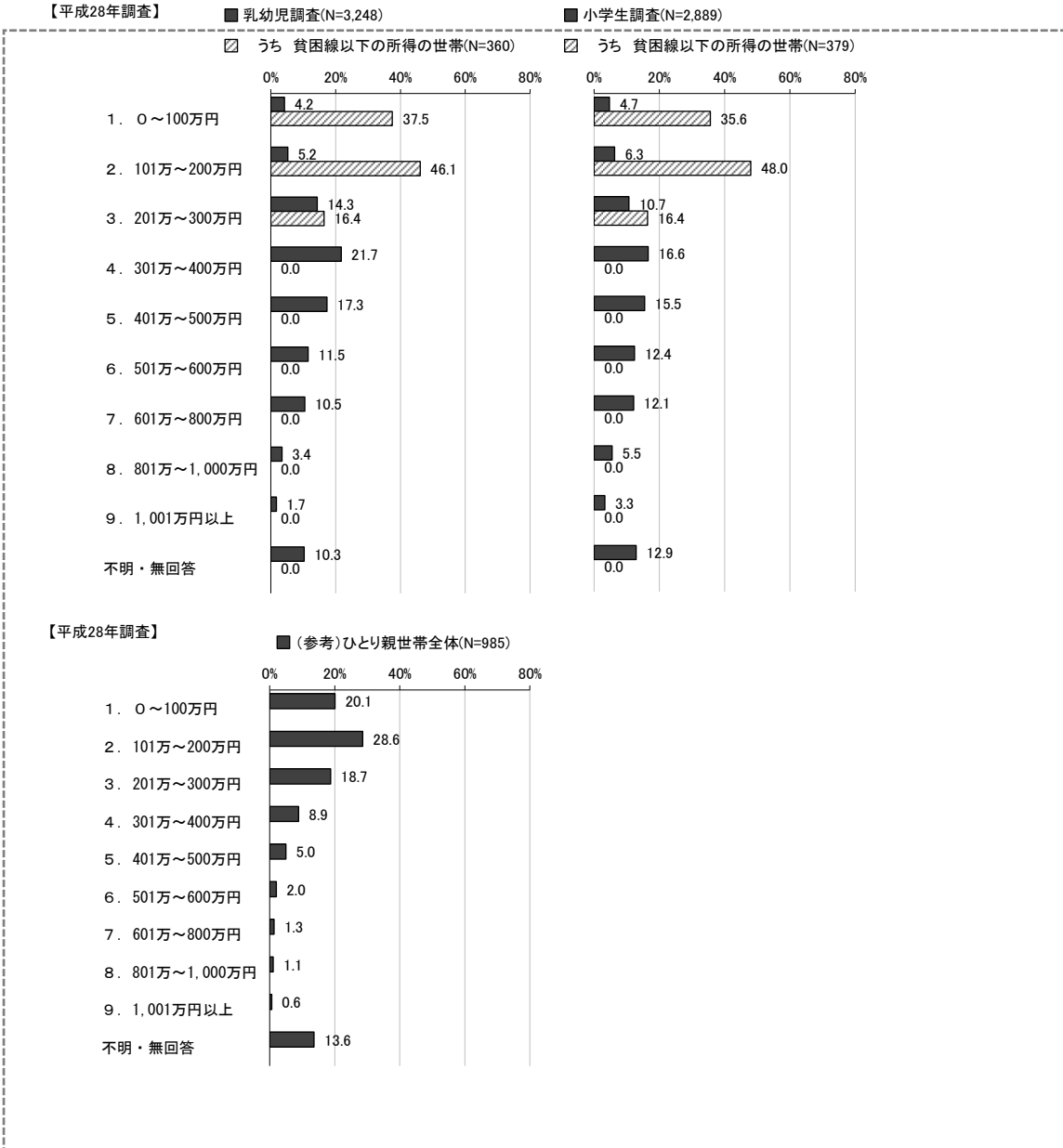


【平成30年調査】

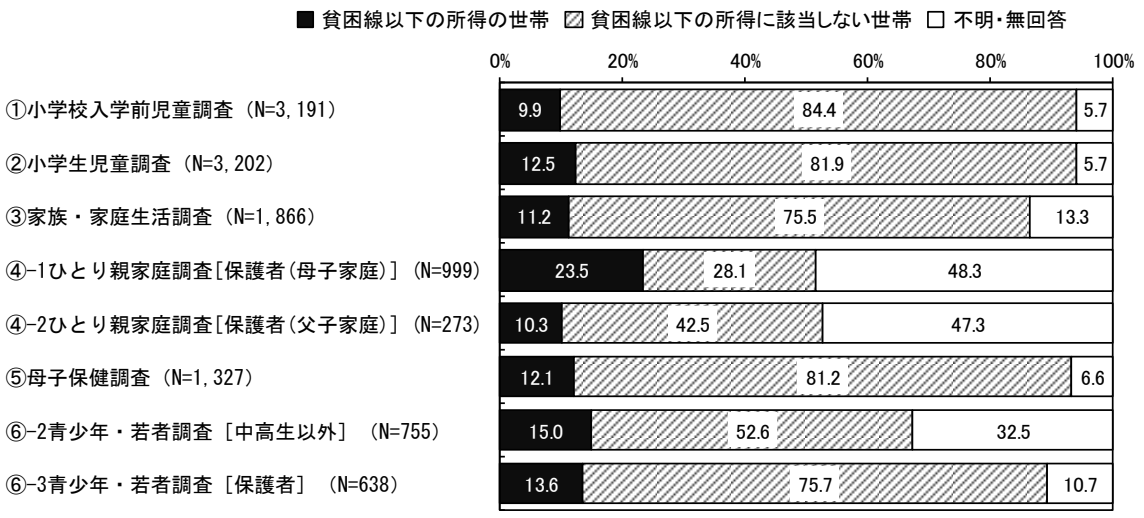
■ ④-2ひとり親家庭調査[保護者(父子家庭)] (N=273)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=28)





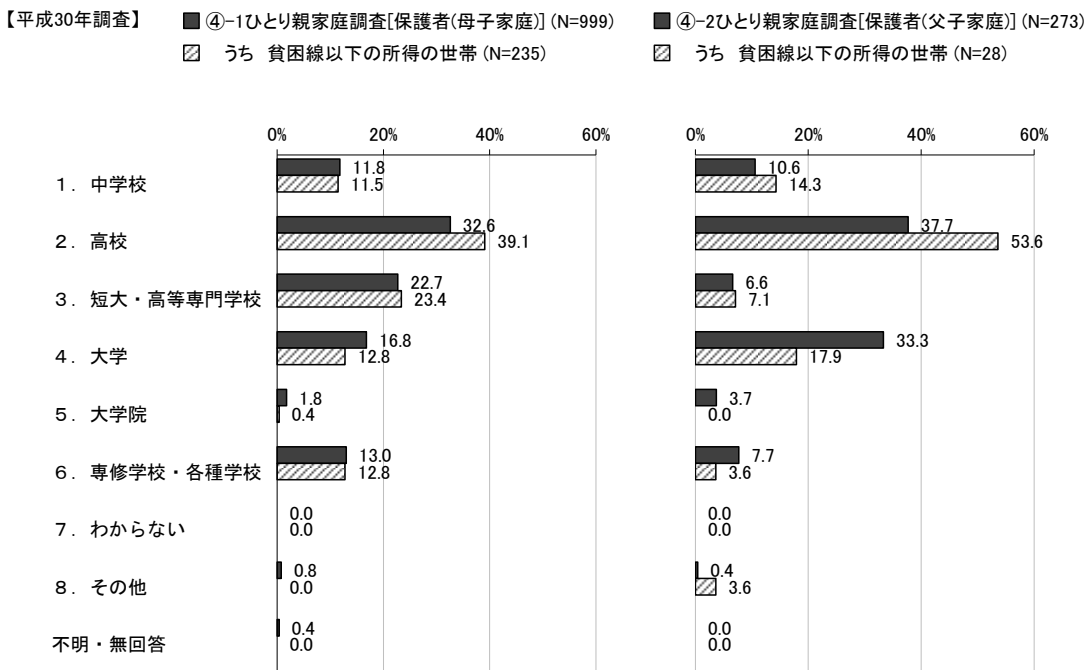
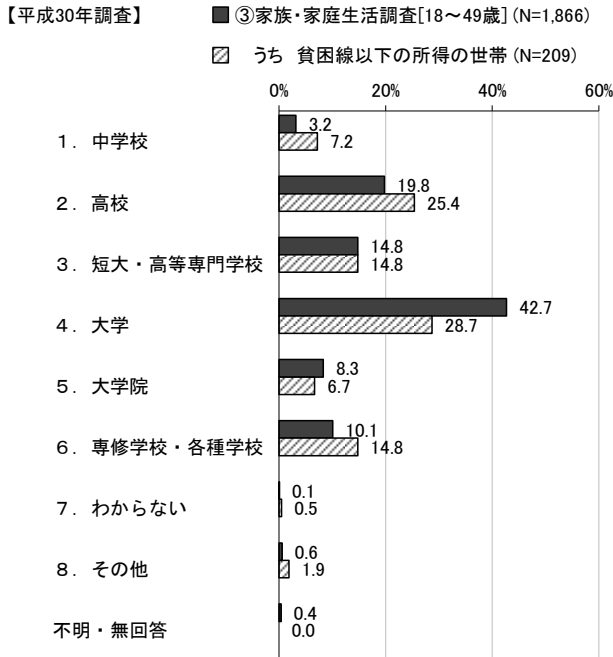
《「貧困線」を下回る所得の世帯の割合》



イ 最終学歴 (SA)

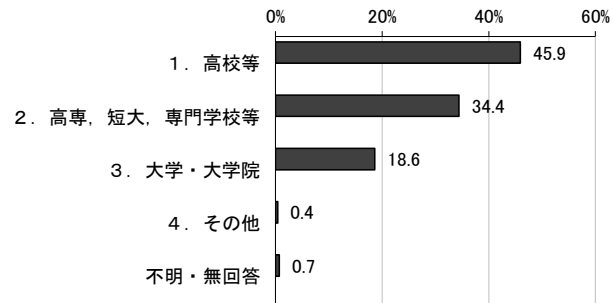
・全体では、③家族・家庭生活調査(18～49歳)では「大学」の割合が最も高く、次いで「高校」となっており、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))では「高校」の割合が最も高くなっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、すべての調査において、「高校」の割合が全体よりも高く、「大学」が全体よりも低くなっています。



【平成28年調査】

■ (参考)ひとり親(母親)世帯全体(N=985)

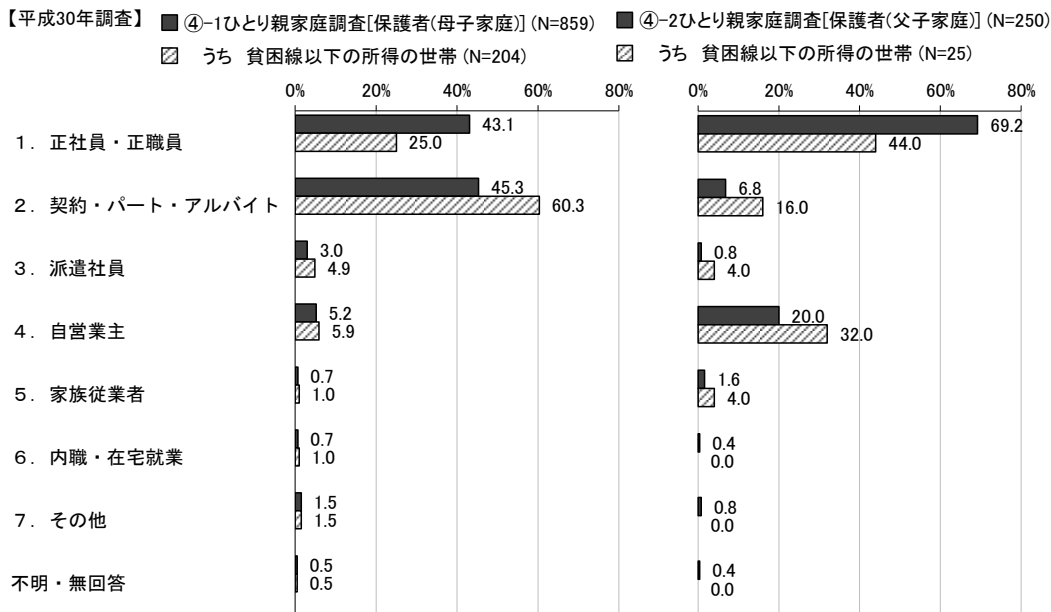
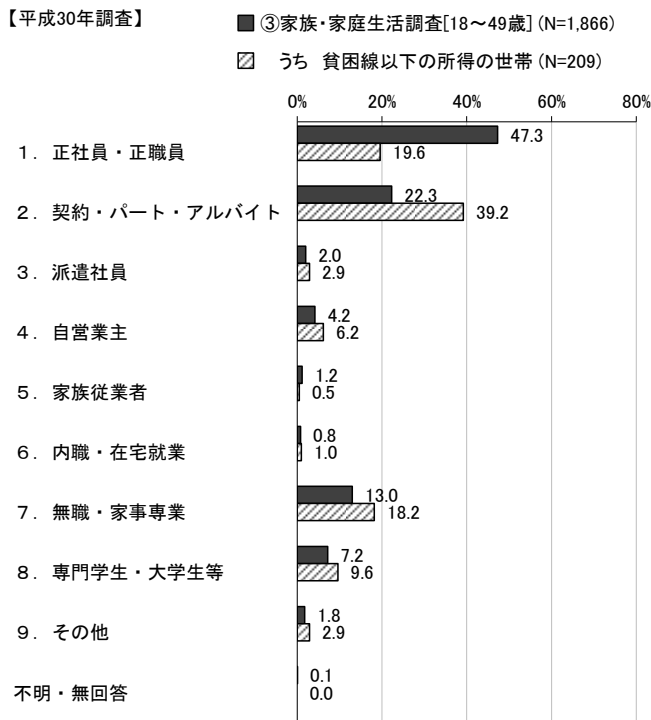


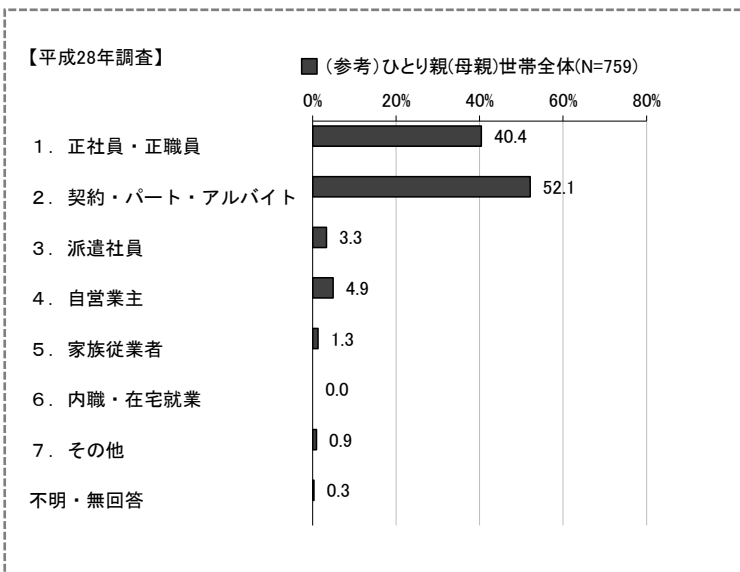
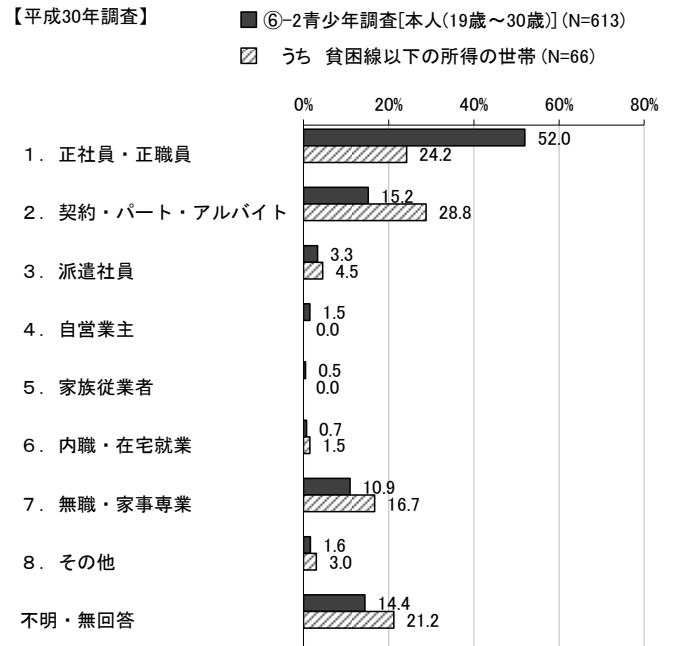
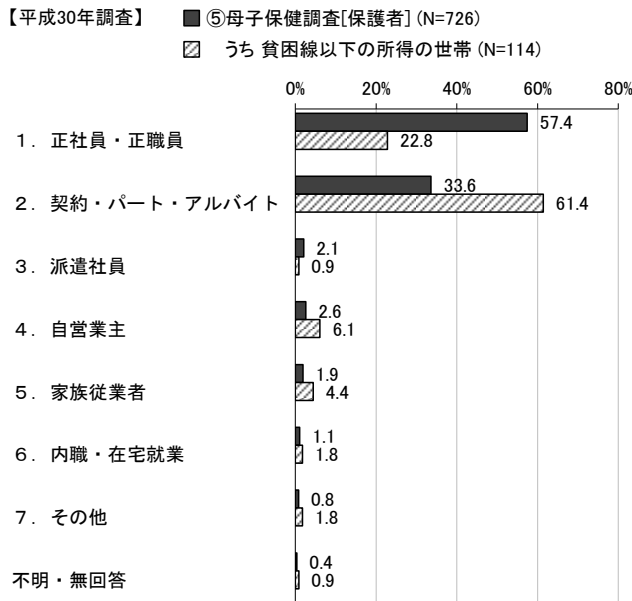
(2) 就労状況・勤務状況

ア 就労形態 (SA)

・全体では、③家族・家庭生活調査(18～49歳)、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))、⑤母子保健調査(保護者)、⑥-2青少年調査(本人(19歳～30歳))において「正社員・正職員」、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))において「契約・パート・アルバイト」の割合が高くなっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、すべての調査において、全体よりも「正社員・正職員」の割合が低く、「契約・パート・アルバイト」の割合が高くなっています。





イ 帰宅時間

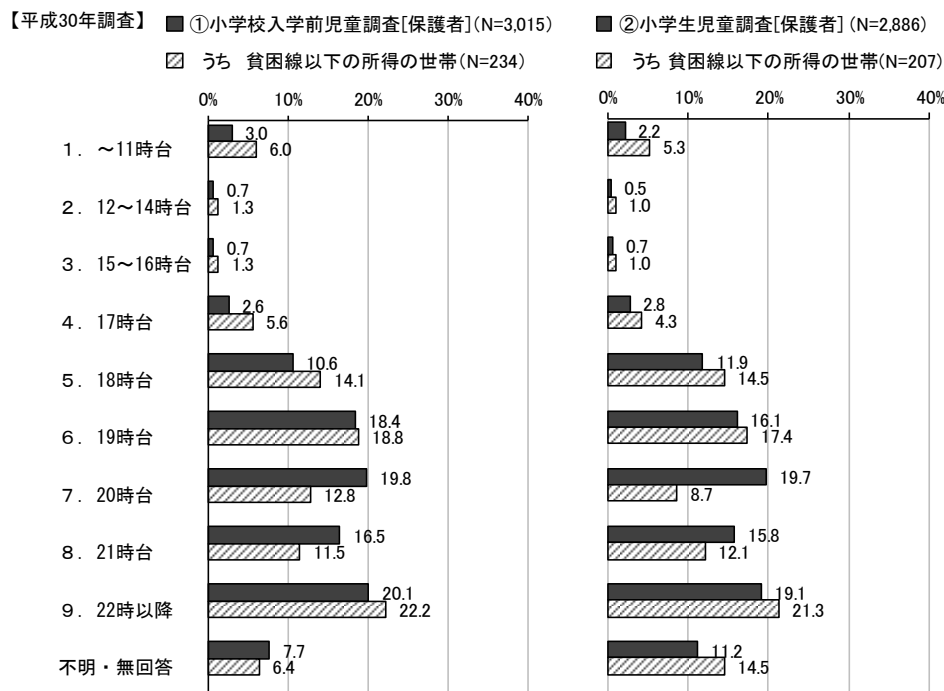
・全体では、父親は、①小学校入学前児童調査（保護者）において「22時以降」、②小学生児童調査（保護者）において「20時台」、④－2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））、⑥－3青少年調査（保護者）において「19時台」の割合が最も高くなっており、母親は、①小学校入学前児童調査（保護者）、⑥－3青少年調査（保護者）において「18時台」、②小学生児童調査（保護者）において「15～16時台」の割合が最も高くなっています。

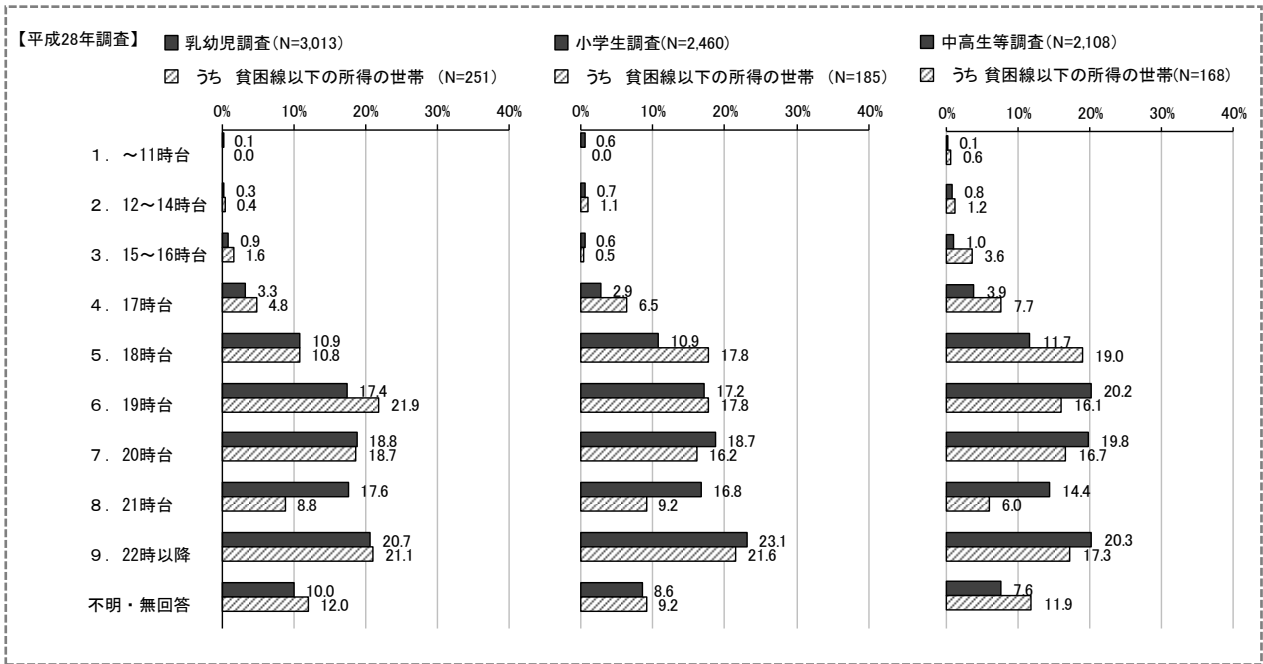
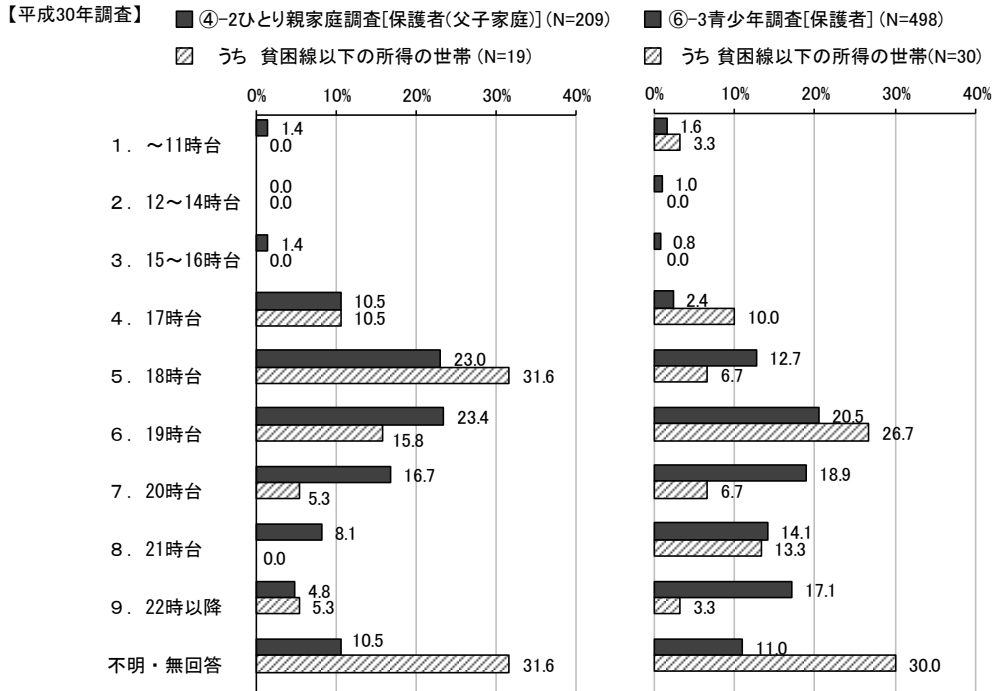
・④－1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））では、全体、「貧困線以下の所得の世帯」ともに「18時台」の割合が最も高くなっています。また、全体では、「18時台」以降の割合が他の調査と比較して高くなっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、父親は、①小学校入学前児童調査（保護者）、②小学生児童調査（保護者）において「22時以降」、④－2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））において「18時台」、⑥－3青少年調査（保護者）において「19時台」の割合が最も高くなっており、母親は、すべての調査において「18時台」の割合が最も高くなっています。

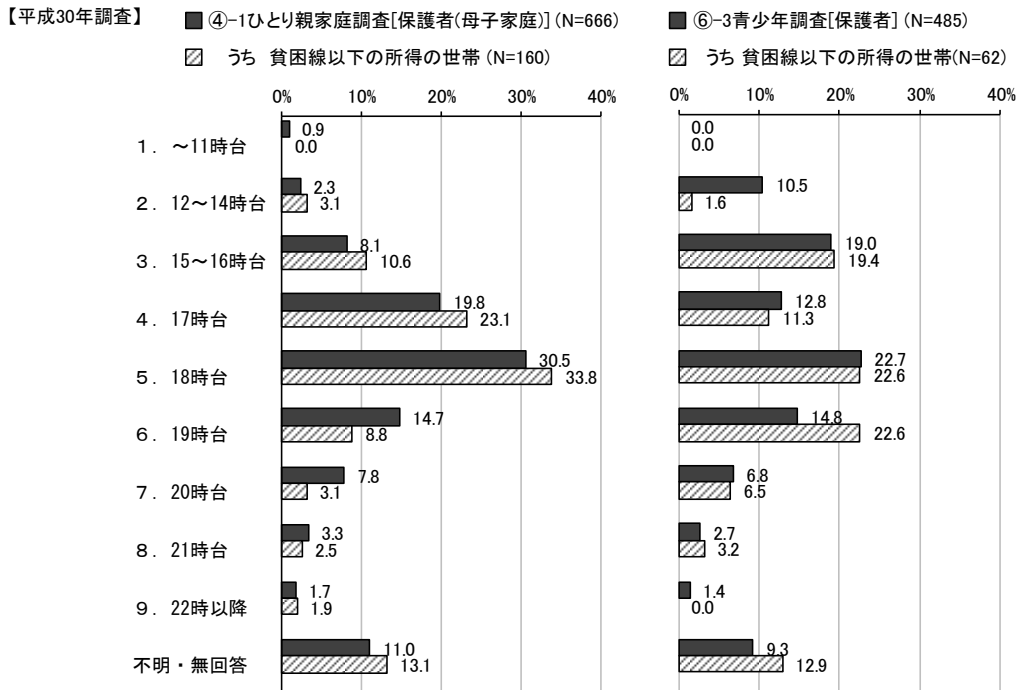
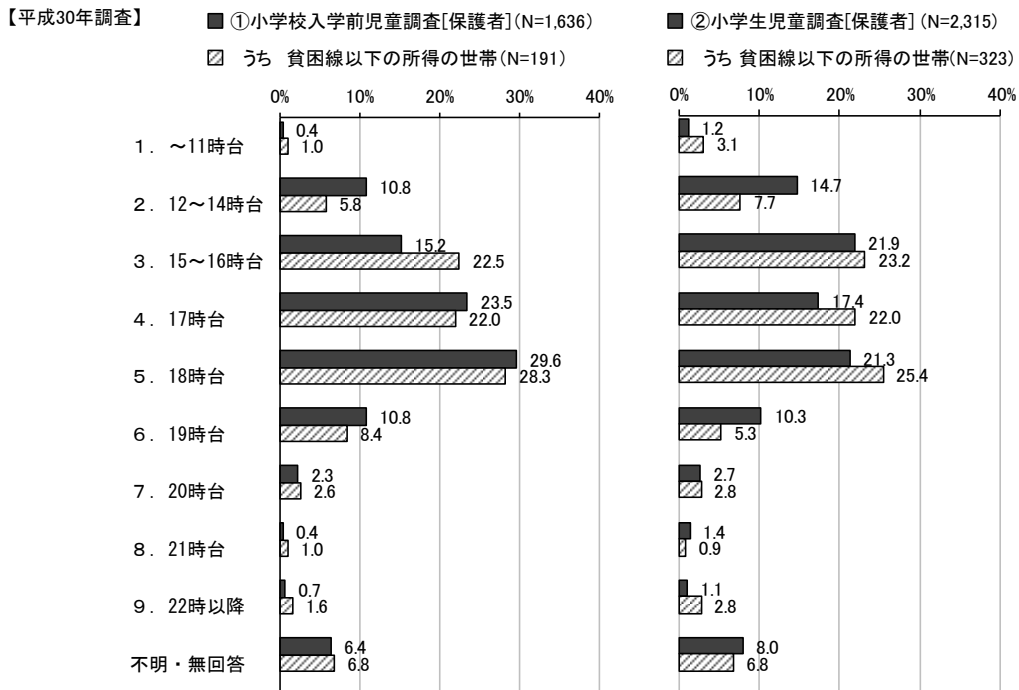
・平成28年度調査からの経年変化では、おおむね大きな違いは見られませんでした。

【父親】





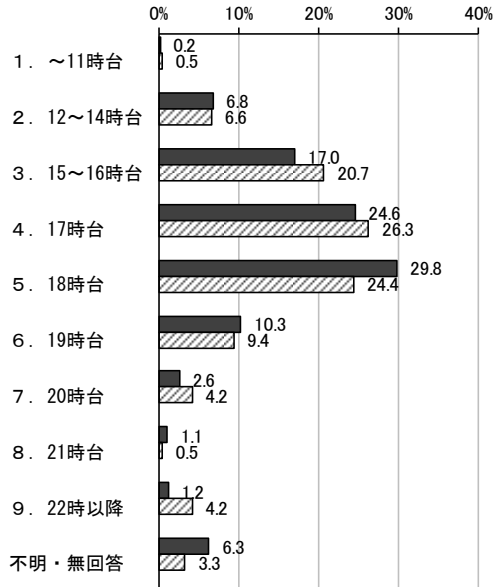
【母親】



【平成28年調査】

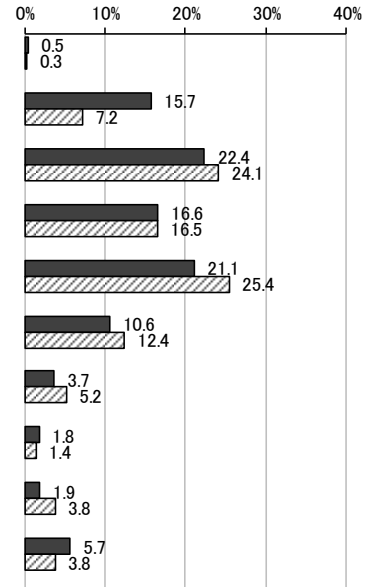
■ 乳幼児調査(N=1,656)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=213)



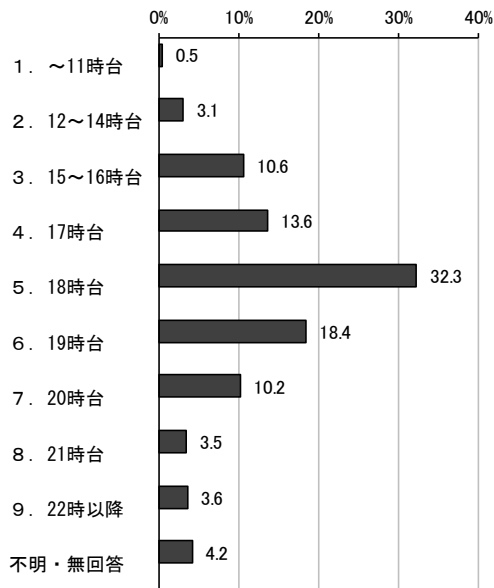
■ 小学生調査(N=2,027)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=291)



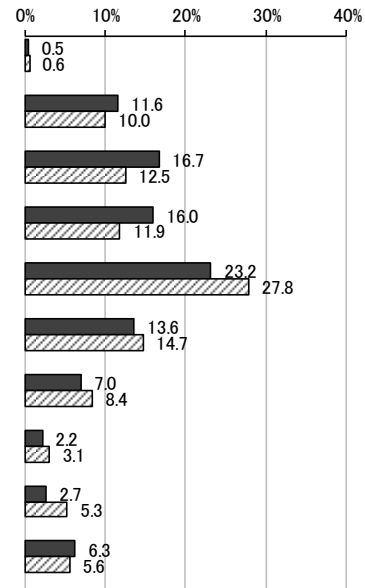
【平成28年調査】

■ (参考)ひとり親(母子)世帯全体(N=745)



■ 中高生等調査(N=2,003)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯(N=320)

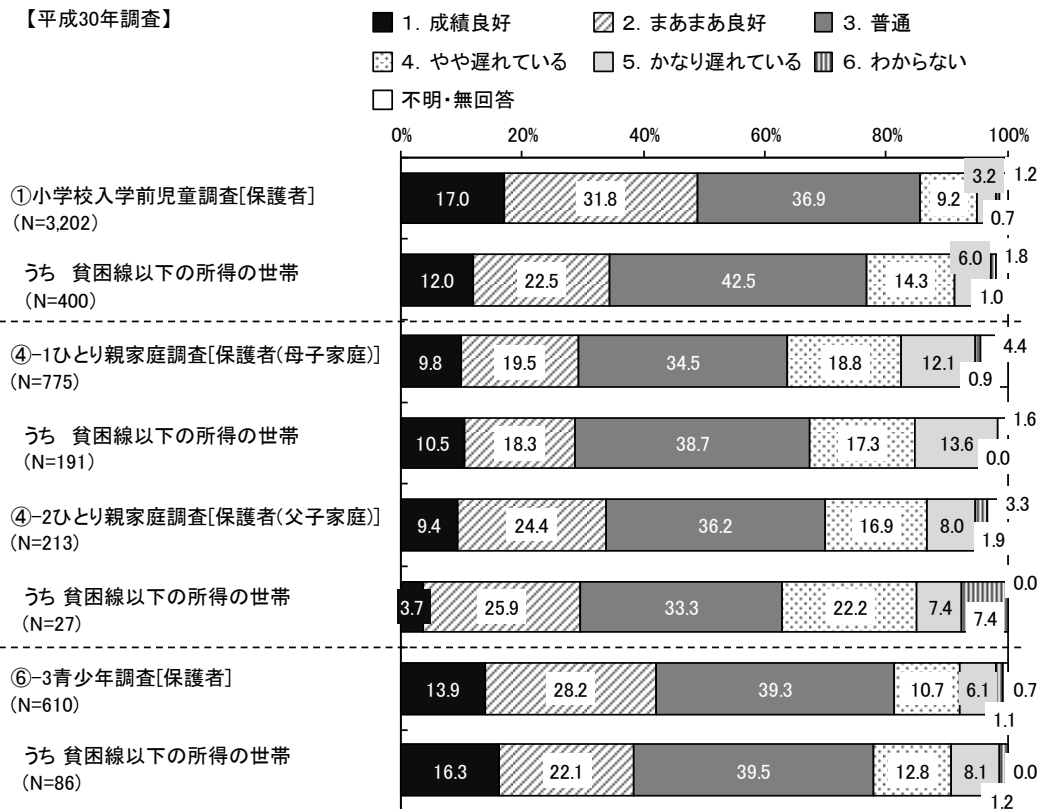


(3) 子ども等の状況

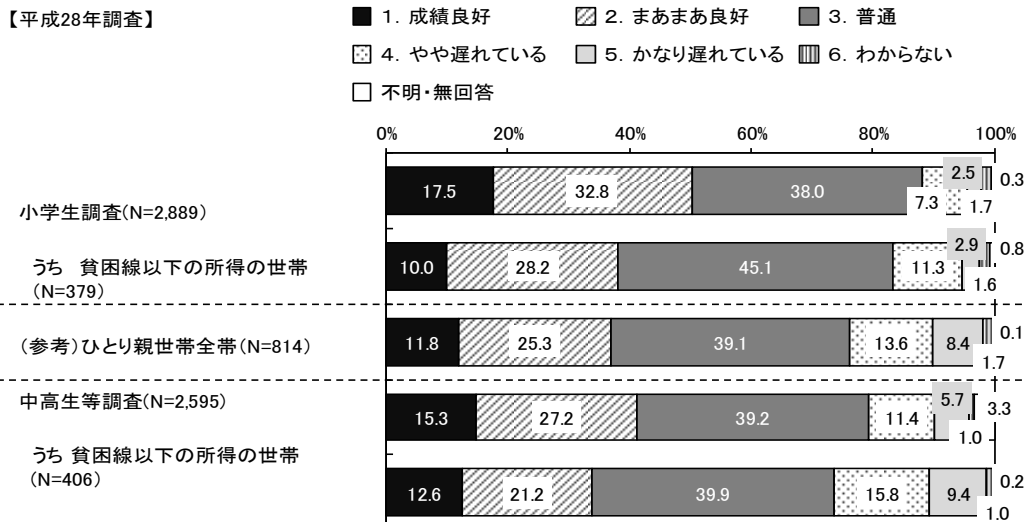
ア 子どもの学校での勉強の成績 (SA)

- ・全体では、すべての調査において、「普通」の割合が最も高くなっています。
- ・④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭)), ④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))では、全体, 「貧困線以下の所得の世帯」ともに, 「遅れている」(やや遅れている+かなり遅れている)の割合が, 他の調査よりも割合が高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では, ④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))を除き, 「遅れている」(やや遅れている+かなり遅れている)の割合が全体よりも高くなっています。
- ・平成28年度調査からの経年変化では, おおむね大きな違いは見られませんでした。

【平成30年調査】

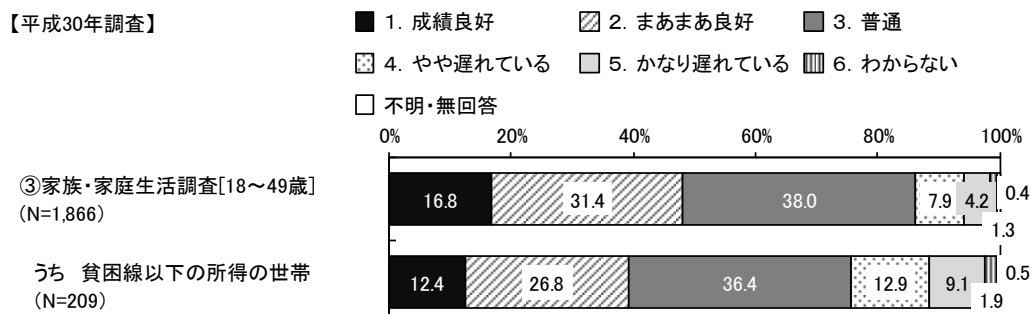


【平成28年調査】



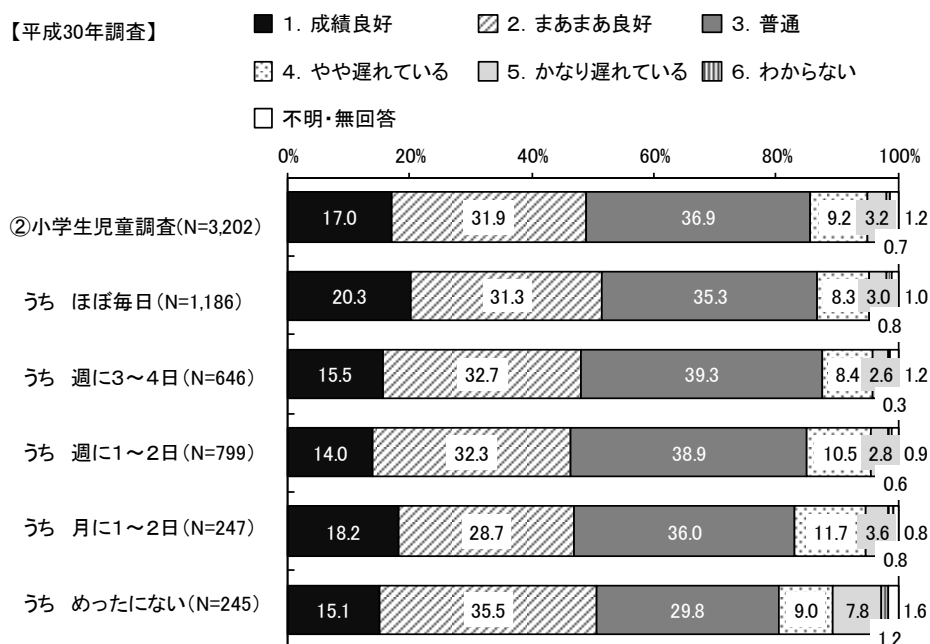
《学校での成績（過去も含む）》

「貧困線以下の所得の世帯」では、「遅れている」（やや遅れている＋かなり遅れている）の割合が全体よりも高くなっています。



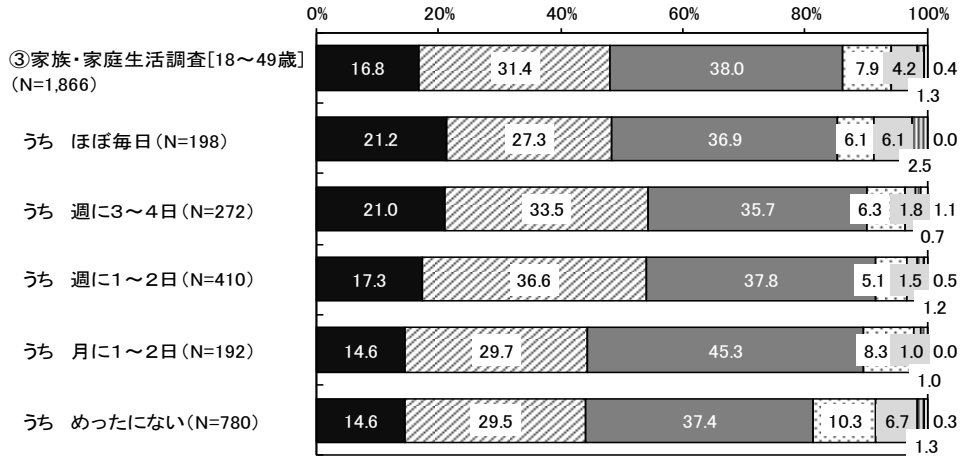
《子どもに勉強を教える頻度別 学校での勉強の成績の状況》

- ・②小学生児童調査（保護者），④－２ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭）」の一部を除いて、「普通」の割合が最も高い傾向にあります。
- ・平成２８年度調査からの経年変化では、おおむね大きな違いは見られませんでした。



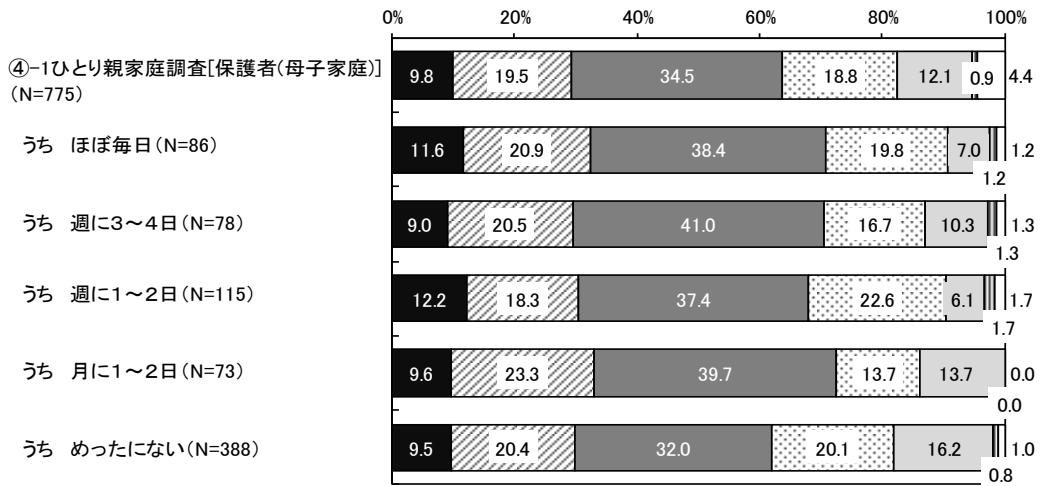
【平成30年調査】

- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▤ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▩ 6. わからない
- 不明・無回答



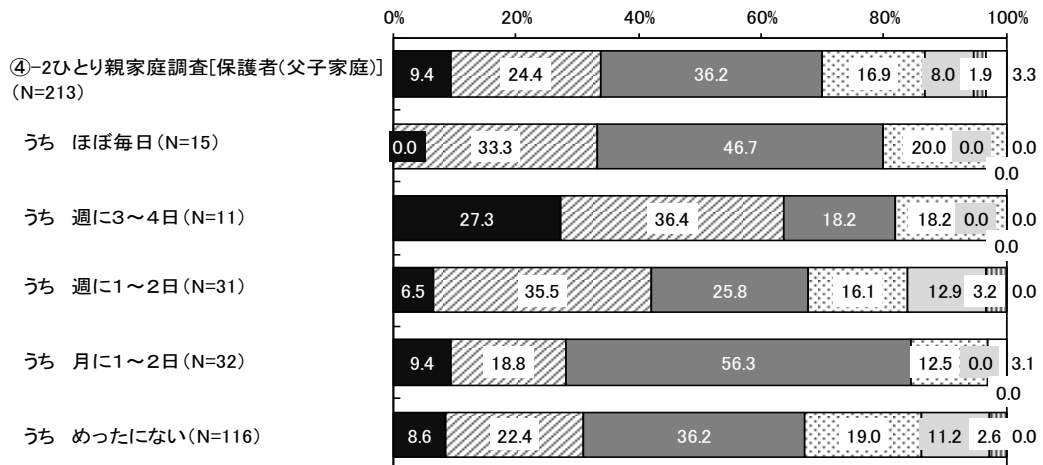
【平成30年調査】

- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▤ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▩ 6. わからない
- 不明・無回答



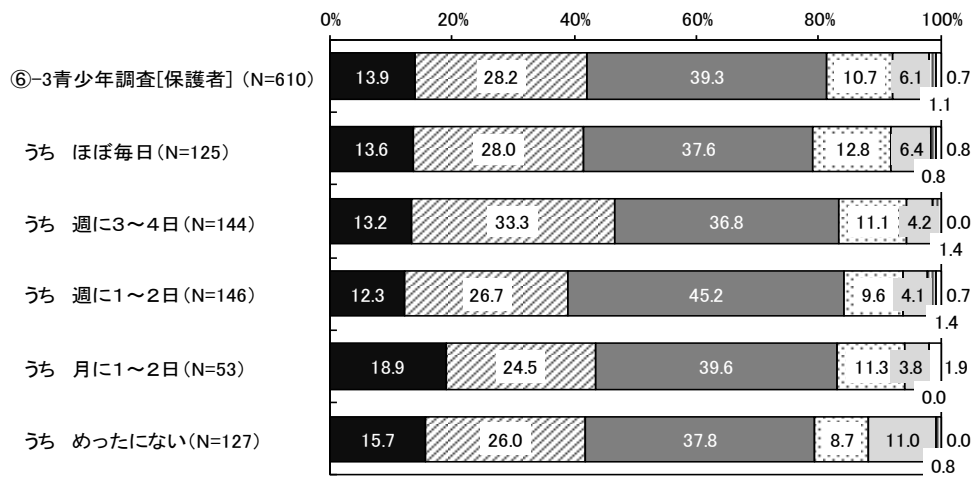
【平成30年調査】

- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▤ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▩ 6. わからない
- 不明・無回答



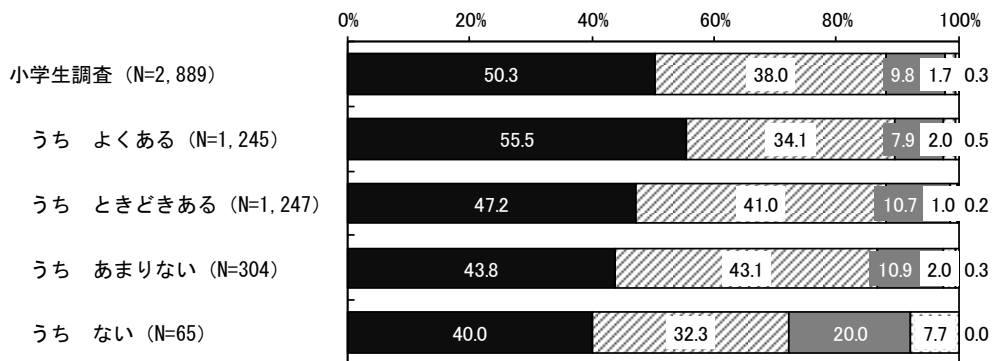
【平成30年調査】

- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
- 不明・無回答



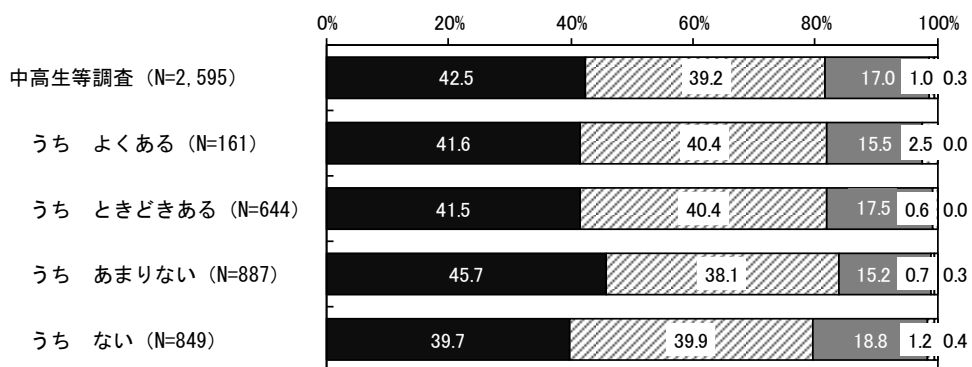
【平成28年調査】

- 1. 良好 ▨ 2. 普通 ■ 3. 遅れている
- ▩ 4. 分からない □ 不明・無回答



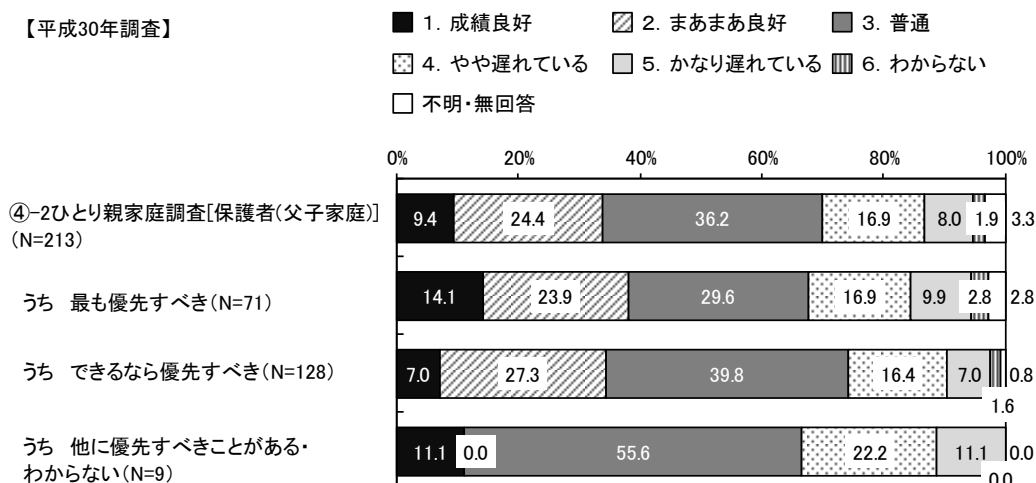
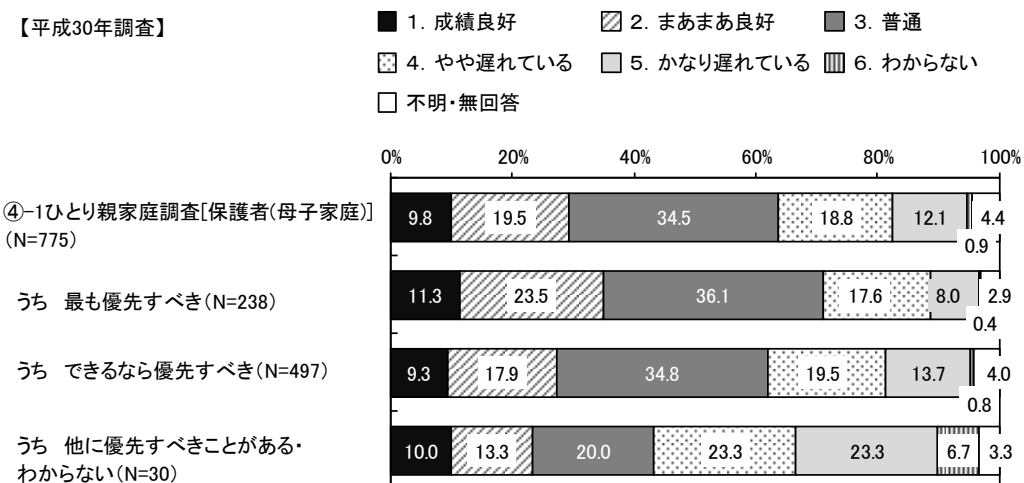
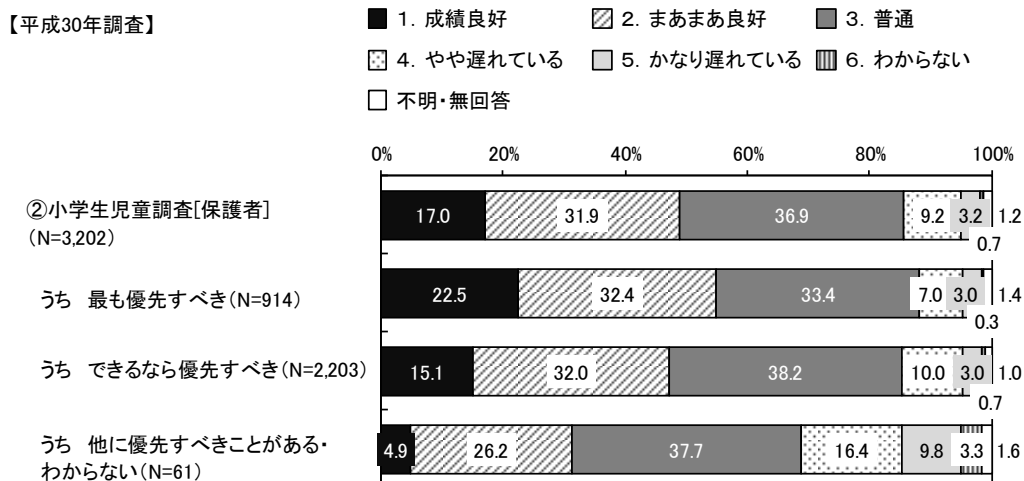
【平成28年調査】

- 1. 良好 ▨ 2. 普通 ■ 3. 遅れている
- ▩ 4. 分からない □ 不明・無回答



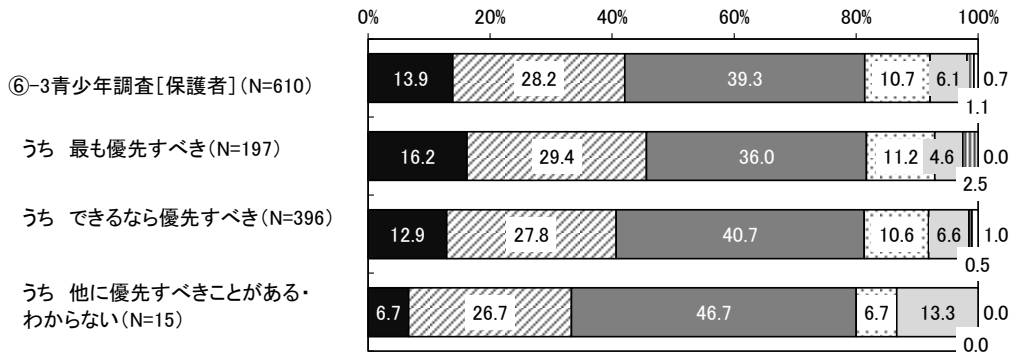
《子育てにかかる時間の優先度別 学校での勉強の成績の状況》

②小学生児童調査（保護者）、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、⑥-3青少年調査（保護者）において、「最も優先すべき」の場合、「他に優先すべきことがある・わからない」よりも「成績良好」の割合が高くなっています。



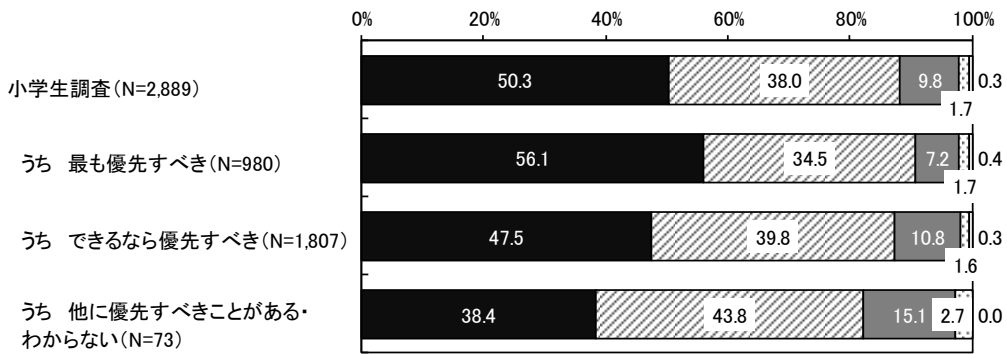
【平成30年調査】

- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
- 不明・無回答



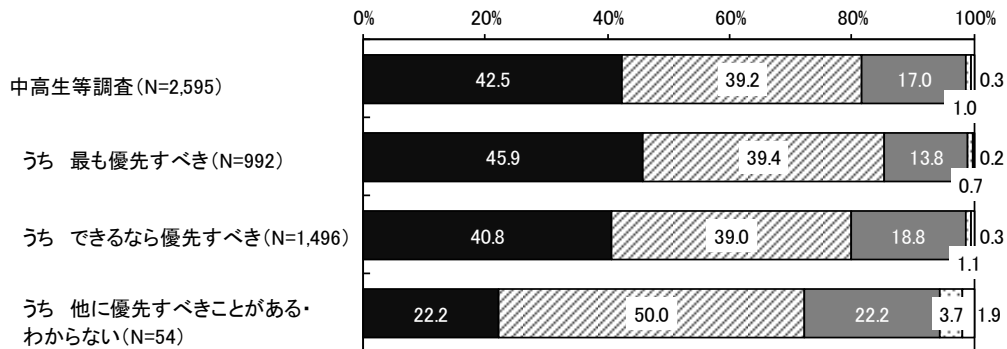
【平成28年調査】

- 1. 良好 ▨ 2. 普通 ■ 3. 遅れている
- ▩ 4. 分からない □ 不明・無回答



【平成28年調査】

- 1. 良好 ▨ 2. 普通 ■ 3. 遅れている
- ▩ 4. 分からない □ 不明・無回答

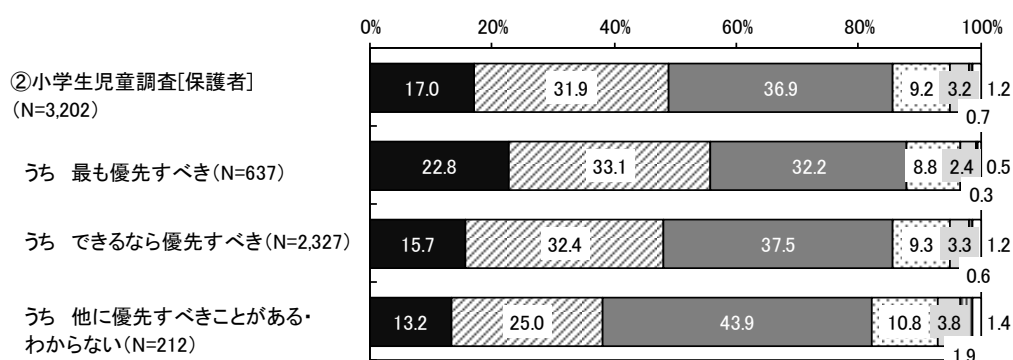


《子育てにかかるお金の優先度別 学校での勉強の成績の状況》

②小学生児童調査（保護者）、④－1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、⑥－3青少年調査（保護者）において、「最も優先すべき」の場合、「他に優先すべきことがある・わからない」よりも「成績良好」の割合が高くなっています。

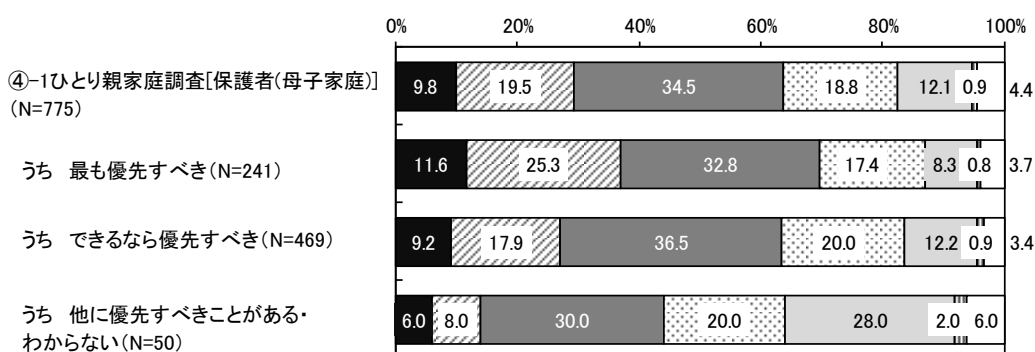
【平成30年調査】

■ 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
 ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
 □ 不明・無回答



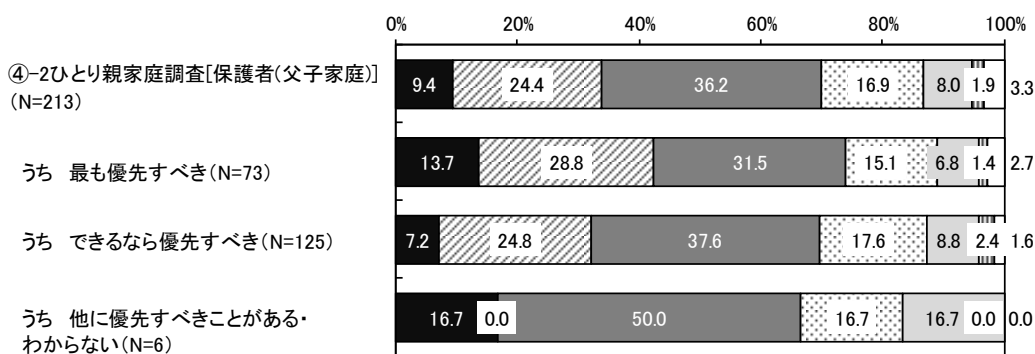
【平成30年調査】

■ 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
 ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
 □ 不明・無回答



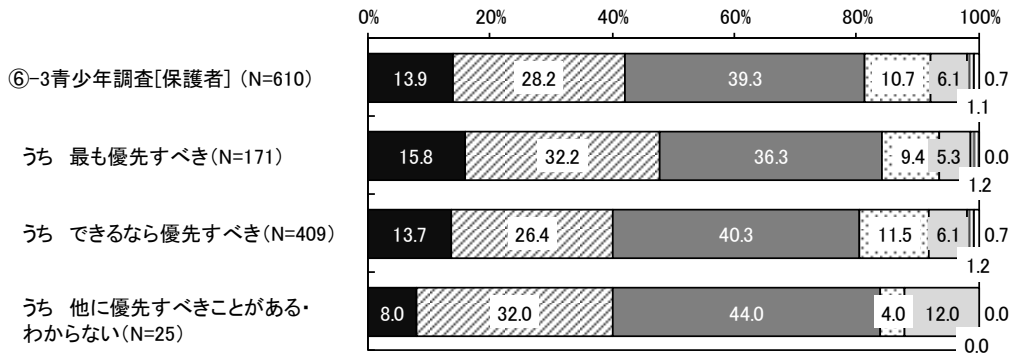
【平成30年調査】

■ 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
 ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
 □ 不明・無回答



【平成30年調査】

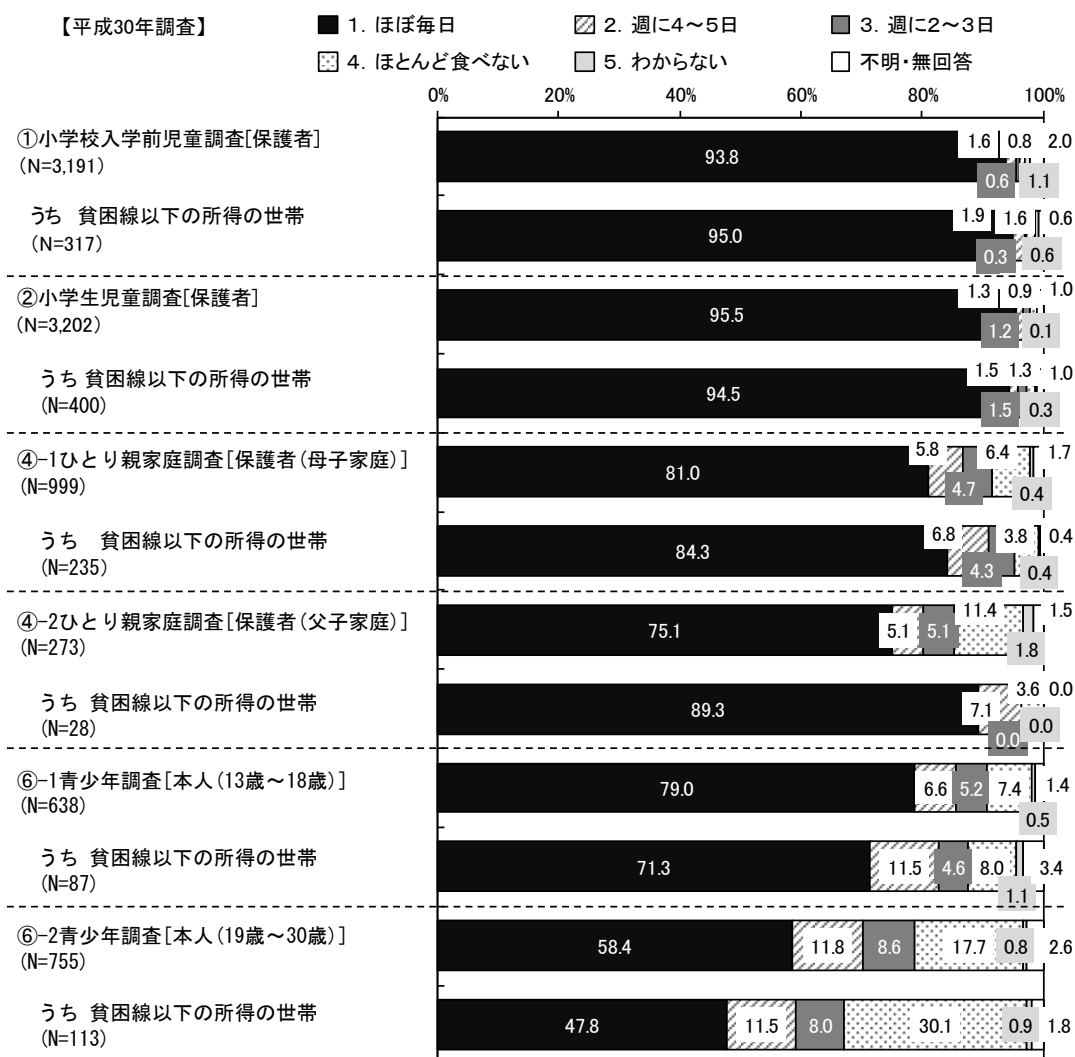
- 1. 成績良好 ▨ 2. まあまあ良好 ■ 3. 普通
- ▩ 4. やや遅れている □ 5. かなり遅れている ▨ 6. わからない
- 不明・無回答



イ 朝食・夕食の頻度 (SA)

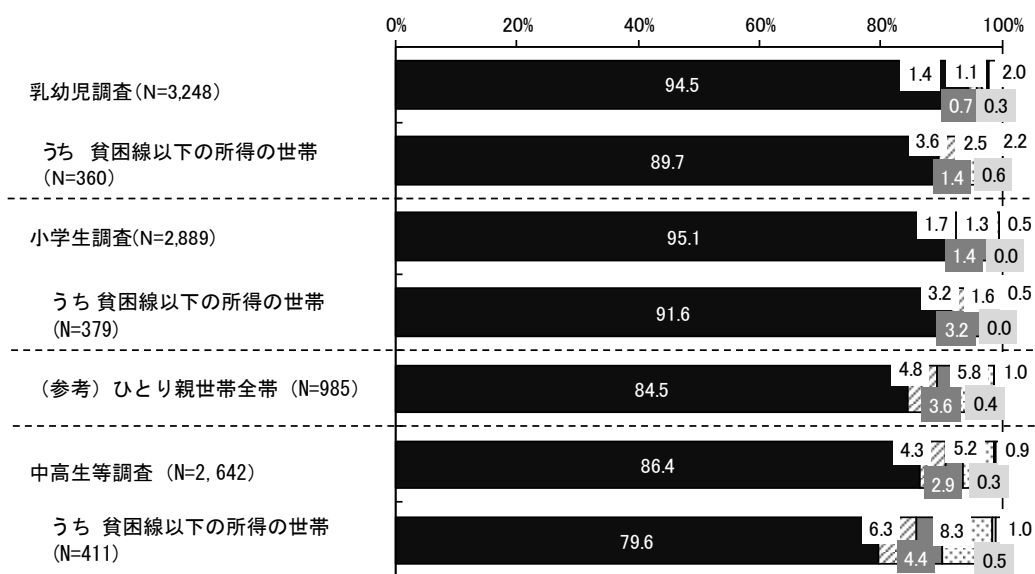
朝食

- ・全体では、すべての調査において、「ほぼ毎日」の割合が最も高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))以外のすべての調査において「ほとんど食べない」の割合が全体よりも高くなっています。
- ・⑥-2青少年調査(本人(19歳~30歳))では、全体、「貧困線以下の所得の世帯」のいずれにおいても「ほとんど食べない」の割合が他の調査よりも高くなっています。



【平成28年調査】

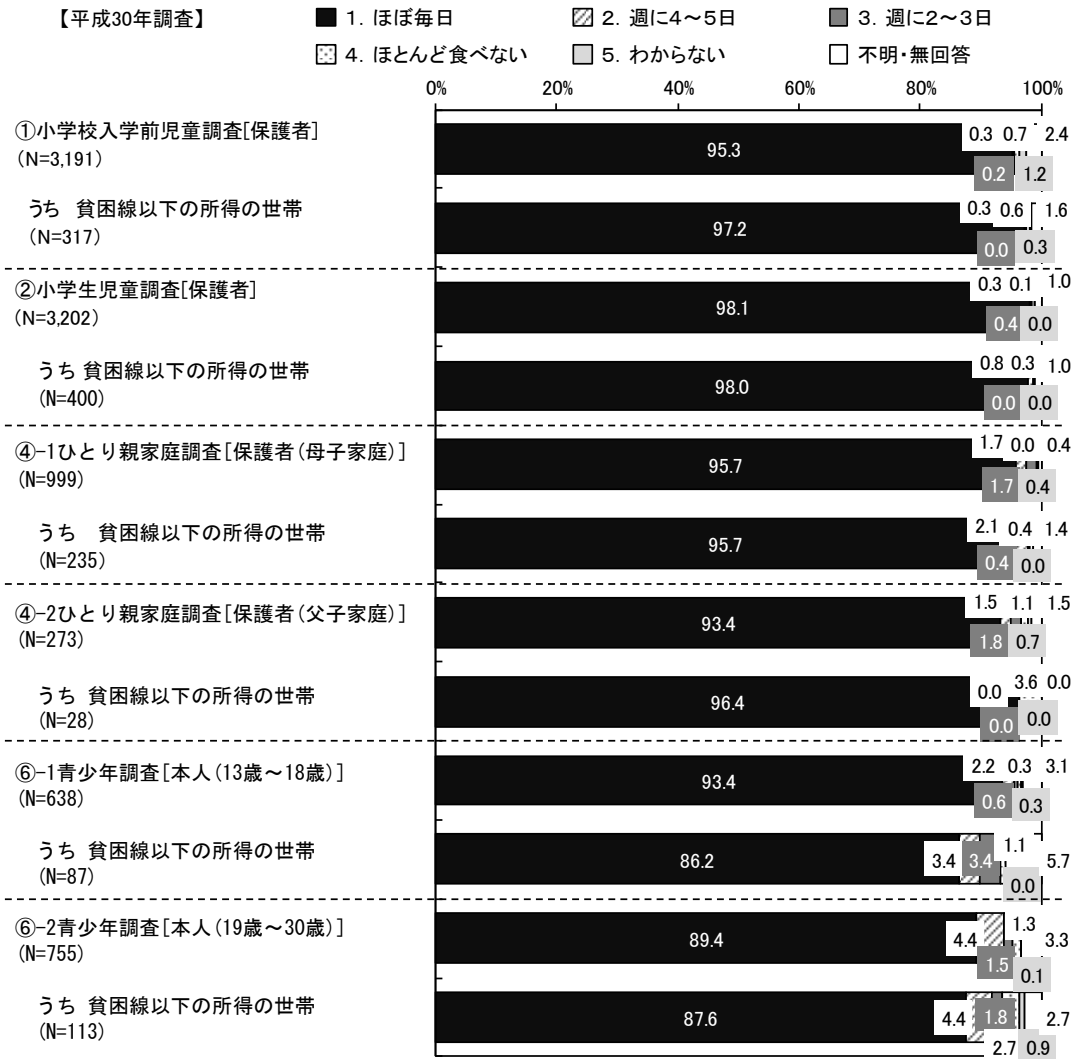
- 1. ほぼ毎日
- ▨ 2. 週に4～5日
- 3. 週に2～3日
- ▨ 4. ほとんど食べない
- 5. わからない
- 不明・無回答



夕食

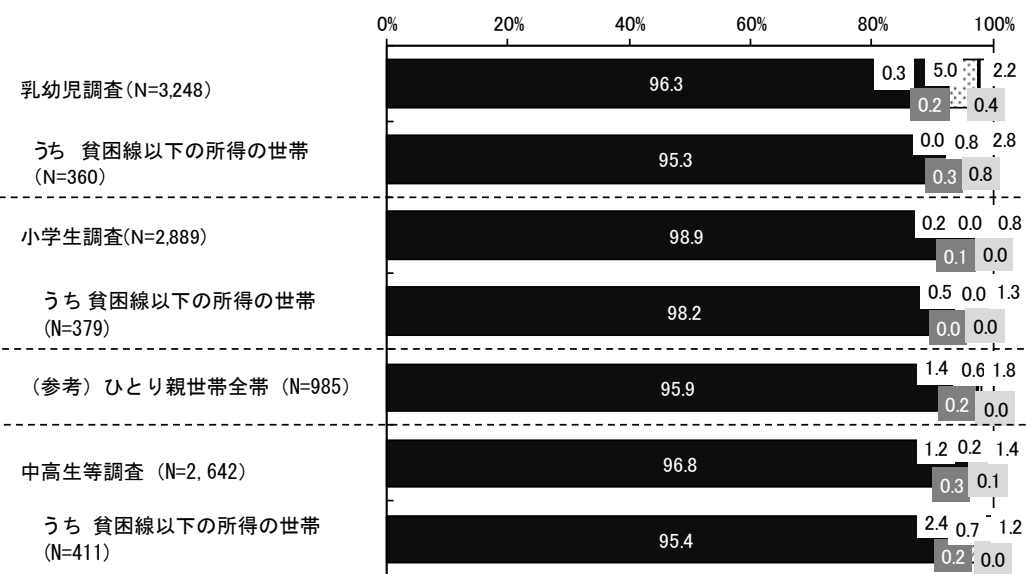
・全体では、すべての調査において、「ほぼ毎日」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

・⑥-1 青少年調査（本人（13歳～18歳））では、「貧困線以下の所得の世帯」において、また、⑥-2 青少年調査（本人（19歳～30歳））では、全体、「貧困線以下の所得の世帯」のいずれにおいても、「ほぼ毎日」の割合が他の調査よりも低くなっています。



【平成28年調査】

- 1. ほぼ毎日
- ▨ 2. 週に4～5日
- 3. 週に2～3日
- ▨ 4. ほとんど食べない
- 5. わからない
- 不明・無回答



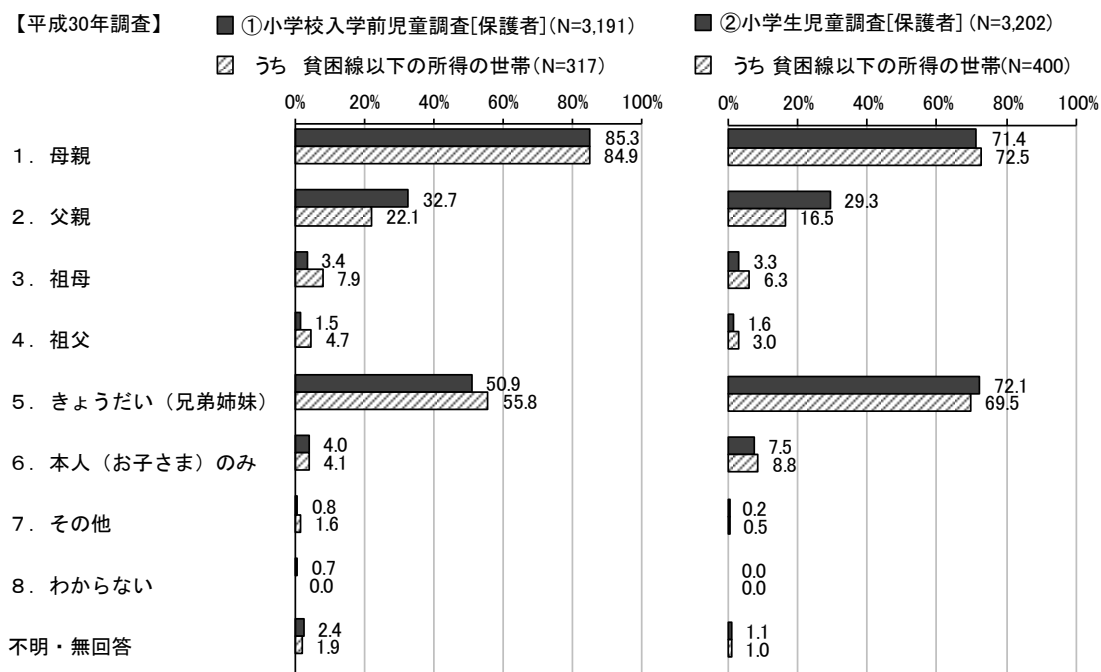
ウ 朝食・夕食を一緒に食べる人 (MA)

朝食

・全体では、①小学校入学前児童調査(保護者)、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、⑥-1青少年調査(本人(13歳~18歳))において「母親」(又は「父親・母親」)、②小学生児童調査(保護者)において「きょうだい(兄弟姉妹)」、⑥-2青少年調査(本人(19歳~30歳))において「本人(お子さま)のみ」の割合が最も高くなっており、これらは、②小学生児童調査(保護者)を除いて「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

・⑥-2青少年調査(本人(19歳~30歳))では、全体、「貧困線以下の所得の世帯」のいずれにおいても、「自分のみ」の割合が他の調査よりも高くなっています。

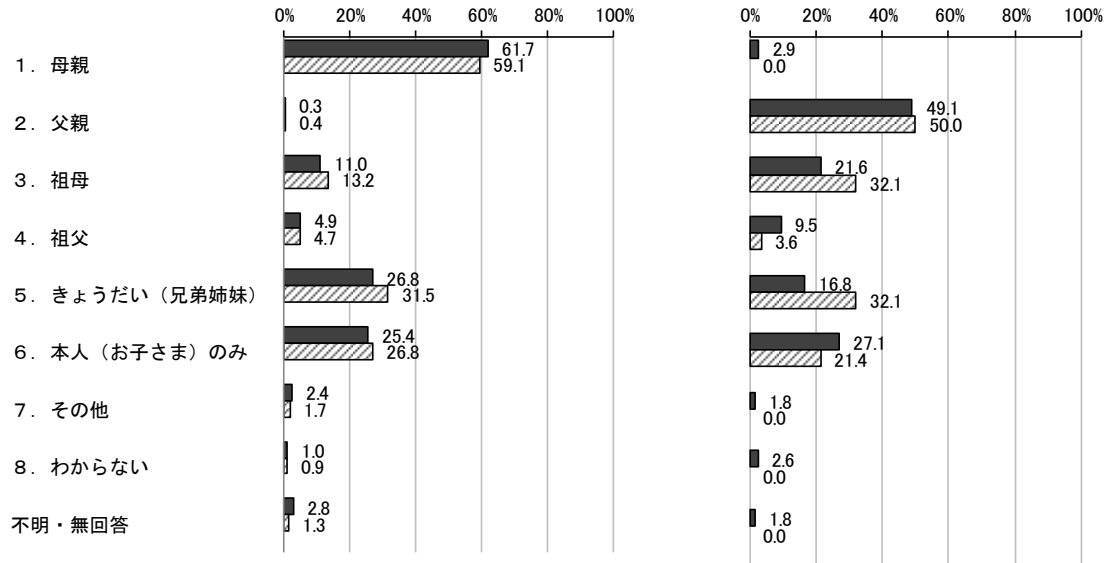
・平成28年度調査からの経年変化では、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))において、「本人(お子さま)のみ」の割合が平成28年度調査よりも高くなっています。



【平成30年調査】 ■ ④-1ひとり親家庭調査[保護者(母子家庭)] (N=999) ■ ④-2ひとり親家庭調査[保護者(父子家庭)] (N=273)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=235)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=28)



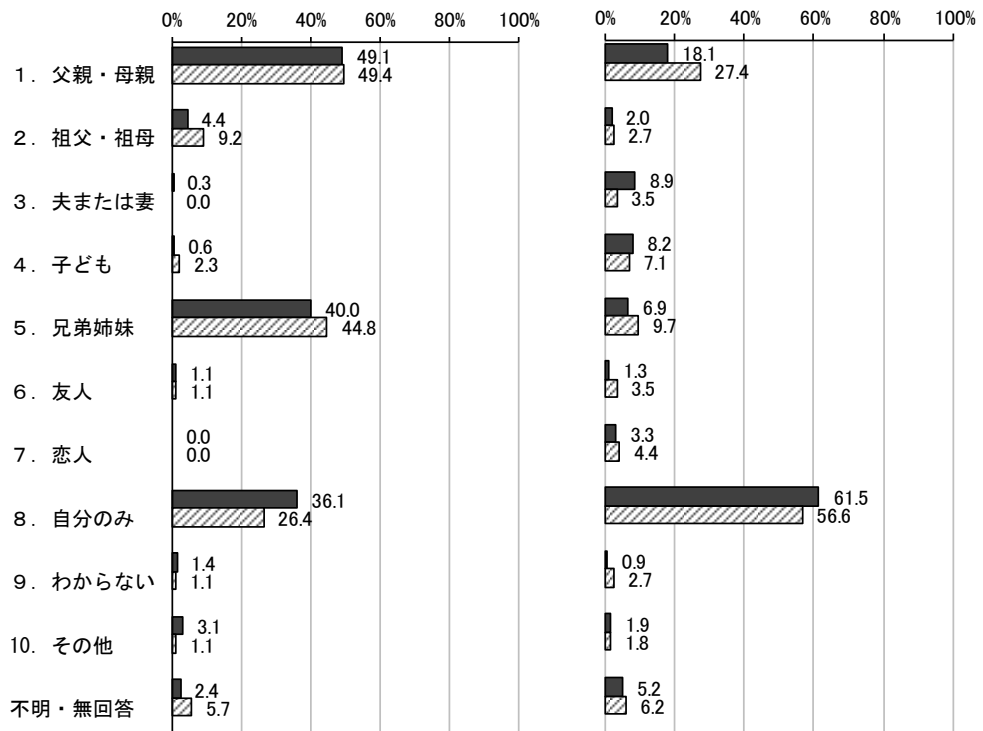
【平成30年調査】

■ ⑥-1青少年調査[本人(13歳~18歳)] (N=638)

■ ⑥-2青少年調査[本人(19歳~30歳)] (N=755)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=87)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=113)



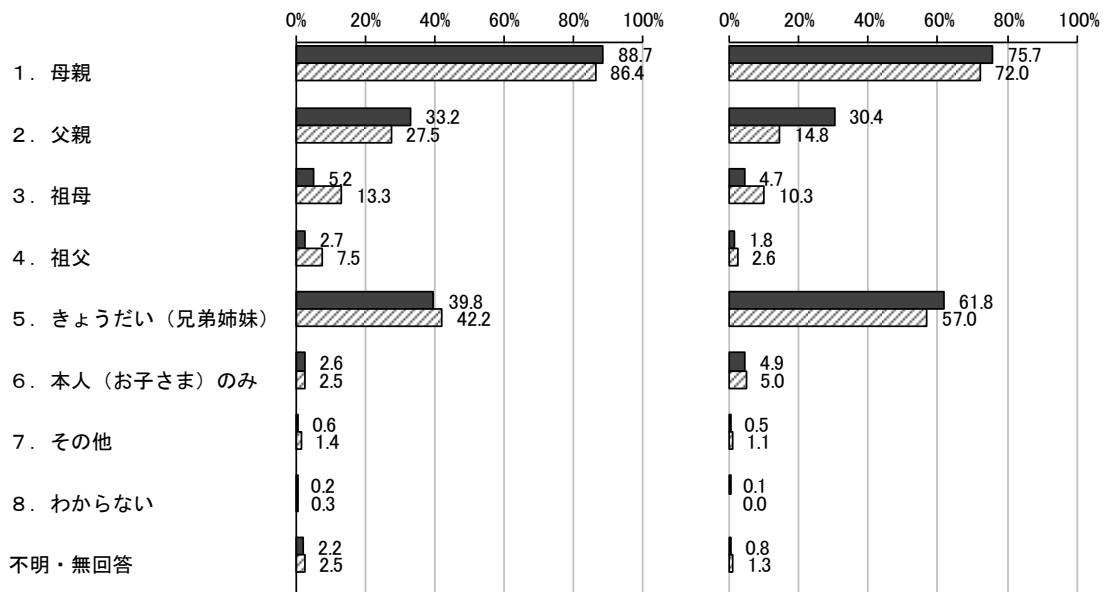
【平成28年調査】

■ 乳幼児調査(N=3,248)

■ 小学生調査(N=2,889)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=360)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=379)

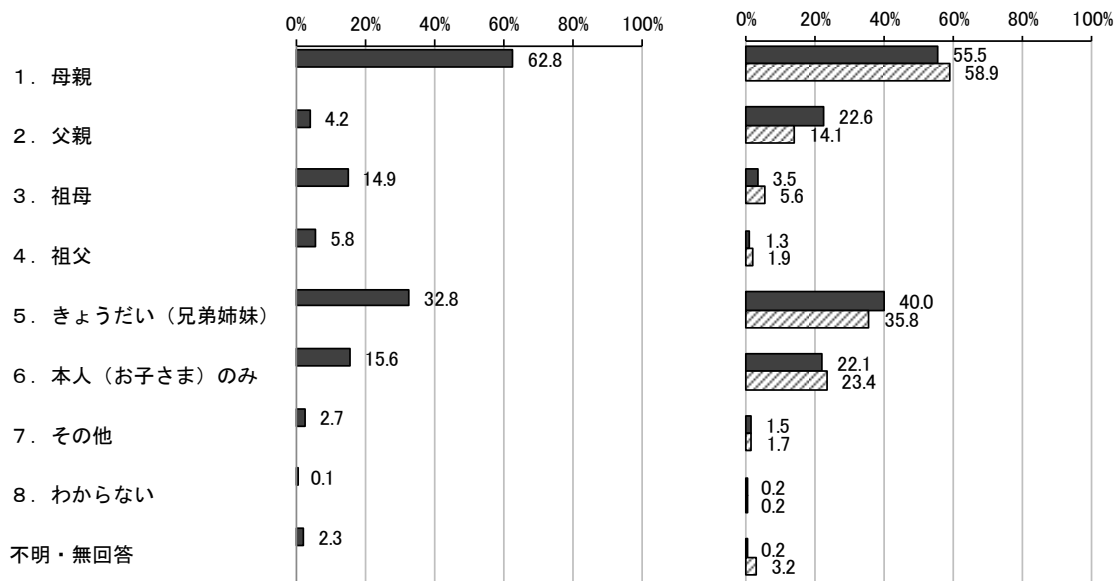


【平成28年調査】

■ (参考)ひとり親世帯全体(N=985)

■ 中学生等調査(N=2,642)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=411)



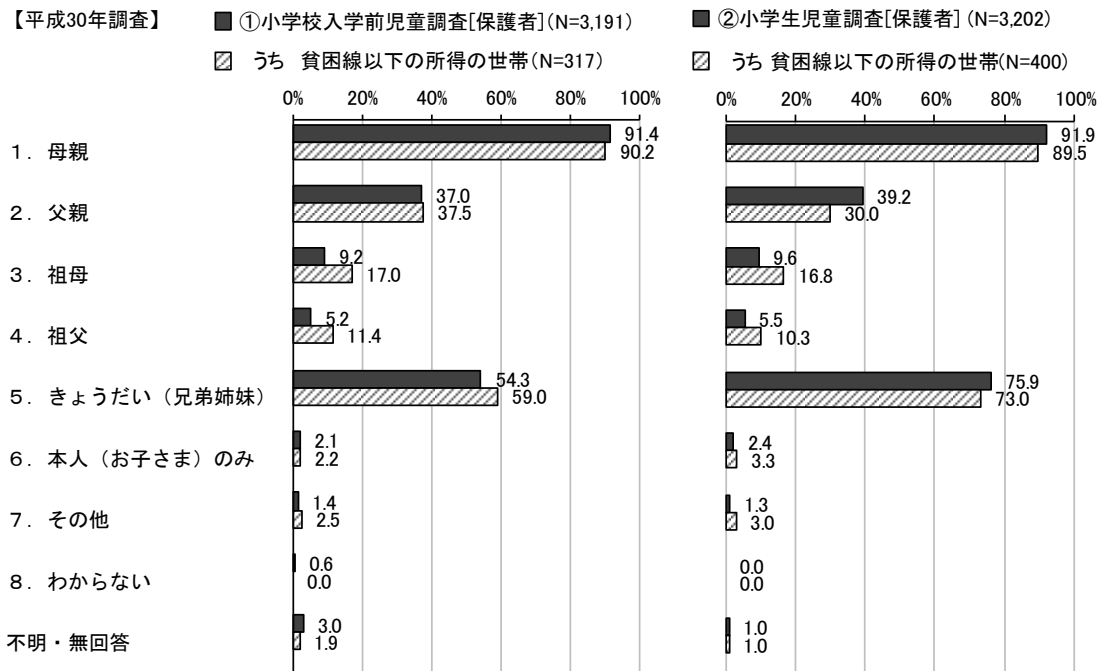
夕食

・全体では、⑥－２青少年調査（本人（１９歳～３０歳）を除くすべての調査において、「母親」（又は「父親・母親」）の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっていますが、⑥－２青少年調査（本人（１９歳～３０歳）の「貧困線以下の所得の世帯」において、「父親・母親」の割合が高くなっています。

・④－１ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、④－２ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））では、「祖母」、「祖父」の割合が他の調査よりも高い傾向となっています。

・⑥－２青少年調査（本人（１９歳～３０歳）では、全体、「貧困線以下の所得の世帯」のいずれにおいても、「自分のみ」の割合が他の調査よりも高い傾向となっています。

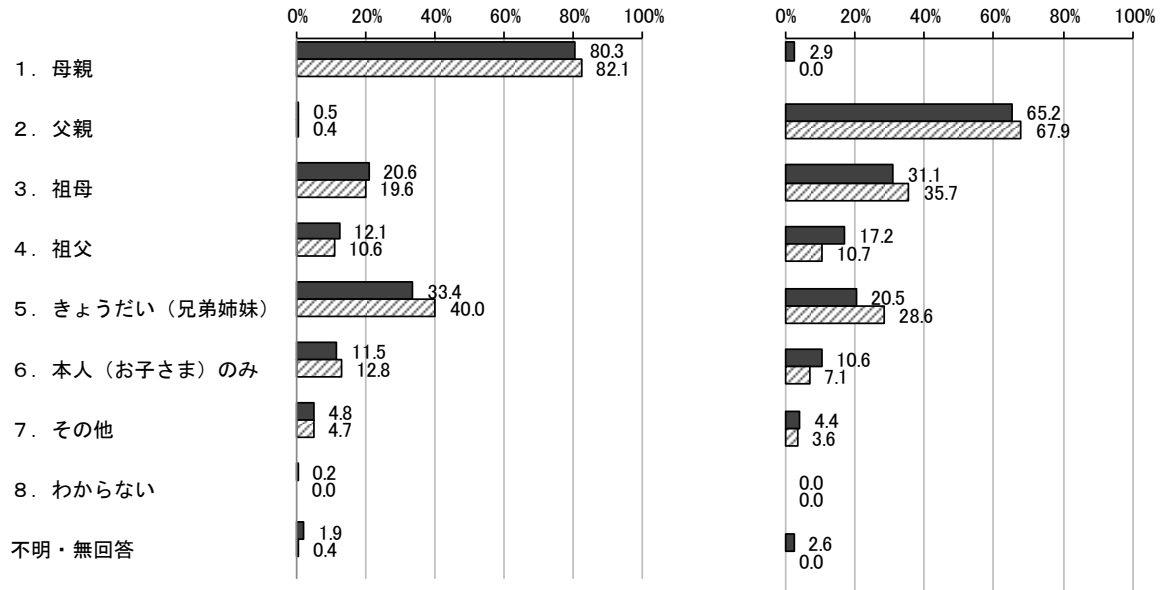
・平成２８年度調査からの経年変化では、④ひとり親家庭調査において、「本人（お子様）のみ」の割合が平成２８年度調査よりも高くなっています。



【平成30年調査】 ■ ④-1ひとり親家庭調査[保護者(母子家庭)] (N=999) ■ ④-2ひとり親家庭調査[保護者(父子家庭)] (N=273)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=235)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=28)

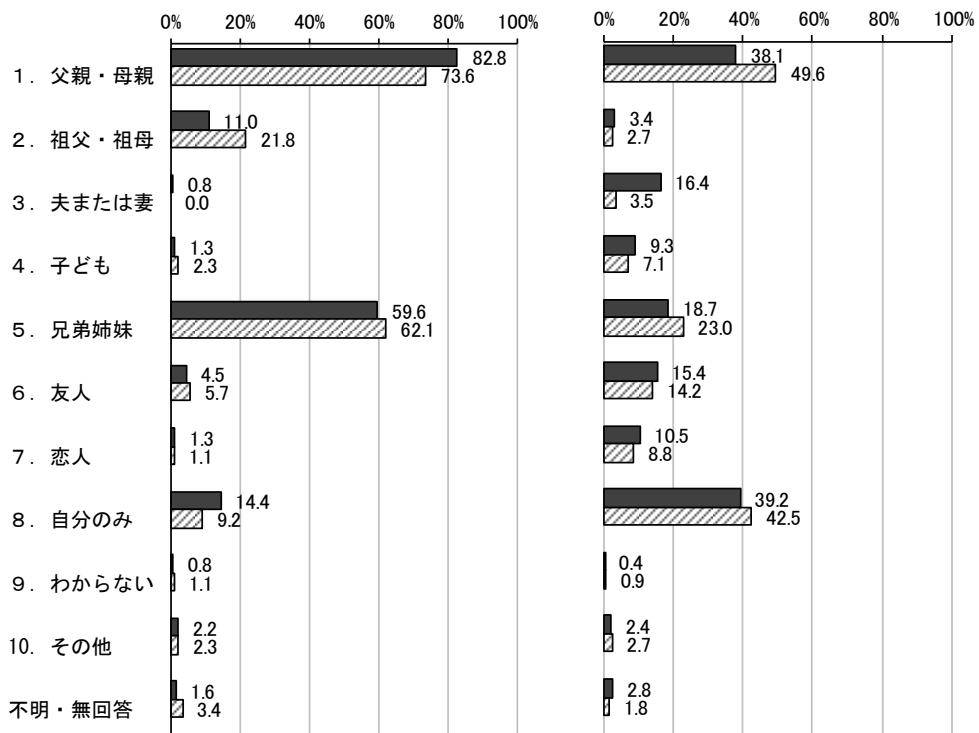


【平成30年調査】 ■ ⑥-1青少年調査[本人(13歳~18歳)] (N=638)

■ ⑥-2青少年調査[本人(19歳~30歳)] (N=755)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=87)

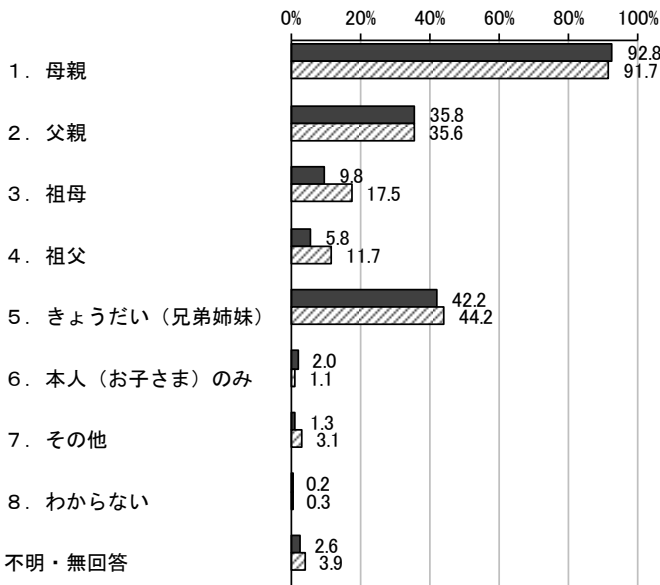
▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=113)



【平成28年調査】

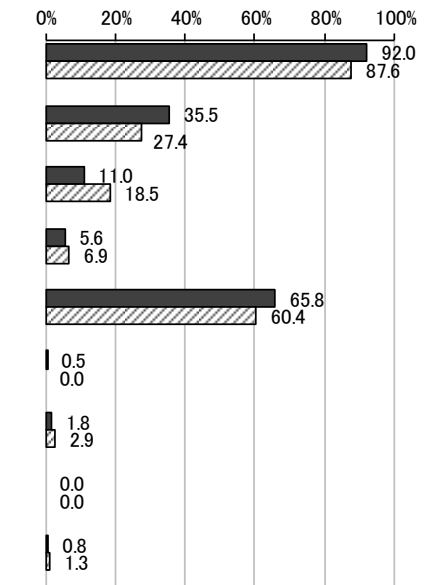
■ 乳幼児調査(N=3,248)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=360)



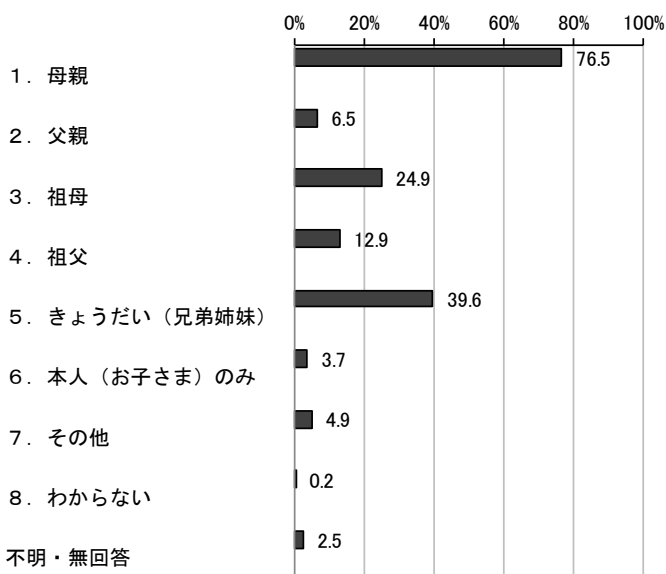
■ 小学生調査(N=2,889)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=379)



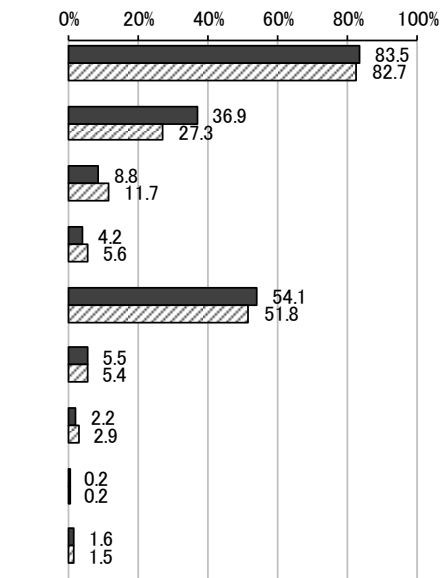
【平成28年調査】

■ (参考)ひとり親世帯全体(N=985)



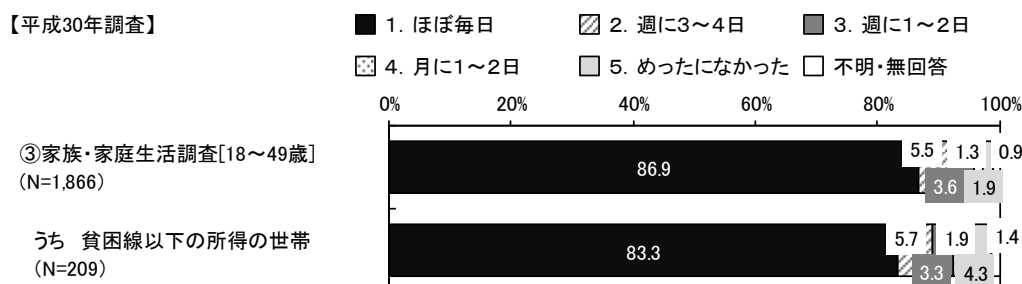
■ 中高生等調査(N=2,642)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯 (N=411)



《保護者等と一緒に食事をする機会の頻度（12歳の頃）》

全体では、「ほぼ毎日」の割合が最も高く、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっており、大きな違いは見られませんでした。しかし、「ほぼ毎日」の割合が全体よりも低くなっています。

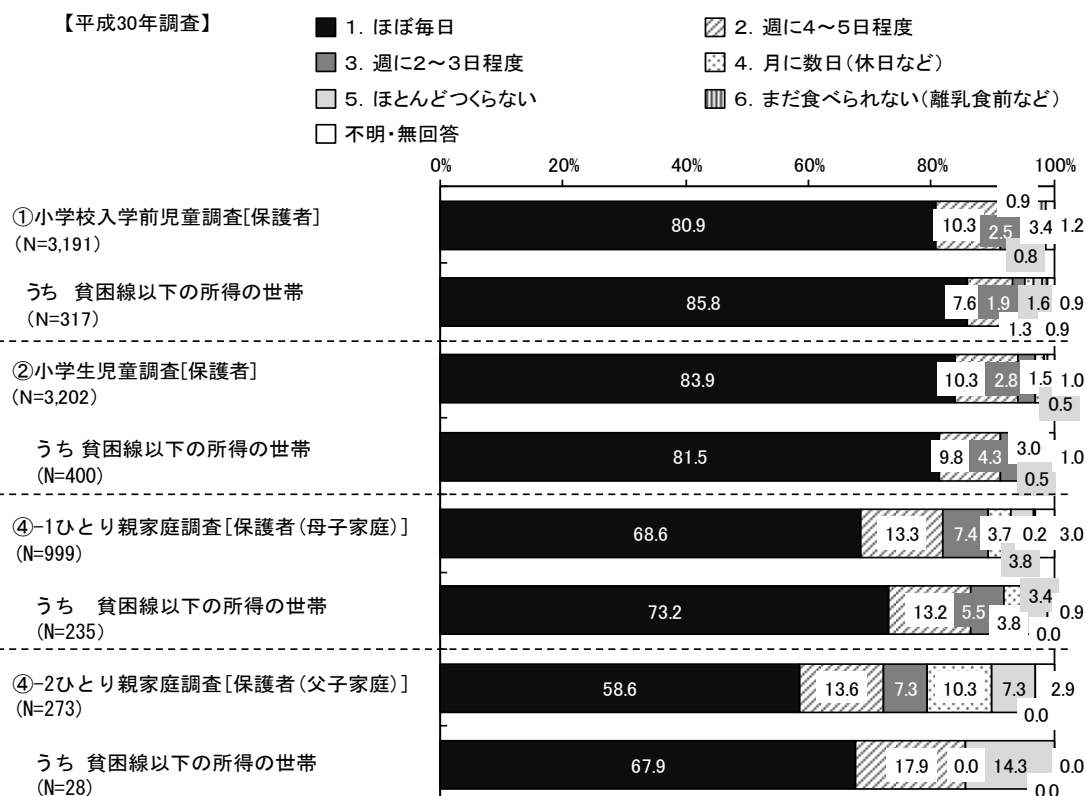


エ 子どもの夕食をつくる（料理（離乳食を含む。）する）頻度（SA）

・全体では、「ほぼ毎日」の割合が最も高く、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっており、大きな違いは見られませんでした。

・④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））では、「ほぼ毎日」の割合が他の調査よりも低くなっています。

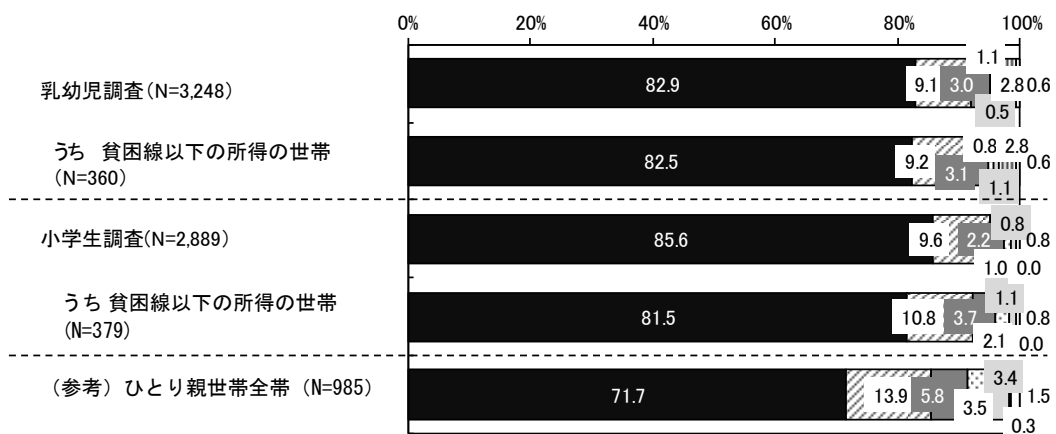
・平成28年度調査からの経年変化では、おおむね大きな違いは見られませんでした。



※「6. まだ食べられない（離乳食前など）」は①小学校入学前児童調査、④ひとり親家庭調査のみの選択肢

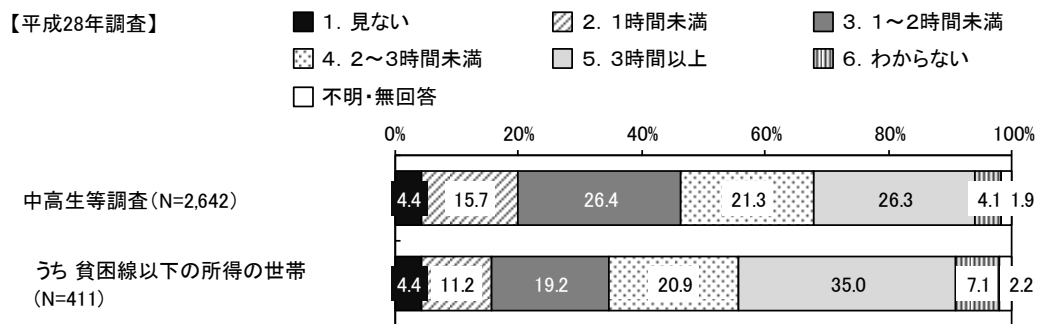
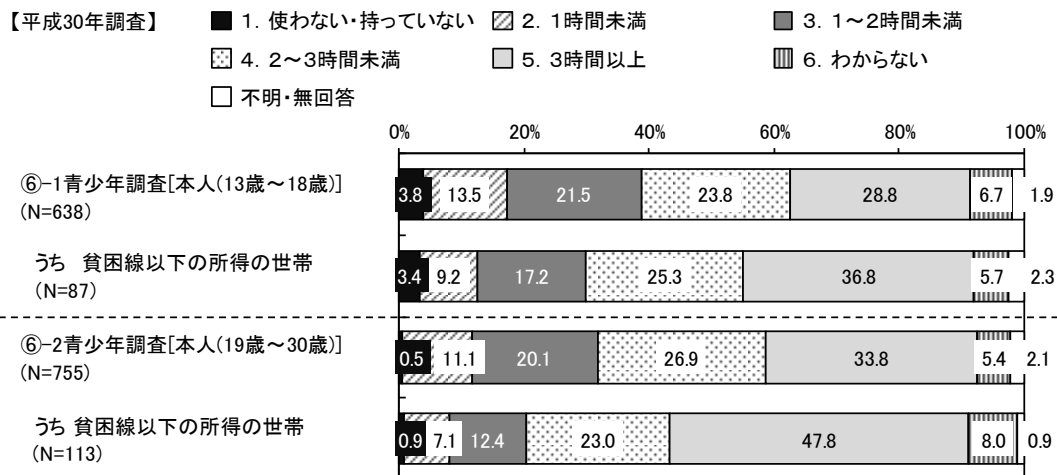
【平成28年調査】

- 1. ほぼ毎日
- 2. 週に4~5日程度
- 3. 週に2~3日程度
- 4. 月に数日(休日など)
- 5. ほとんどつぐらない
- 6. まだ食べられない(離乳食前など)
- 不明・無回答



オ 平日のスマートフォンや携帯電話、タブレット端末（インターネット利用含む）の利用時間（SA）

- ・全体では、両調査ともに、「3時間以上」の割合が最も高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、両調査において、「3時間以上」の割合が全体よりも高くなっています。
- ・平成28年度調査からの経年変化では、両調査ともに、全体の「1～2時間未満」の割合が平成28年度調査よりも低くなっています。

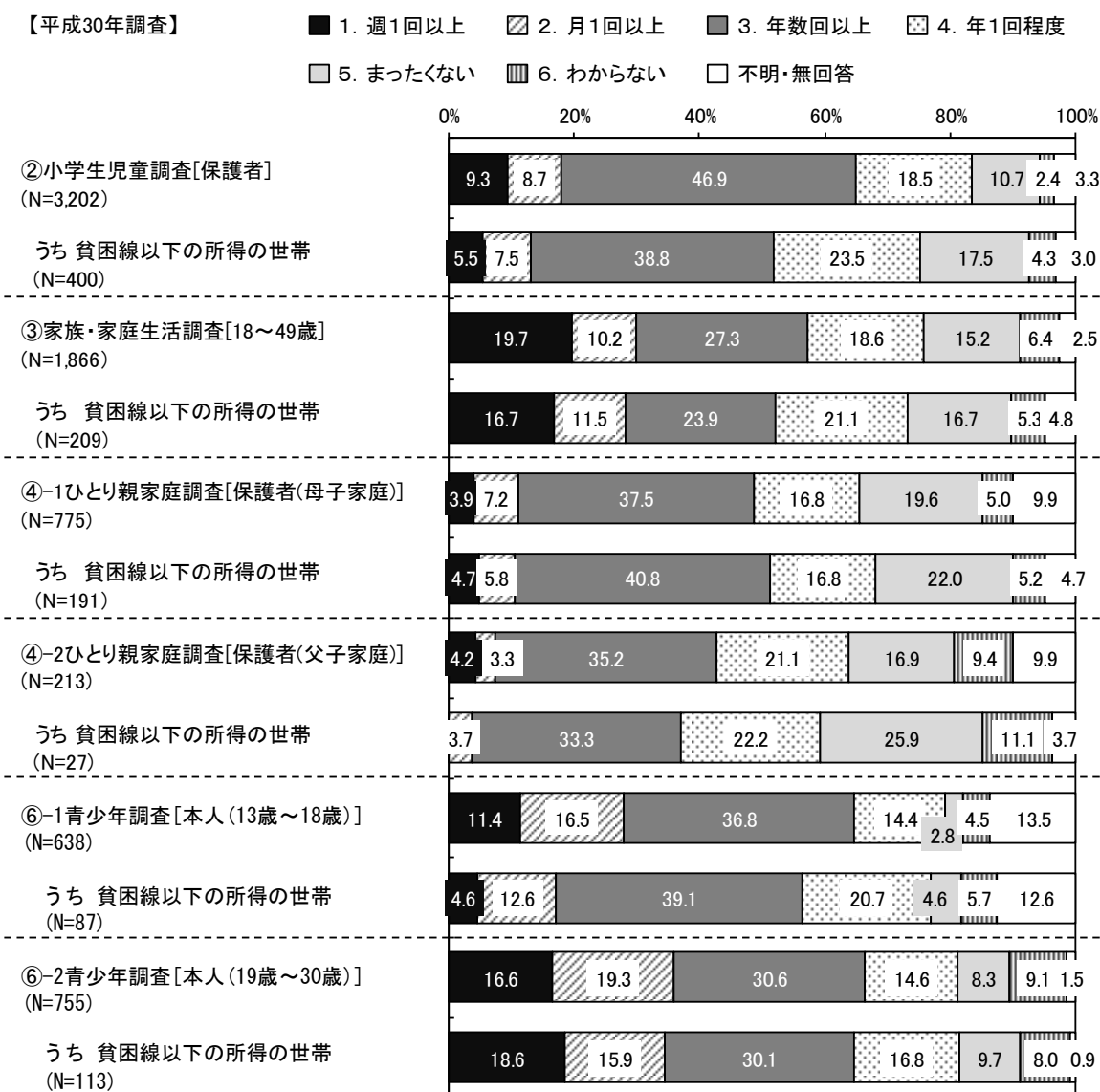


カ 過去1年間の学校の授業, 自宅以外での文化芸術活動・自然体験・スポーツ活動の頻度 (SA)

※③家族・家庭生活調査では小学生, 中学生, 高校生の頃, ⑥青少年調査 [青少年] では子ども (小学生) の時

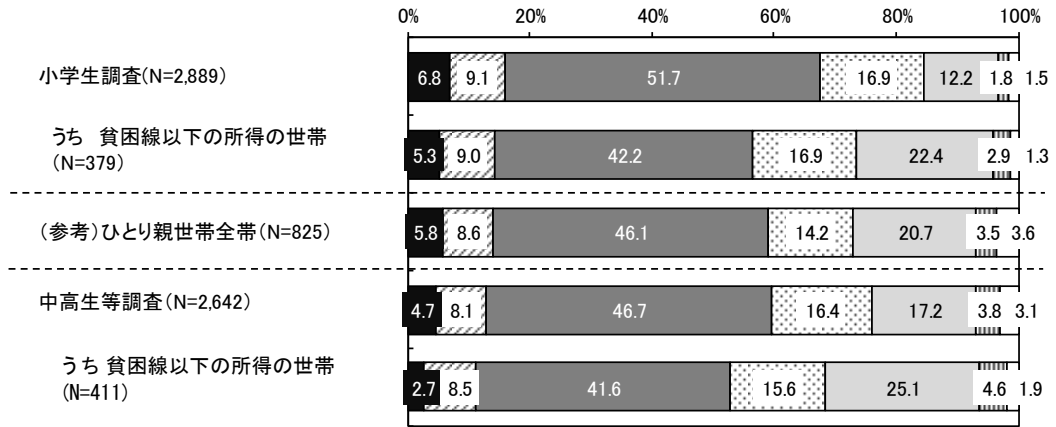
文化芸術活動

- ・全体では, すべての調査において, 「年数回以上」の割合が最も高くなっており, これらは, 「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっております。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では, すべての調査において, 「まったくない」の割合が全体よりも高い傾向となっております。
- ・平成28年度調査からの経年変化では, 全ての調査において, 全体の「まったくない」の割合が平成28年度調査よりも低くなっています。



【平成28年調査】

- 1. 週1回以上
- ▨ 2. 月1回以上
- 3. 年数回以上
- ▨ 4. 年1回程度
- 5. まったくない
- ▨ 6. わからない
- 不明・無回答

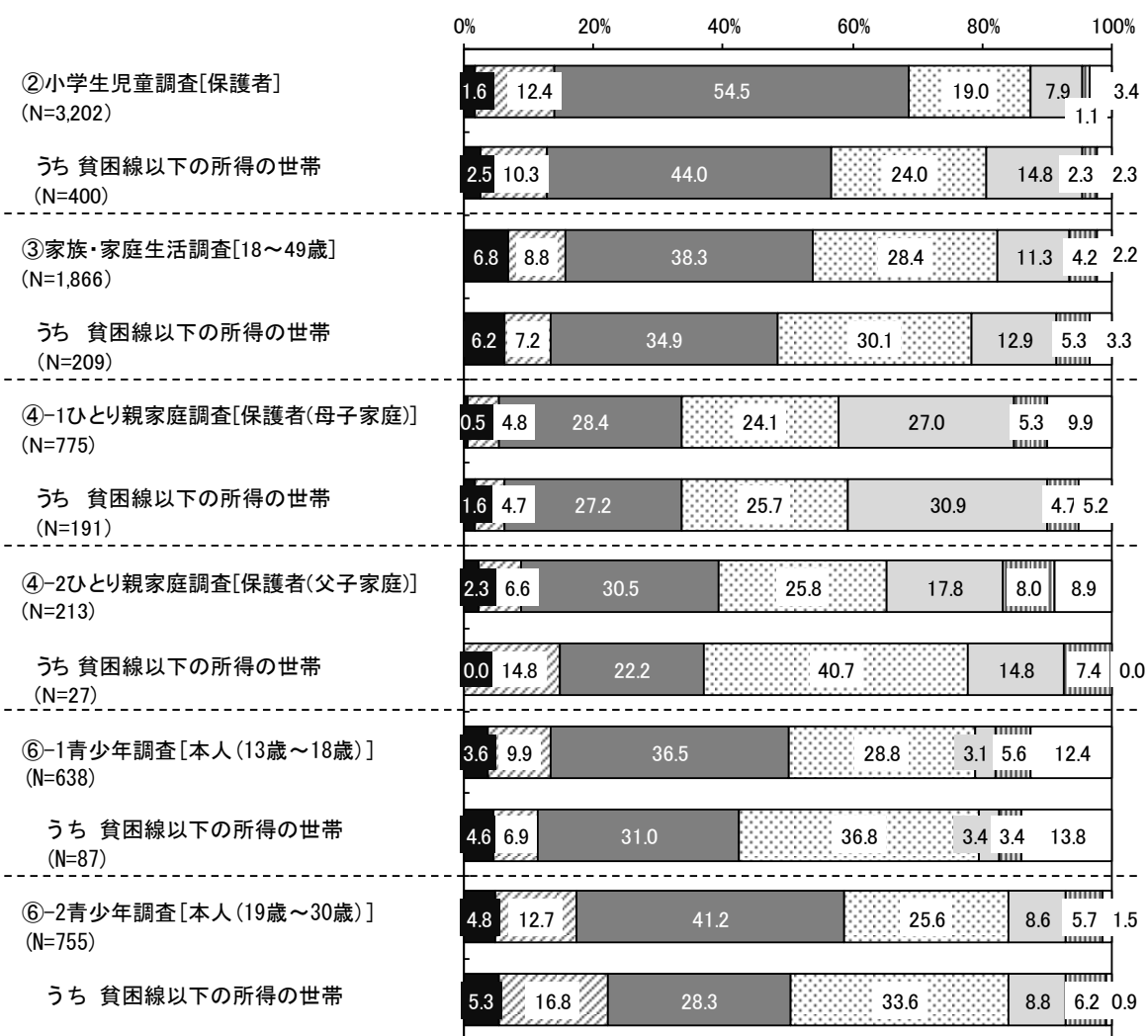


自然体験

- ・全体では、すべての調査において、「年数回以上」の割合が最も高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））を除くすべての調査において、「まったくない」の割合が全体よりも高くなっており、すべての調査において、「年数回以上」の割合が全体よりも低くなっています。
- ・平成28年度調査からの経年変化では、全ての調査において、全体の「まったくない」の割合が平成28年度調査よりも低くなっています。

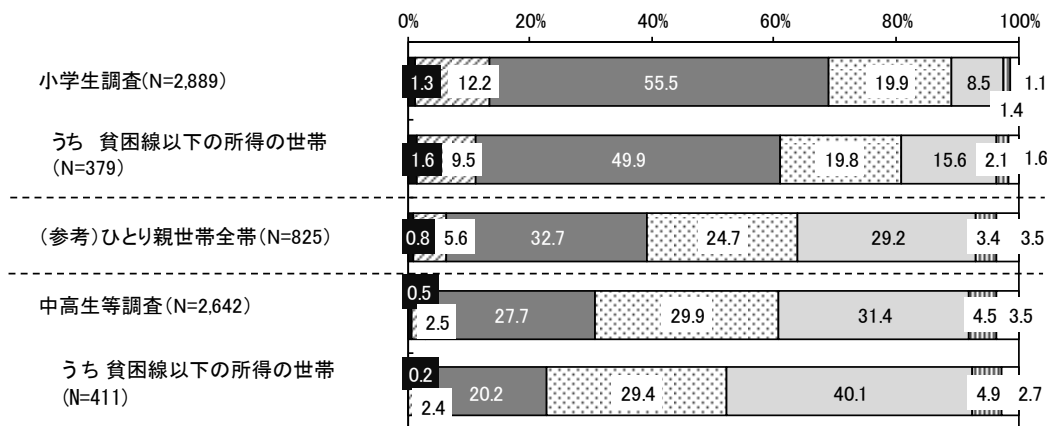
【平成30年調査】

■ 1. 週1回以上 ▨ 2. 月1回以上 ■ 3. 年数回以上 ▩ 4. 年1回程度
 □ 5. まったくない ▤ 6. わからない □ 不明・無回答



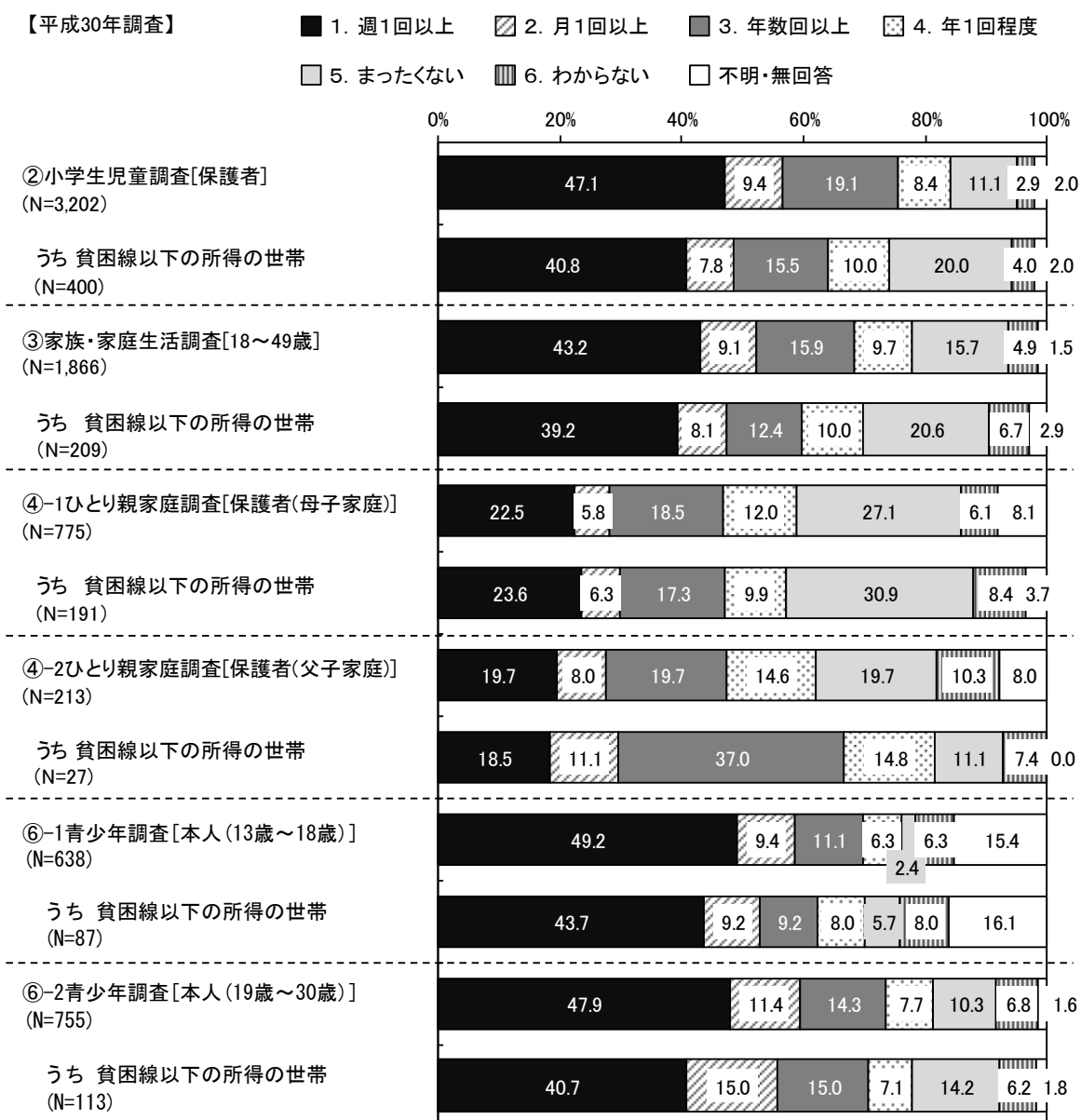
【平成28年調査】

- 1. 週1回以上
- ▨ 2. 月1回以上
- 3. 年数回以上
- ▤ 4. 年1回程度
- 5. まったくない
- ▩ 6. わからない
- 不明・無回答



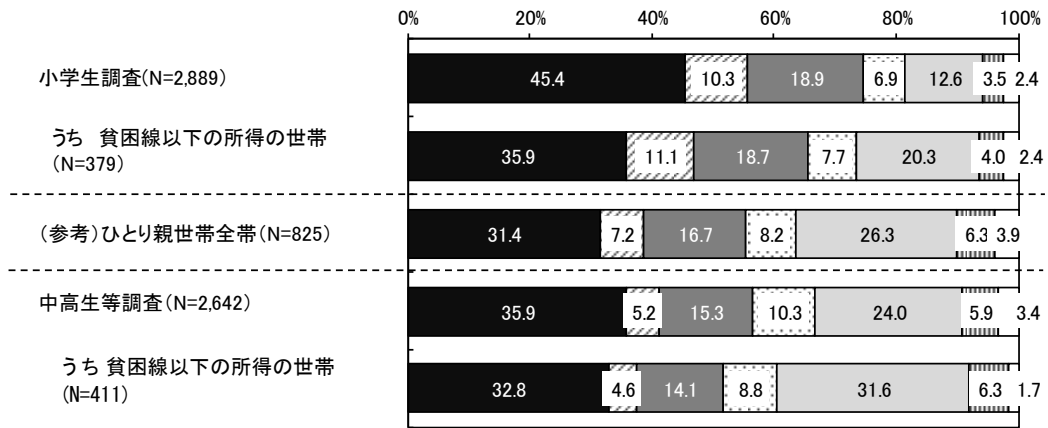
スポーツ活動

- ・全体では、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））を除くすべての調査において、「週1回以上」の割合が最も高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））を除くすべての調査において、「まったくない」の割合が全体よりも高くなっています。
- ・平成28年度調査からの経年変化では、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））、④-2ひとり親家庭調査（保護者（父子家庭））の「週1回以上」の割合が平成28年度調査よりも低くなっています。



【平成28年調査】

- 1. 週1回以上
- ▨ 2. 月1回以上
- 3. 年数回以上
- ▤ 4. 年1回程度
- 5. まったくない
- ▩ 6. わからない
- 不明・無回答



キ 自己肯定感 (SA)

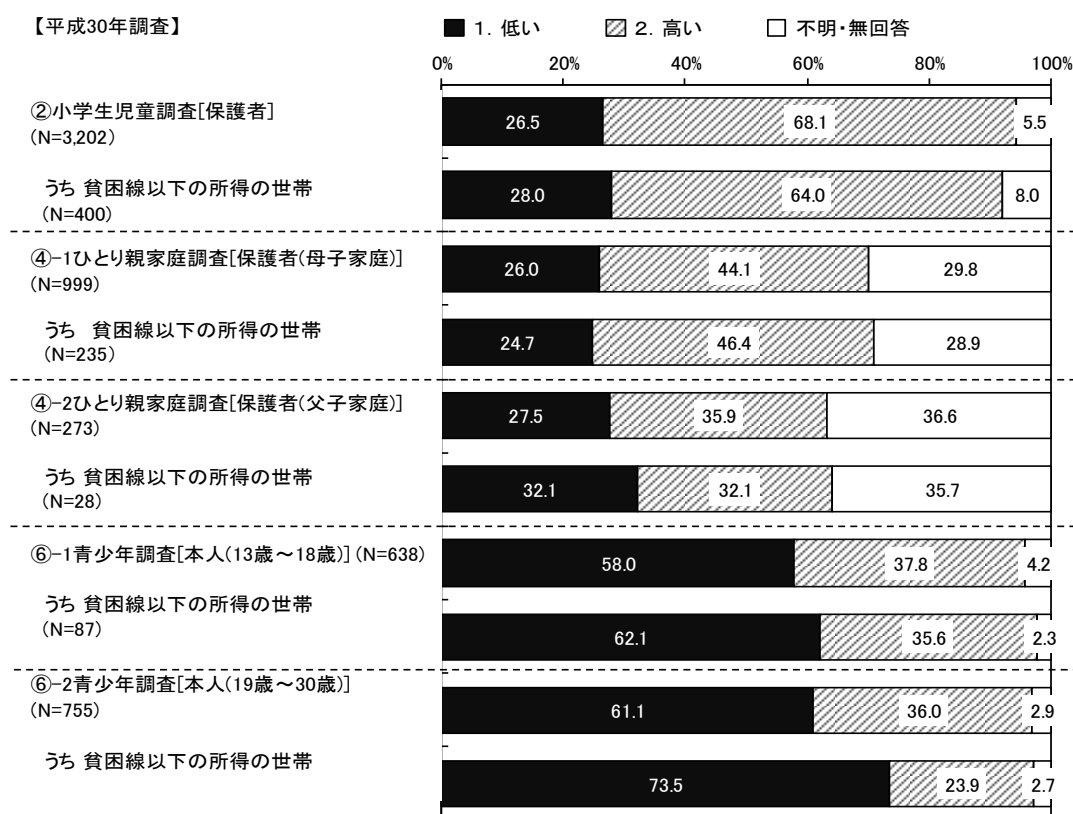
《自己肯定感の状況》

・全体では、各項目は、「将来の明るい希望を話すことができる」、「自信を持って、行動したり人と関わることができる」、「目標に向かって努力することができる」において、おおむね「できる」、「どちらかというところできる」の割合が高い傾向でしたが、⑥-1 青少年調査 (本人 (13歳～18歳)、⑥-2 青少年調査 (本人 (19歳～30歳) において、他の調査よりも「あまりない」、「ほとんどない」の割合が高い傾向にありました。また、自己肯定感の状況 (全体) は、②小学生児童調査、④-1 ひとり親家庭調査 (保護者 (母子家庭))、④-2 ひとり親家庭調査 (保護者 (父子家庭)) において、「高い」の割合が、⑥-1 青少年調査 (本人 (13歳～18歳)、⑥-2 青少年調査 (本人 (19歳～30歳) において、「低い」の割合が高くなっております。

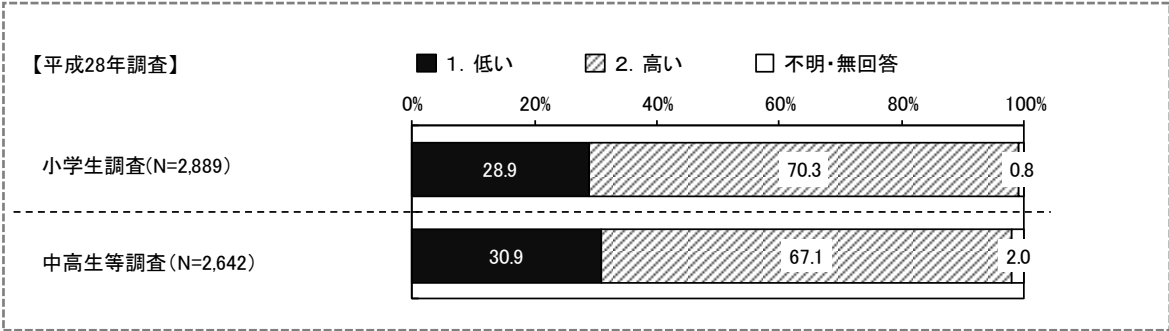
・「貧困線以下の所得の世帯」では、④-1 ひとり親家庭調査 (保護者 (母子家庭)) を除くすべての調査において、「低い」の割合が高くなっています (なお、④-1 ひとり親家庭調査 (保護者 (母子家庭))、④-2 ひとり親家庭調査 (保護者 (父子家庭)) では、「不明、無回答」の割合が3割近くを占めています)。

・平成28年度調査からの経年変化では、⑥-1 青少年調査 (本人 (13歳～18歳) において、「高い」の割合が低く、「低い」の割合が高くなっています。

【自己肯定感の状況 (全体)】



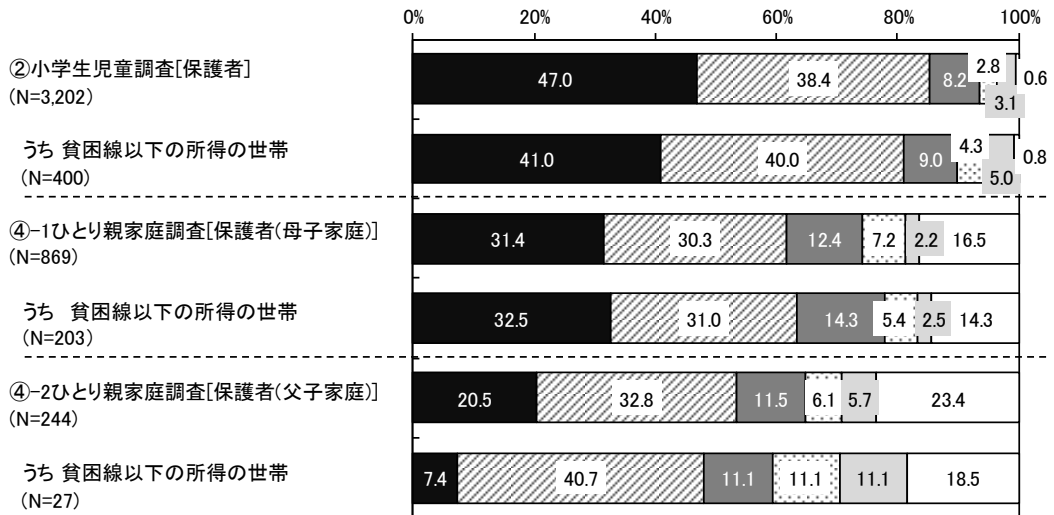
※自己肯定感の状況：「将来の明るい希望を話すことができる」、「自信を持って、行動したり人と関わることができる」、「目標に向かって努力することができる」について、すべてに「できる」又は「どちらかというところできる」と回答した人は「自己肯定感が高い」、いずれかで「どちらかというところできない」又は「できない」と回答した人は「自己肯定感が低い」としています。



①将来の明るい希望を話することができる

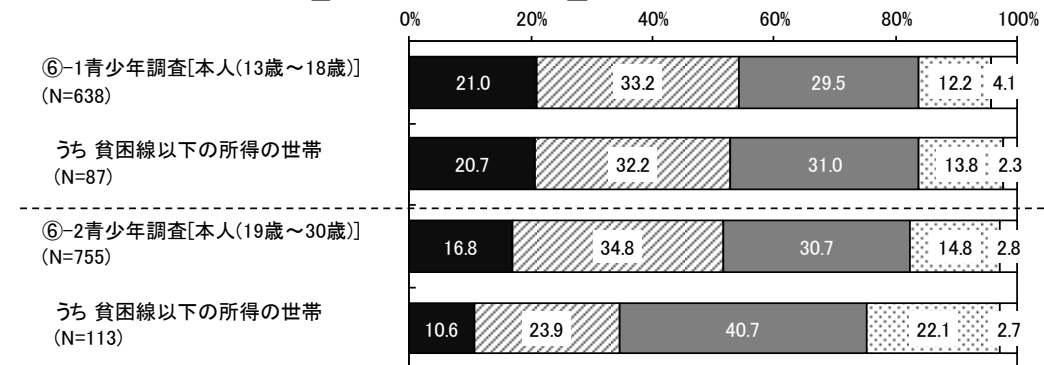
【平成30年調査】

- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答



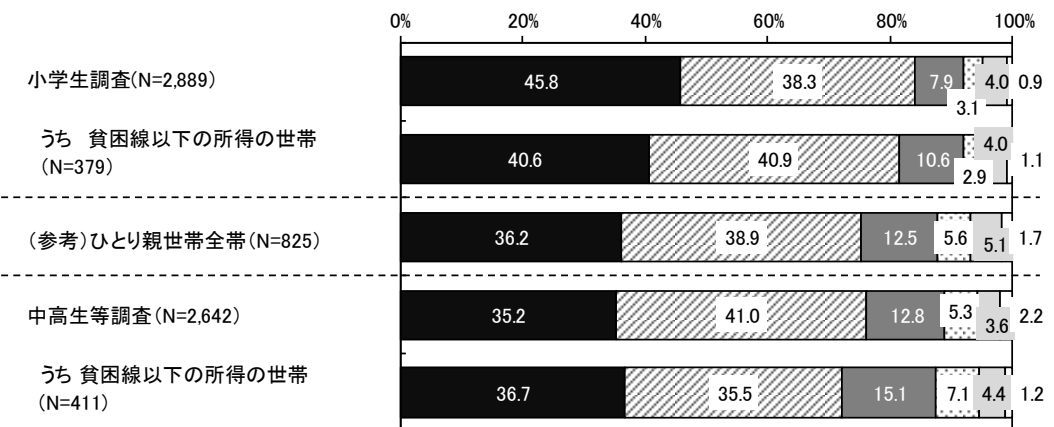
【平成30年調査】

- 1. よくある
- ▨ 2. 時々ある
- 3. あまりない
- ▨ 4. ほとんどない
- 不明・無回答



【平成28年調査】

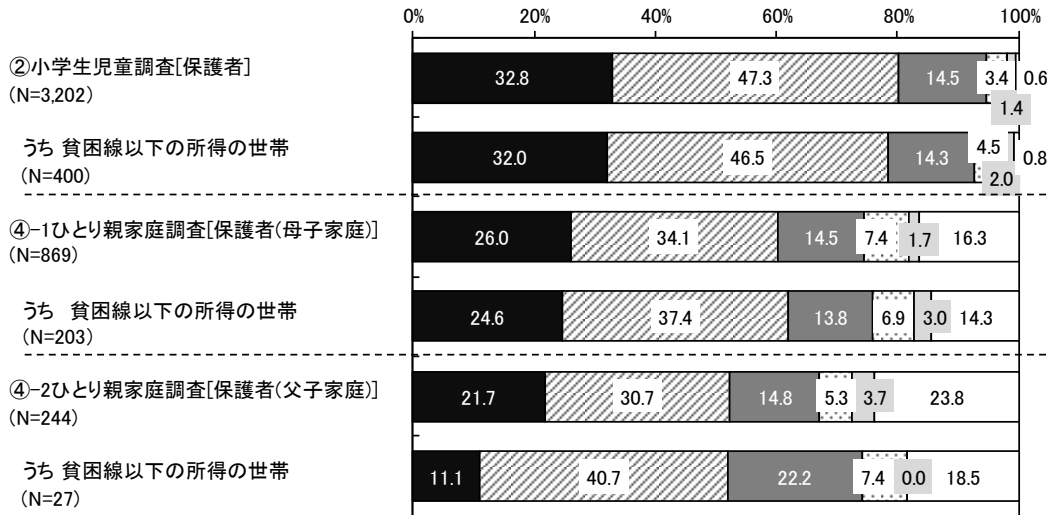
- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答



②自信を持って、行動したり人と関わることができる

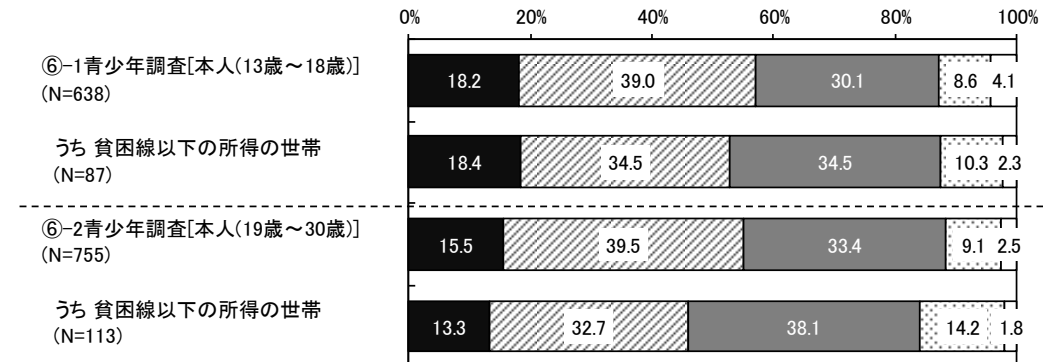
【平成30年調査】

- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答



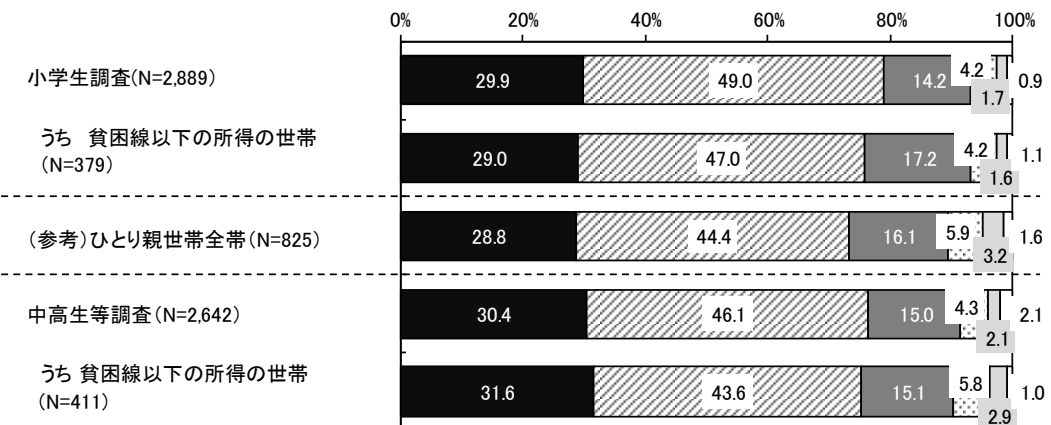
【平成30年調査】

- 1. よくある
- ▨ 2. 時々ある
- 3. あまりない
- ▨ 4. ほとんどない
- 不明・無回答



【平成28年調査】

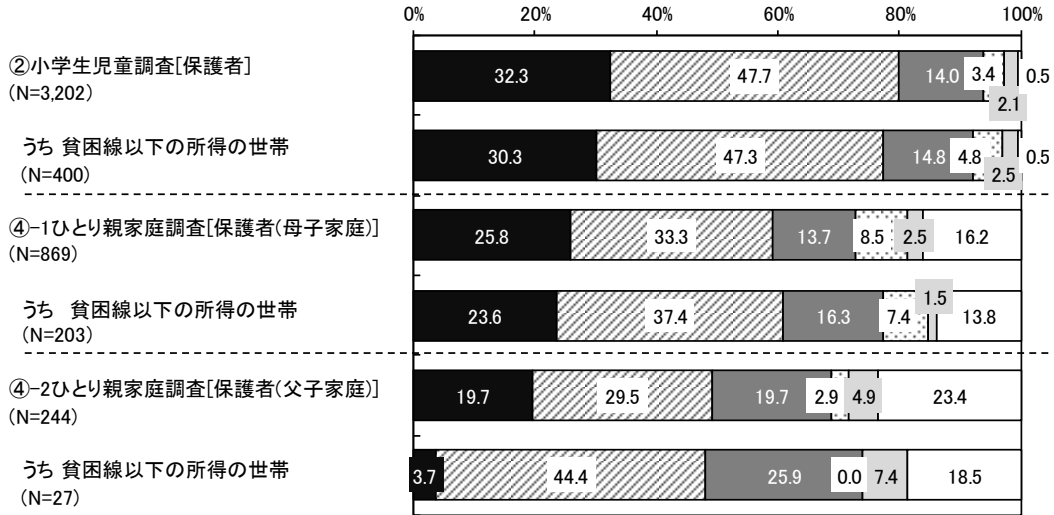
- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答



③目標に向かって努力することができる

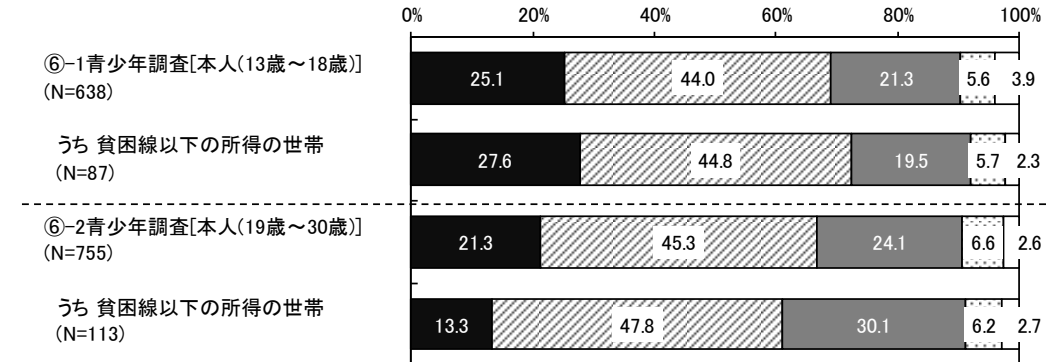
【平成30年調査】

- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答



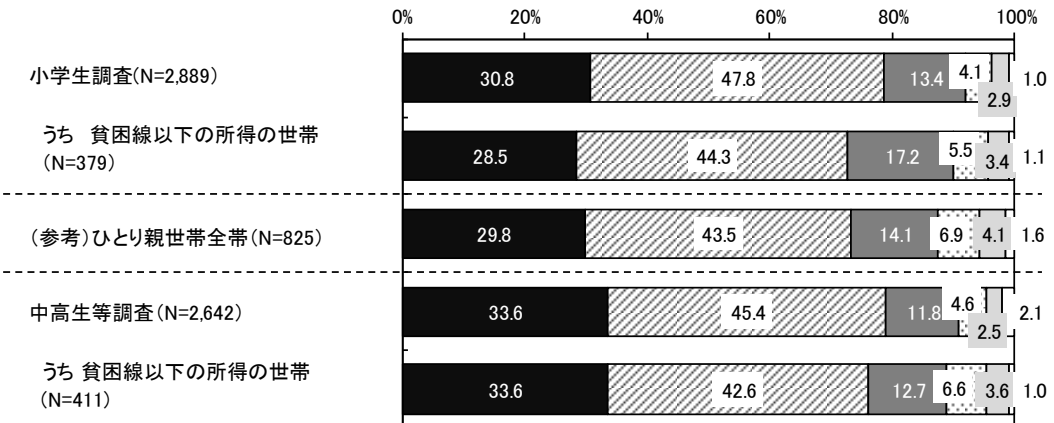
【平成30年調査】

- 1. よくある
- ▨ 2. 時々ある
- 3. あまりない
- ▨ 4. ほとんどない
- 不明・無回答



【平成28年調査】

- 1. できる
- ▨ 2. どちらかというところ
- 3. どちらかというところできない
- ▨ 4. できない
- 6. わからない
- 不明・無回答

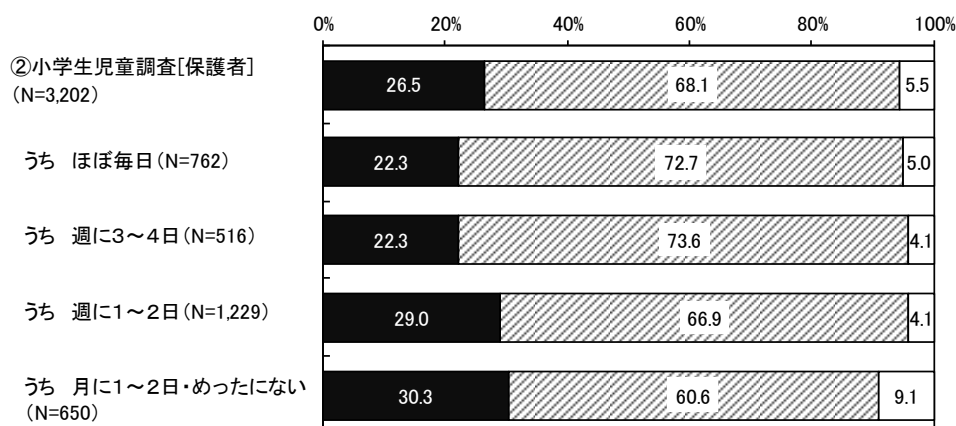


《親と遊ぶ頻度別 自己肯定感の状況》※⑥-1 ⑥-2 は遊んでもらったか

④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））を除き、「ほぼ毎日」の場合、「月に1～2日・めったにない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

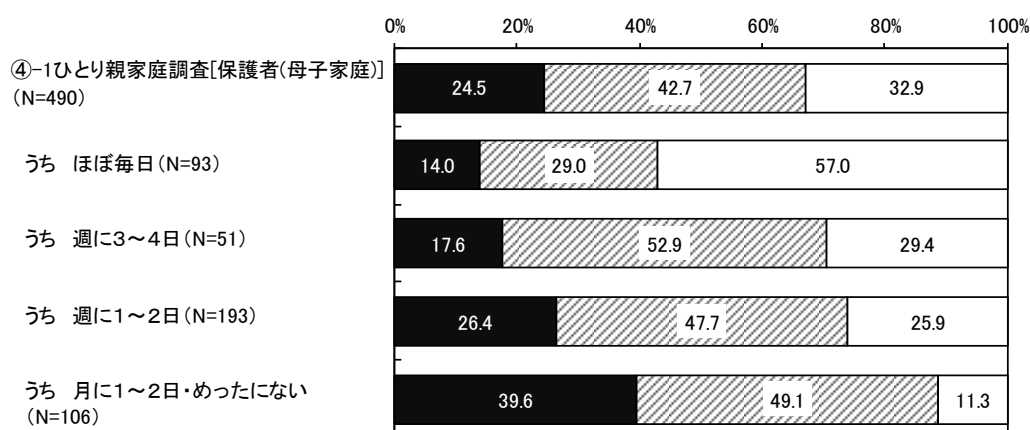
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



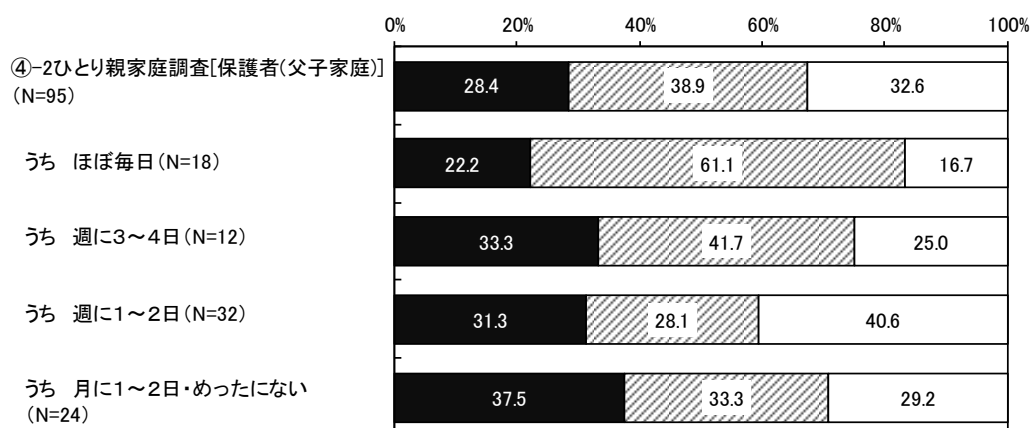
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



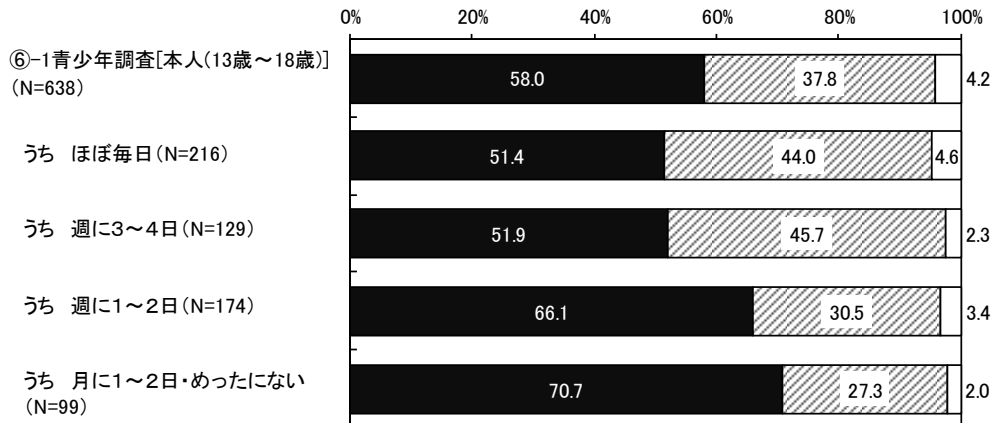
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



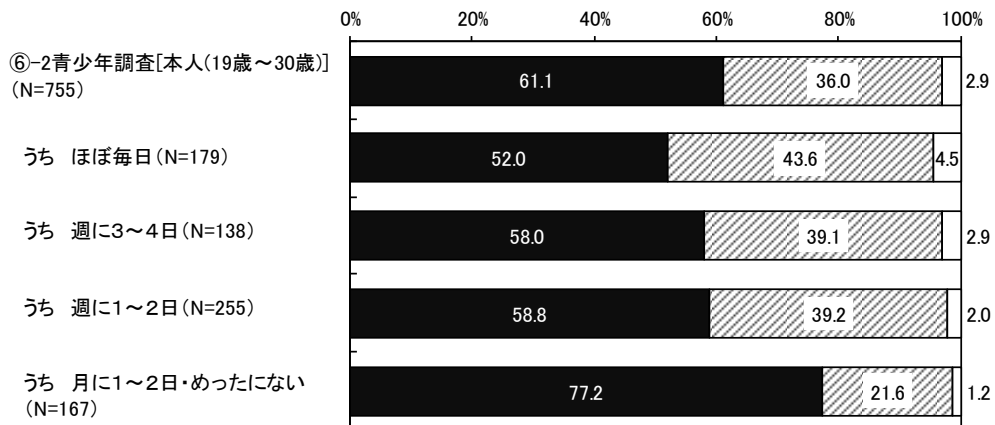
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



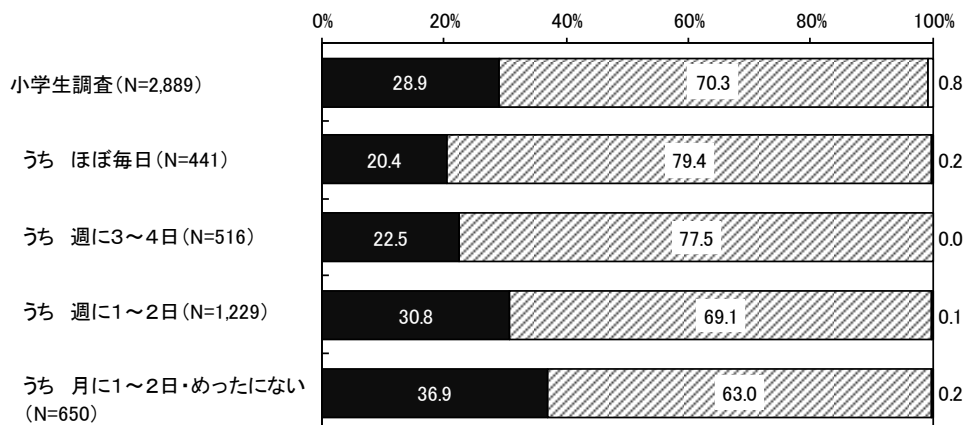
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成28年調査】

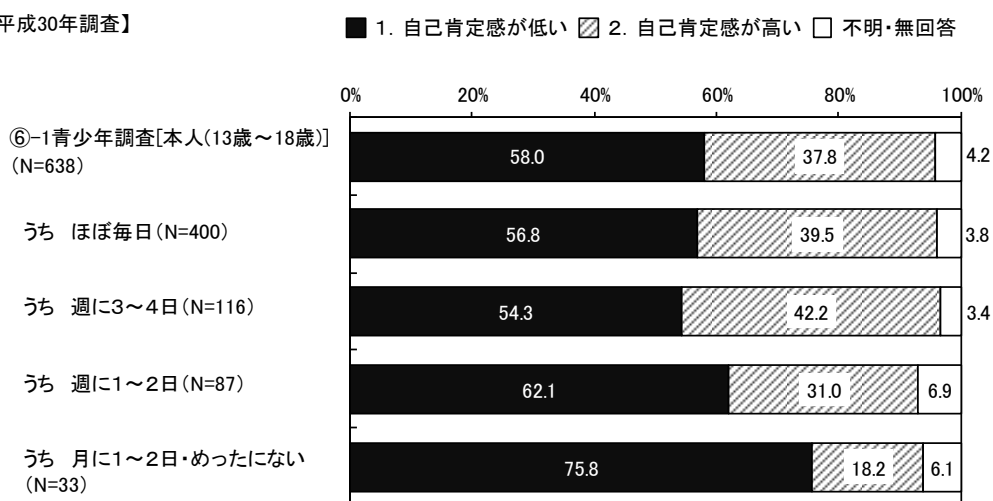
■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



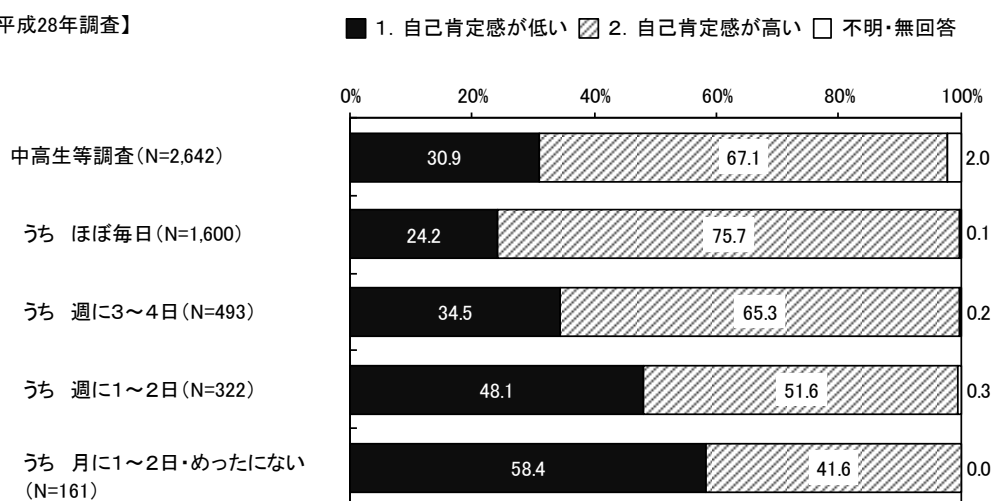
《子どもと話す頻度別 自己肯定感の状況》

「ほぼ毎日」の場合、「月に1～2日・めったにない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

【平成30年調査】



【平成28年調査】

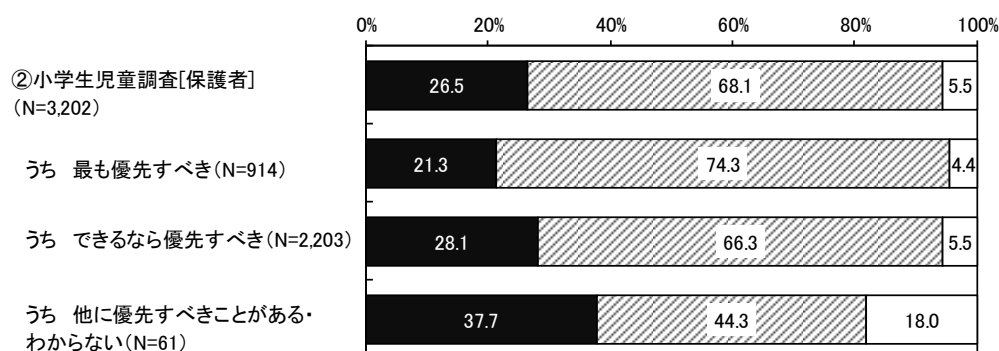


《子育てにかかる時間の優先度別 自己肯定感の状況》

すべての調査において、「最も優先すべき」の場合、「他に優先すべきことがある・わからない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

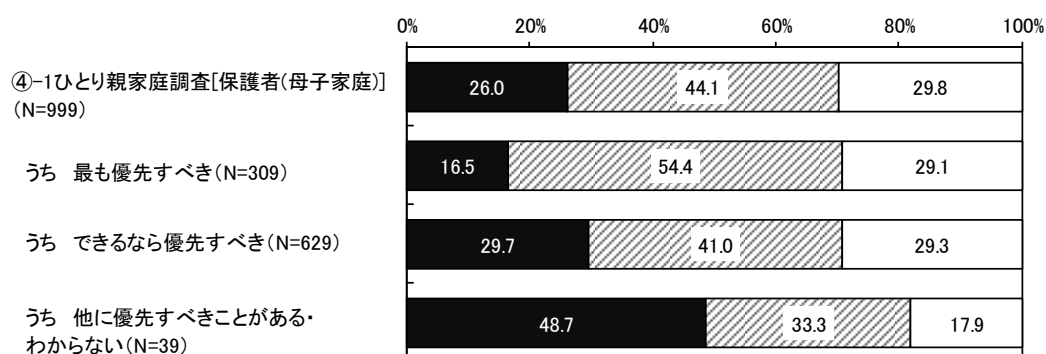
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



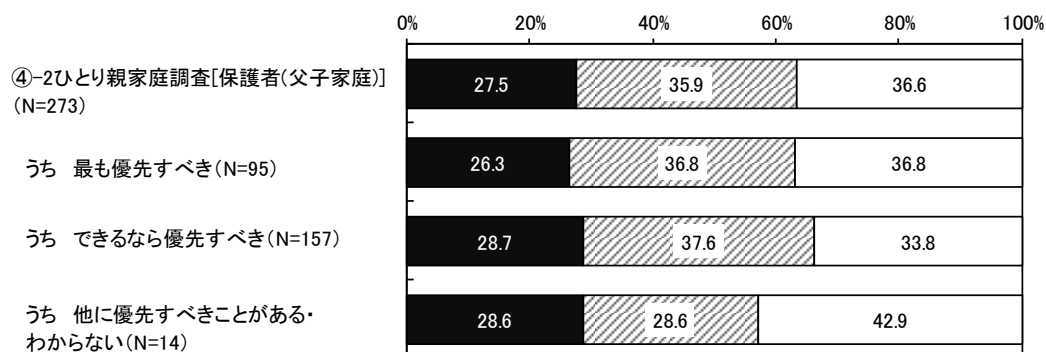
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

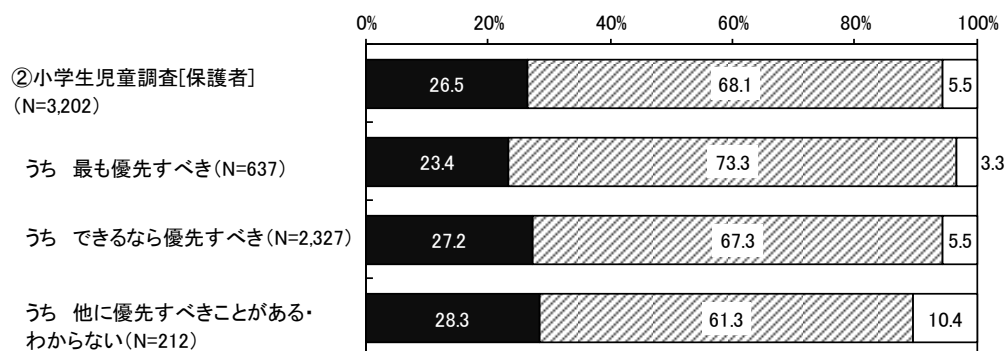


《子育てにかかるお金の優先度別 自己肯定感の状況》

②小学生児童調査（保護者）、④-1ひとり親家庭調査（保護者（母子家庭））において、「最も優先すべき」の場合、「他に優先すべきことがある・わからない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

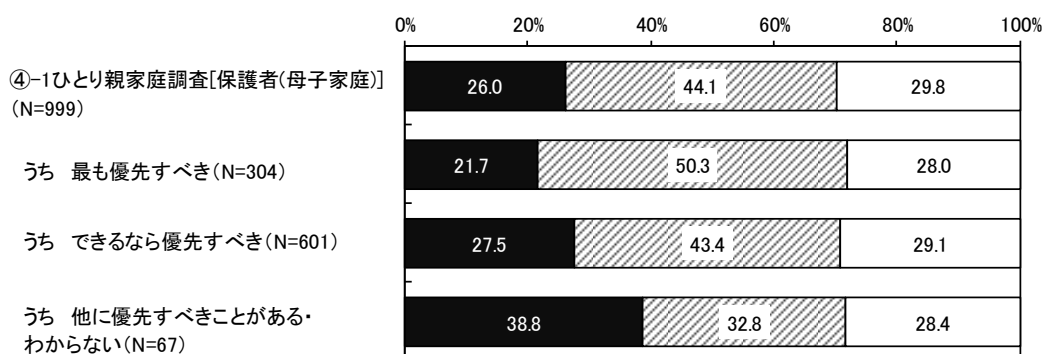
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



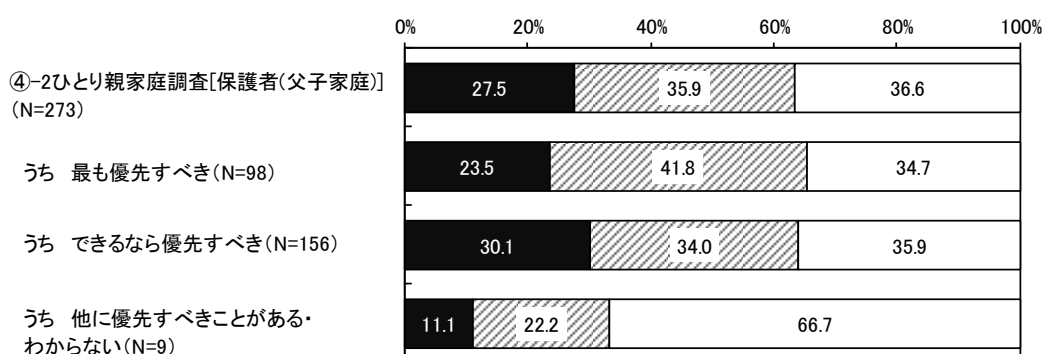
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

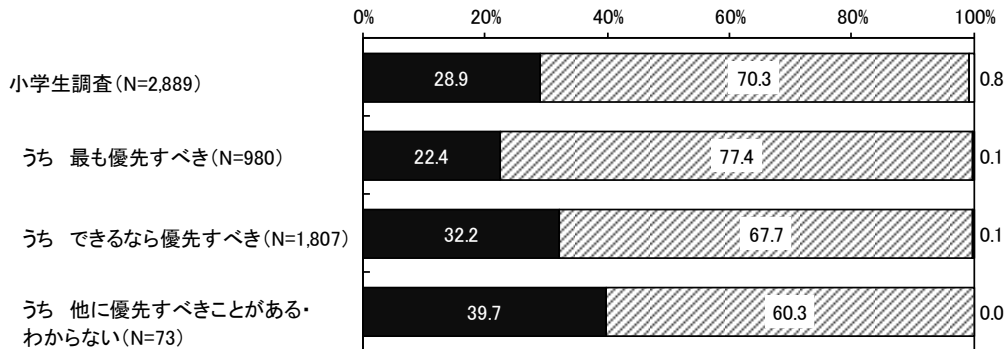


【参考】

子育てにかかる時間とお金の優先度別 自己肯定感の状況(平成28年度調査)

【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

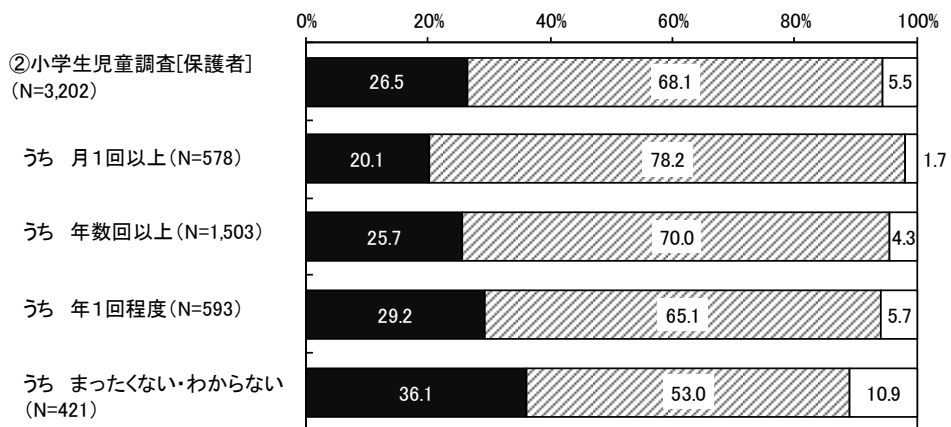


《文化芸術活動の頻度別 自己肯定感の状況》

すべての調査において、「月1回以上」の場合、「まったくない・わからない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

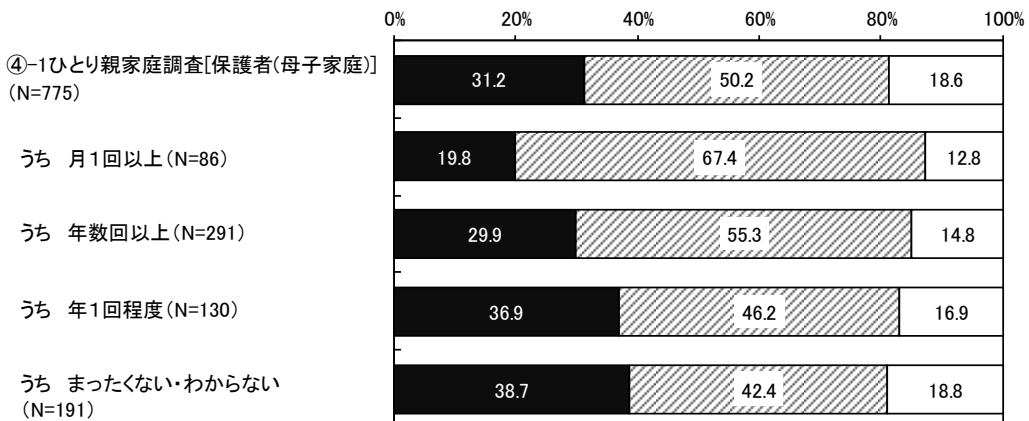
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



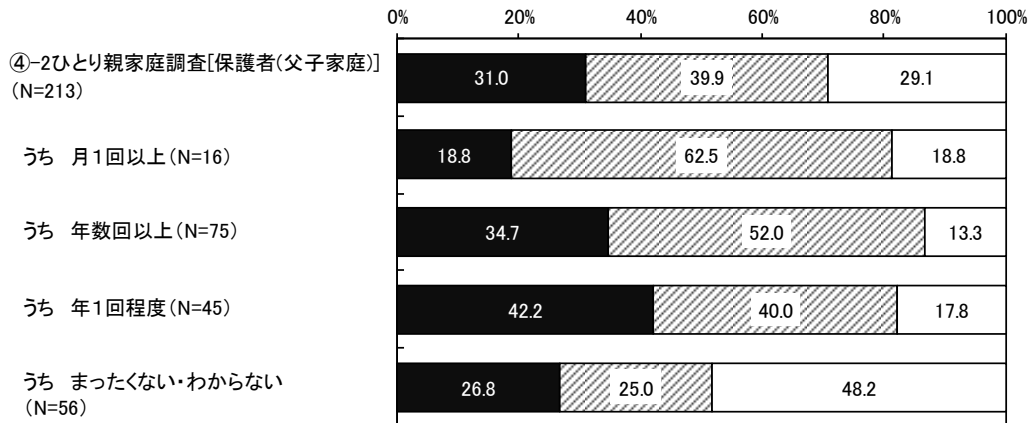
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



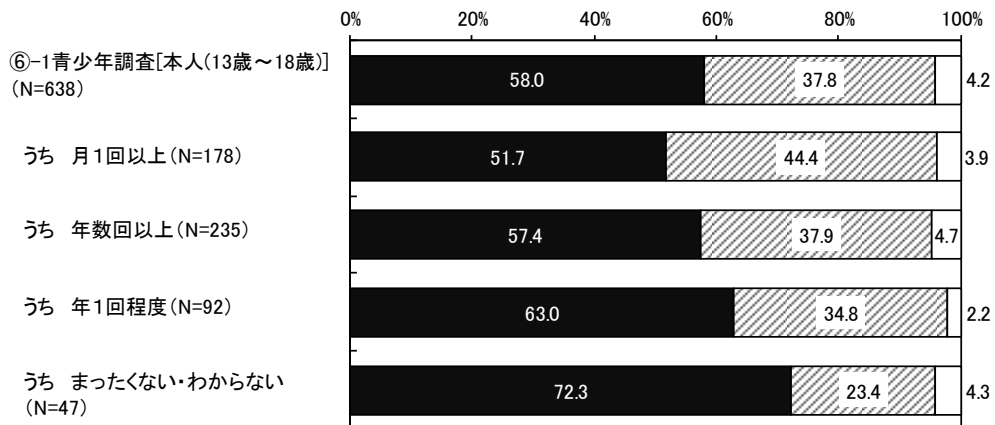
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



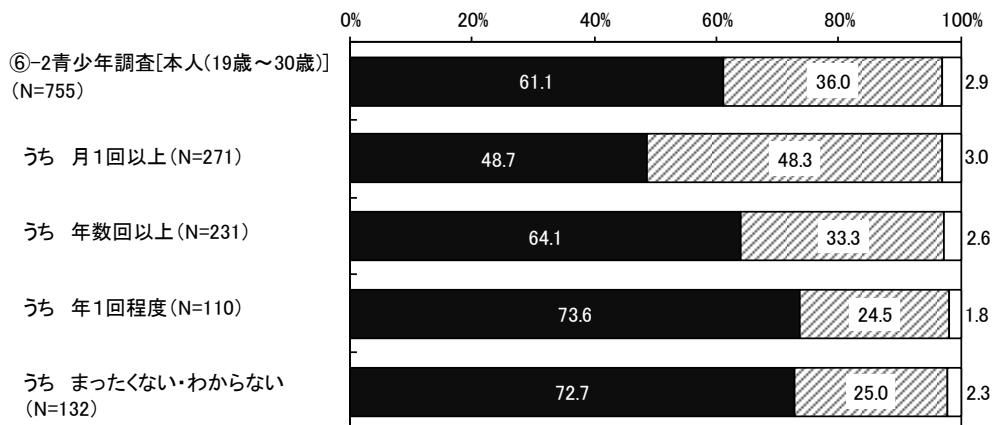
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



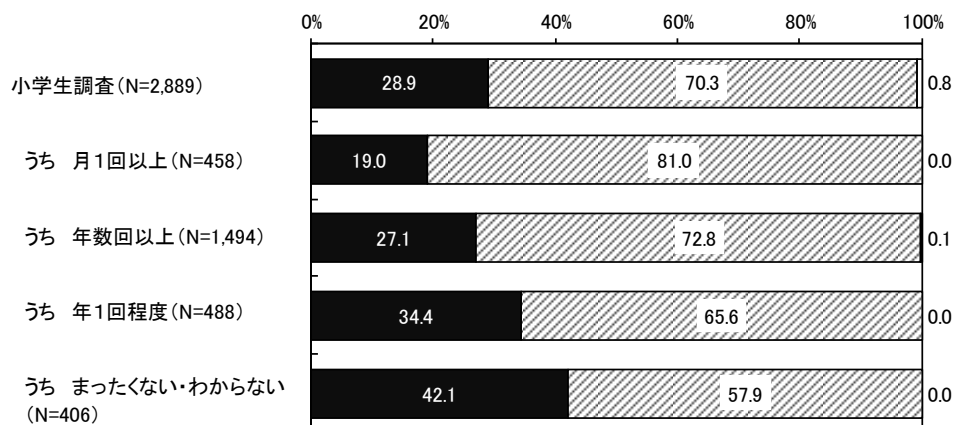
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



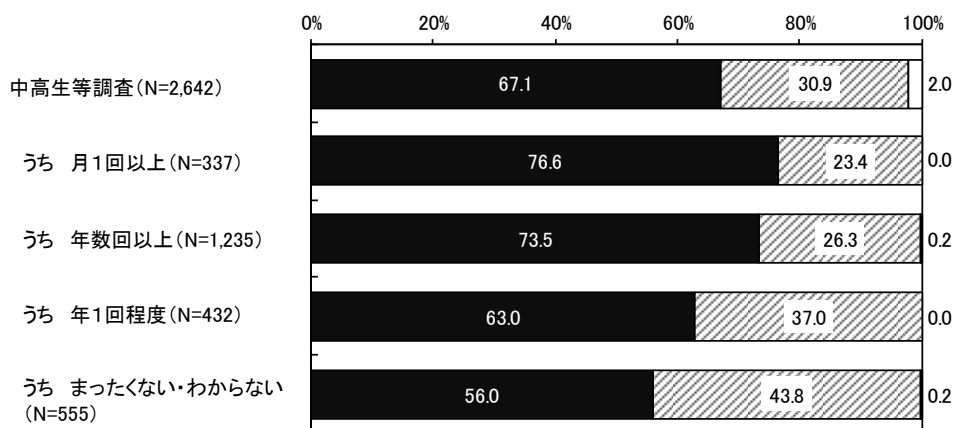
【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



《自然体験の頻度別 自己肯定感の状況》

すべての調査において、「月1回以上」の場合、「まったくない・わからない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

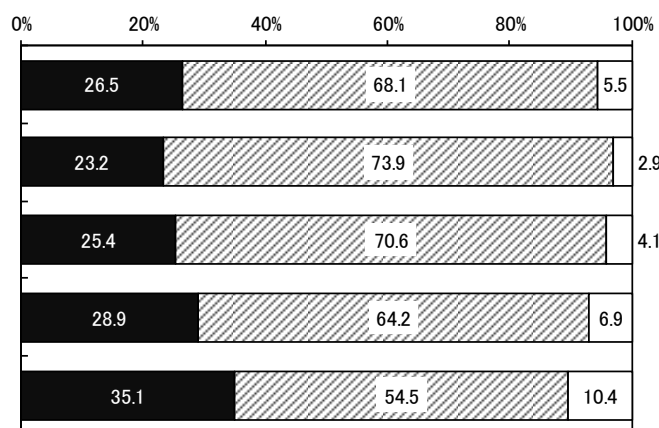
②小学生児童調査[保護者]
(N=3,202)

うち 月1回以上(N=449)

うち 年数回以上(N=1,746)

うち 年1回程度(N=609)

うち まったくない・わからない
(N=288)



【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

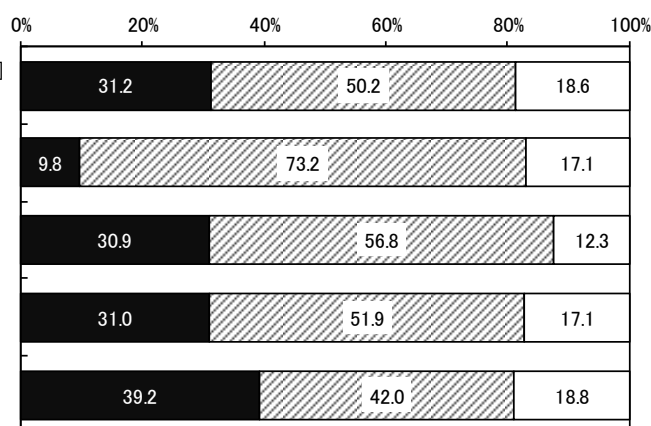
④-1ひとり親家庭調査[保護者(母子家庭)]
(N=775)

うち 月1回以上(N=41)

うち 年数回以上(N=220)

うち 年1回程度(N=187)

うち まったくない・わからない
(N=250)



【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

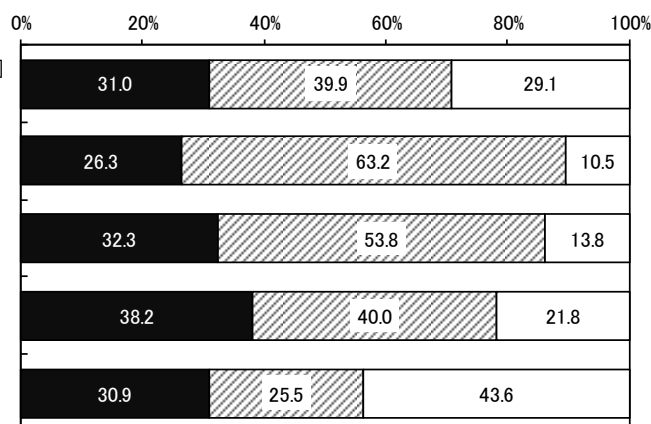
④-2ひとり親家庭調査[保護者(父子家庭)]
(N=213)

うち 月1回以上(N=19)

うち 年数回以上(N=65)

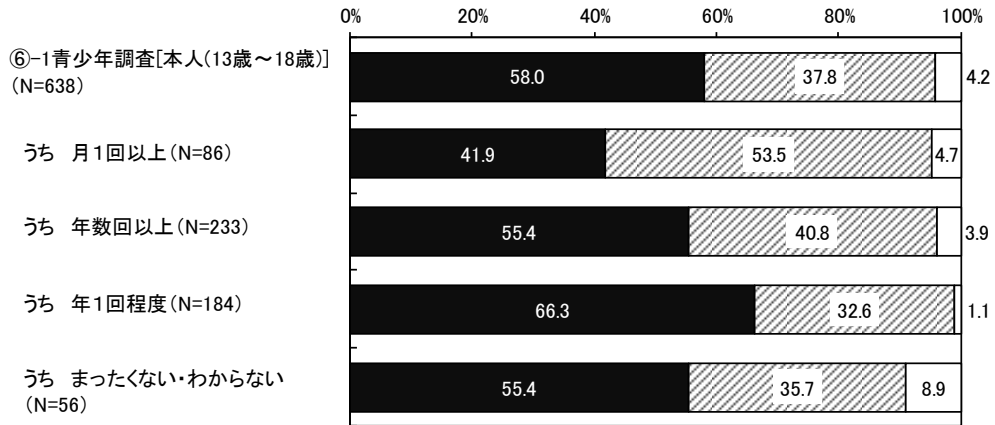
うち 年1回程度(N=55)

うち まったくない・わからない
(N=55)



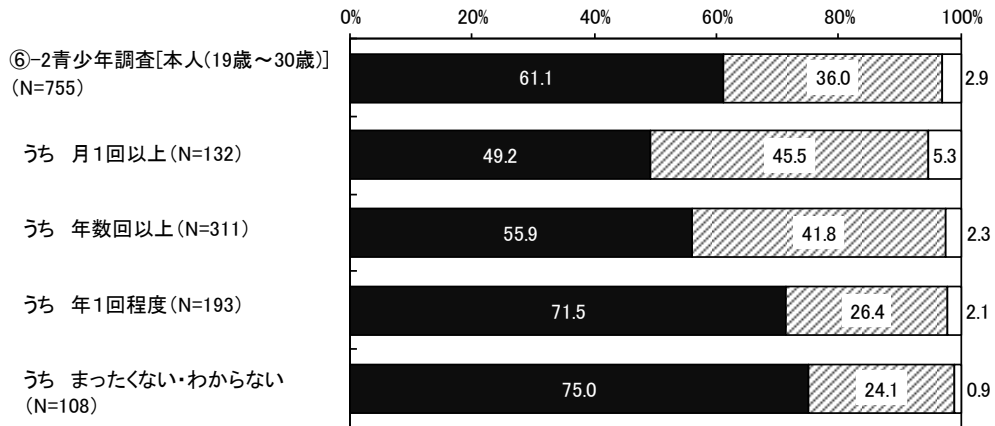
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



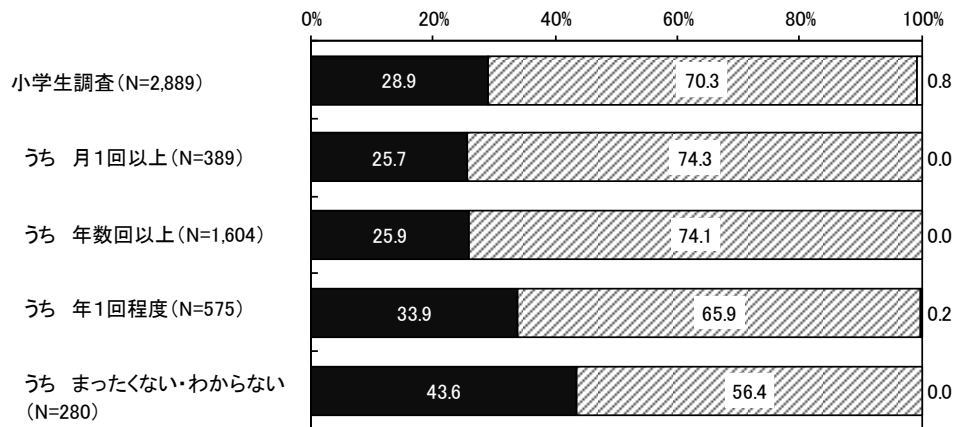
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



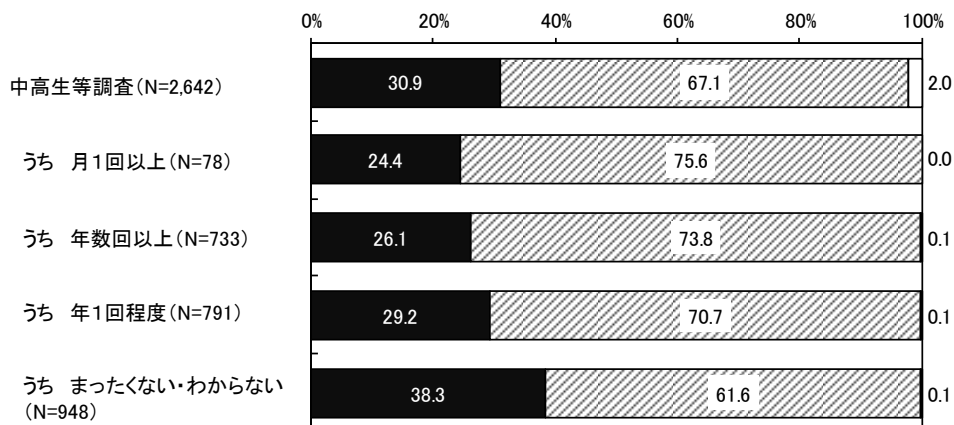
【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

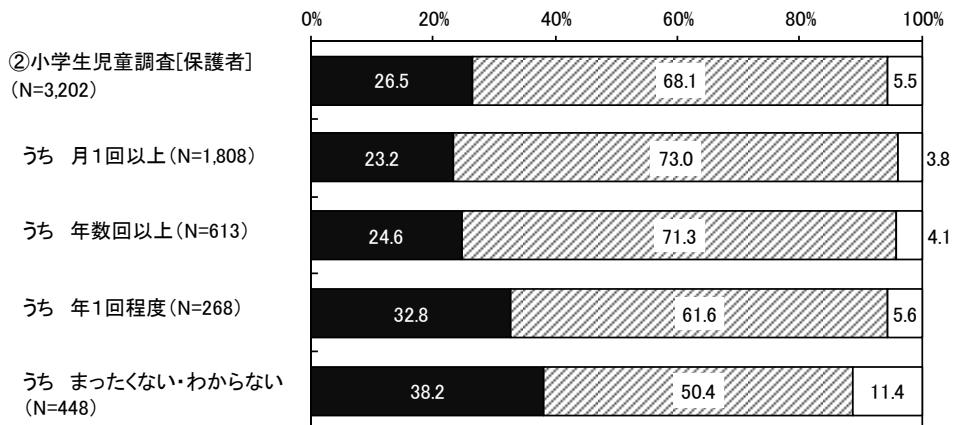


《スポーツ活動の頻度別 自己肯定感の状況》

すべての調査において、「月1回以上」の場合、「まったくない・わからない」よりも「自己肯定感が低い」割合が低く、「自己肯定感が高い」割合が高くなっています。

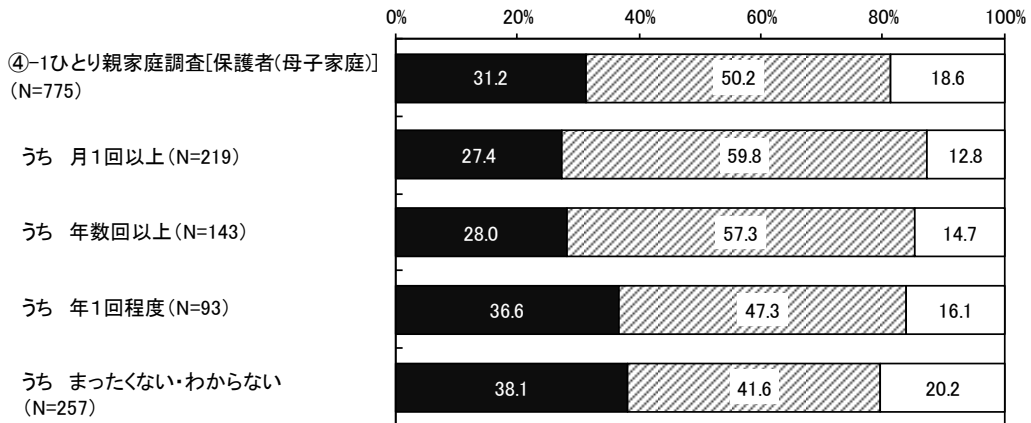
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



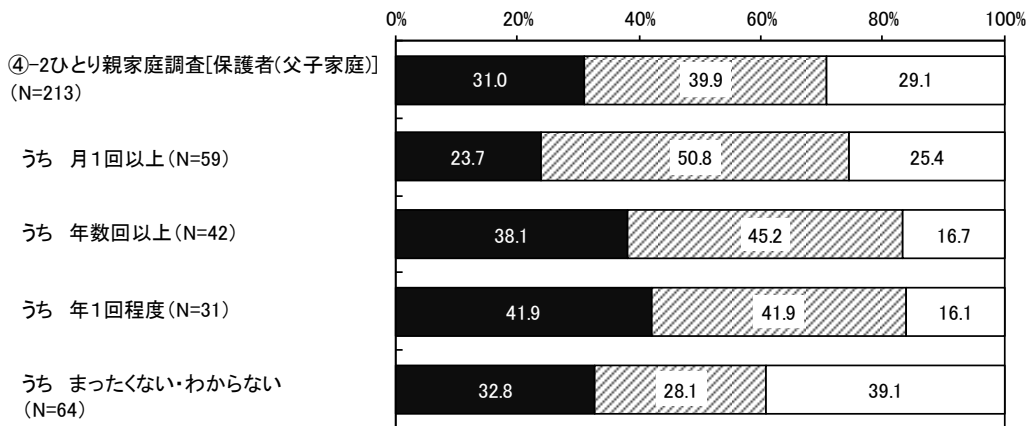
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



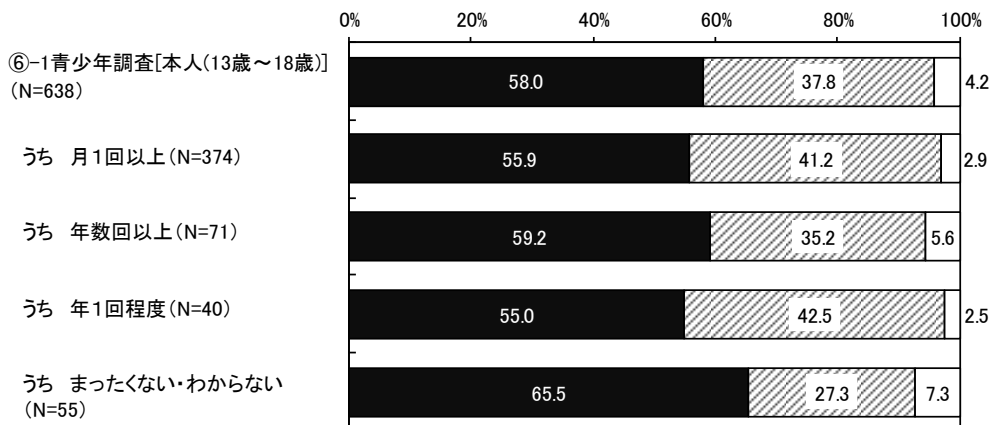
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



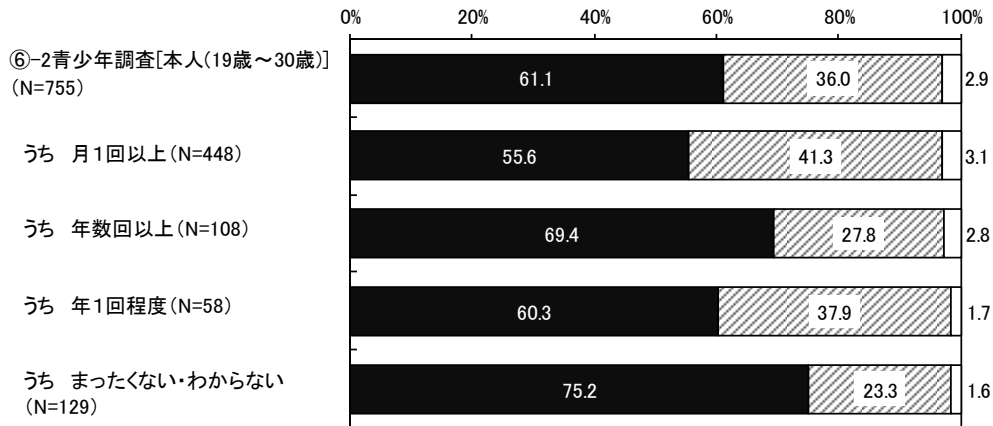
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



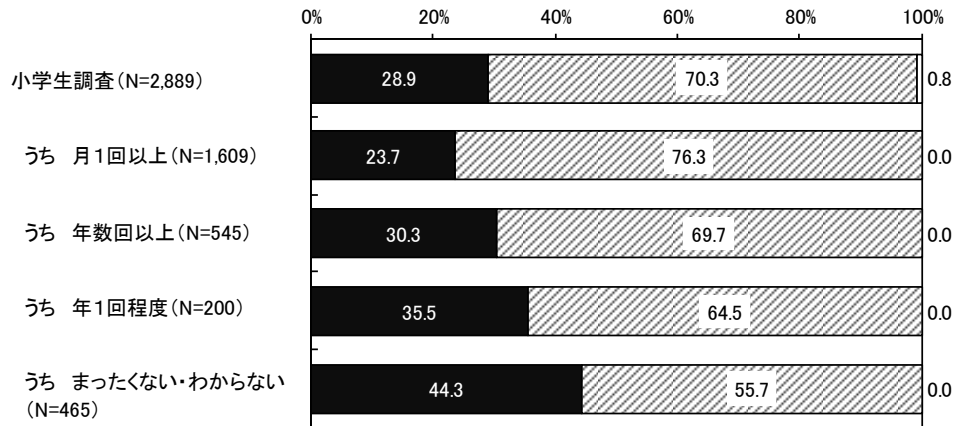
【平成30年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



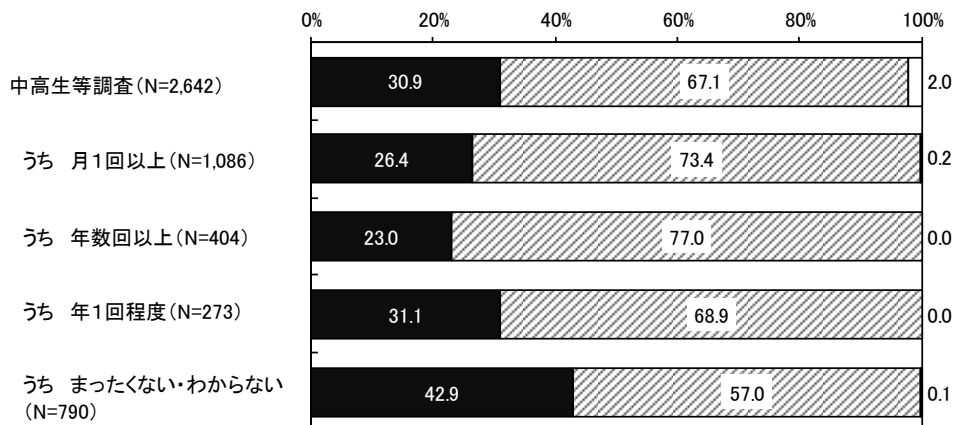
【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答



【平成28年調査】

■ 1. 自己肯定感が低い □ 2. 自己肯定感が高い □ 不明・無回答

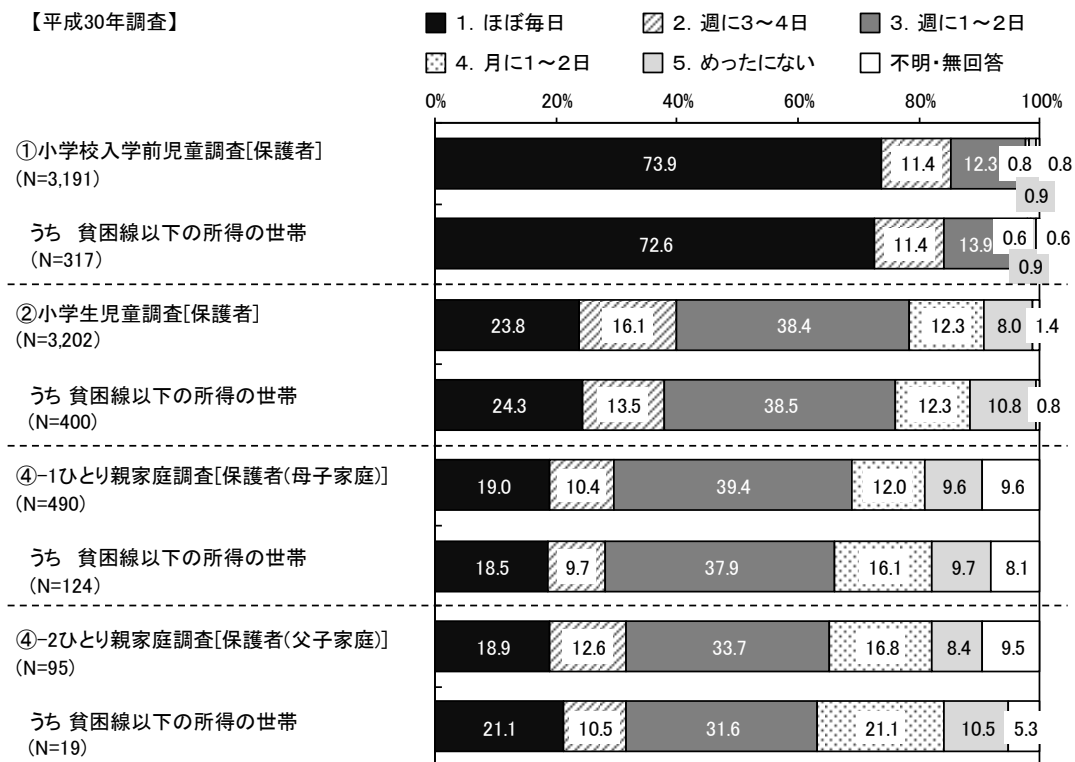


(4) 保護者等の状況

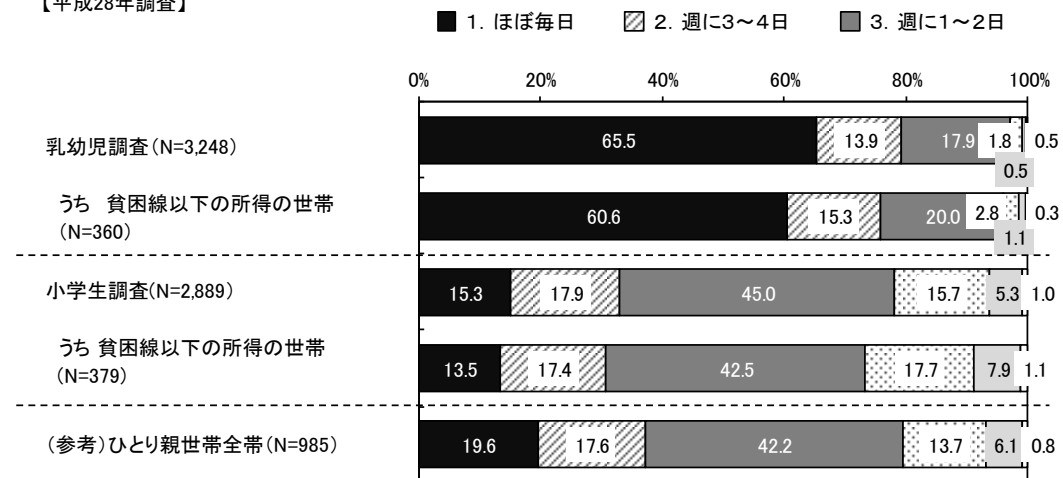
ア 子どもと遊ぶ頻度 (SA)

・全体では、①小学校入学前児童調査(保護者)において「ほぼ毎日」の割合が、②小学生児童調査(保護者)、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))において「週1~2日」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

・平成28年度調査からの経年変化では、①小学校入学前児童調査(保護者)、②小学生児童調査(保護者)において、「ほぼ毎日」の割合が平成28年度調査よりも高くなっています。

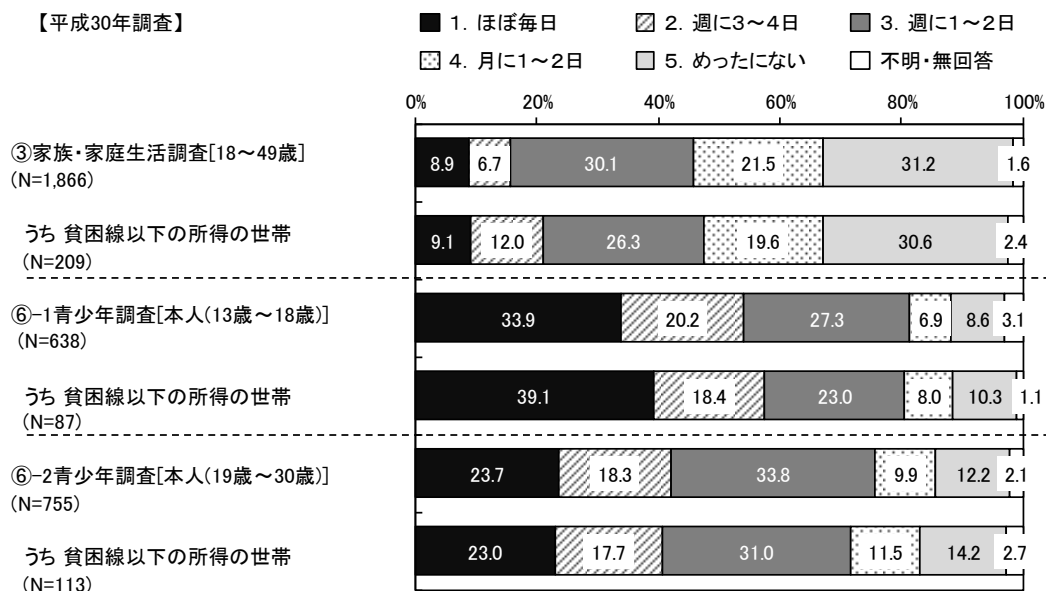


【平成28年調査】



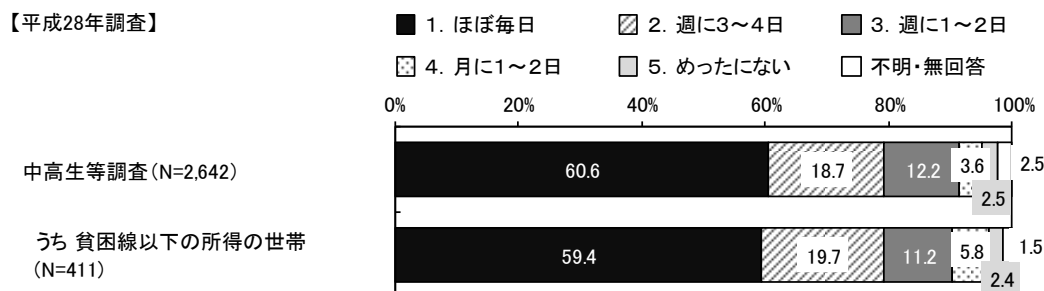
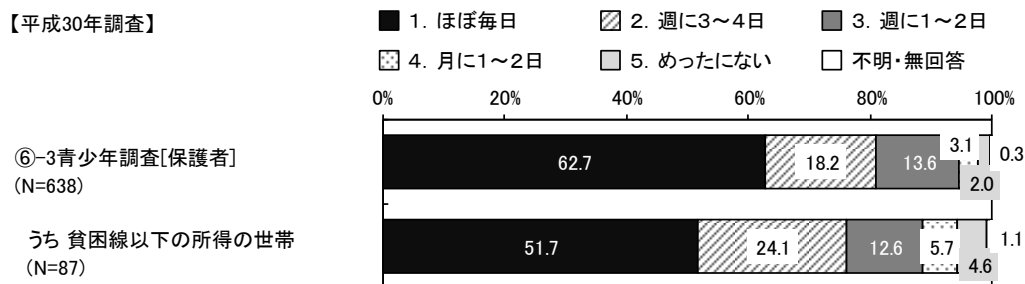
《親に遊んでもらったか（小学生の頃）》

全体では、③家族・家庭生活調査（18～49歳）、⑥-2青少年調査（本人（19歳～30歳））において、「週に1～2日」の割合が、⑥-1青少年調査（本人（13歳～18歳））において、「ほぼ毎日」の割合が高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」においてもおおむね同様の傾向となっています。



イ 子どもと生活状況について話をする頻度（SA）

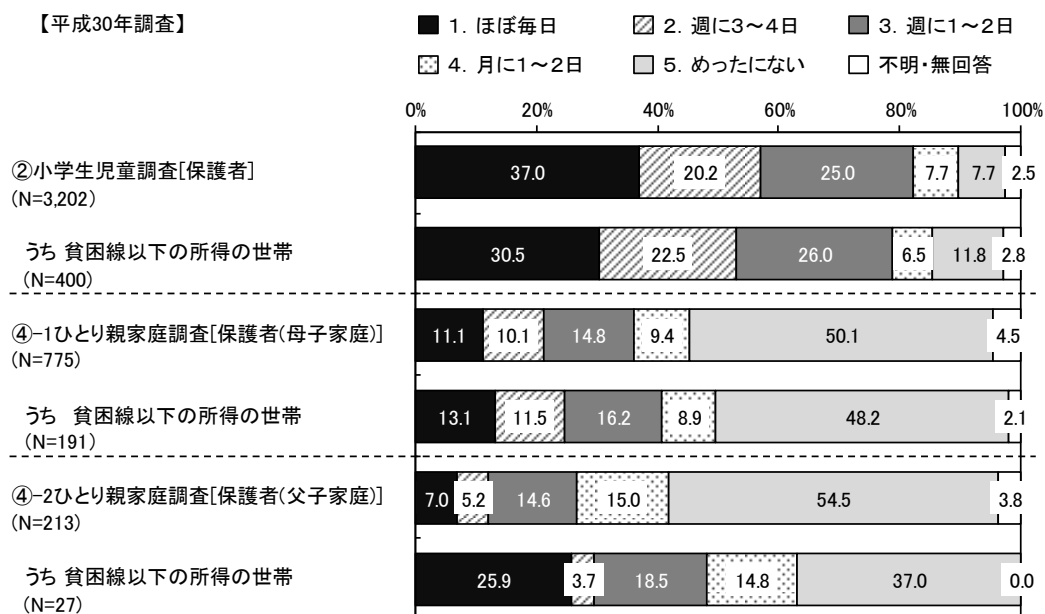
「貧困線以下の所得の世帯」では、「ほぼ毎日」の割合が全体よりも低くなっています。



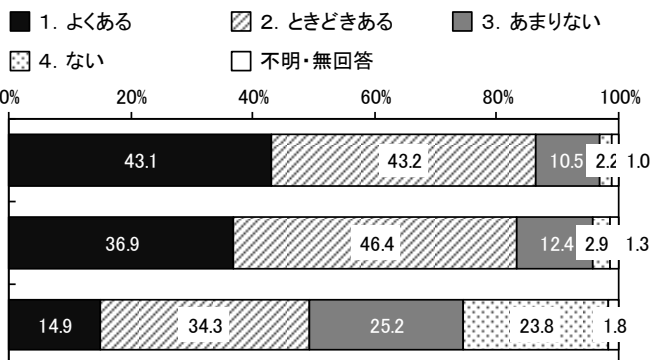
ウ 子どもに勉強を教える頻度 (SA)

・全体では、②小学生児童調査(保護者)において、「ほぼ毎日」の割合が、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))、④-2ひとり親家庭調査(保護者(父子家庭))において「めったにない」の割合が最も高くなっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、②小学生児童調査(保護者)において、「ほぼ毎日」の割合が全体よりも低くなっています。

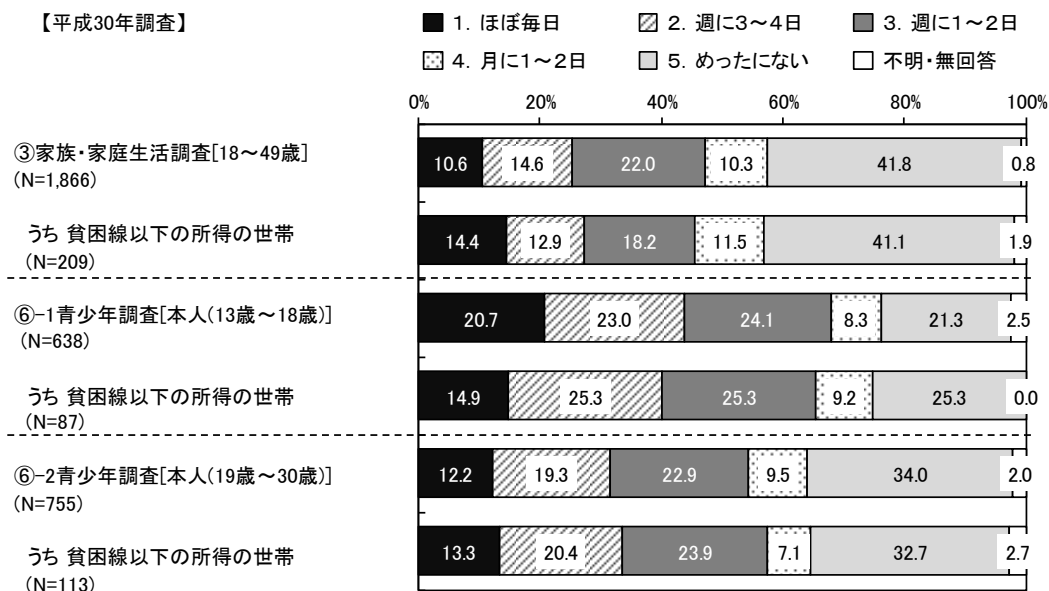


【平成28年調査】



《親に勉強を教えてもらったか（小学生の頃）》

・全体では、③家族・家庭生活調査（18～49歳）、⑥-2青少年調査（本人（19歳～30歳））において、「めったになかった」の割合が、⑥-1青少年調査（本人（13歳～18歳））において、「週に1～2日」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

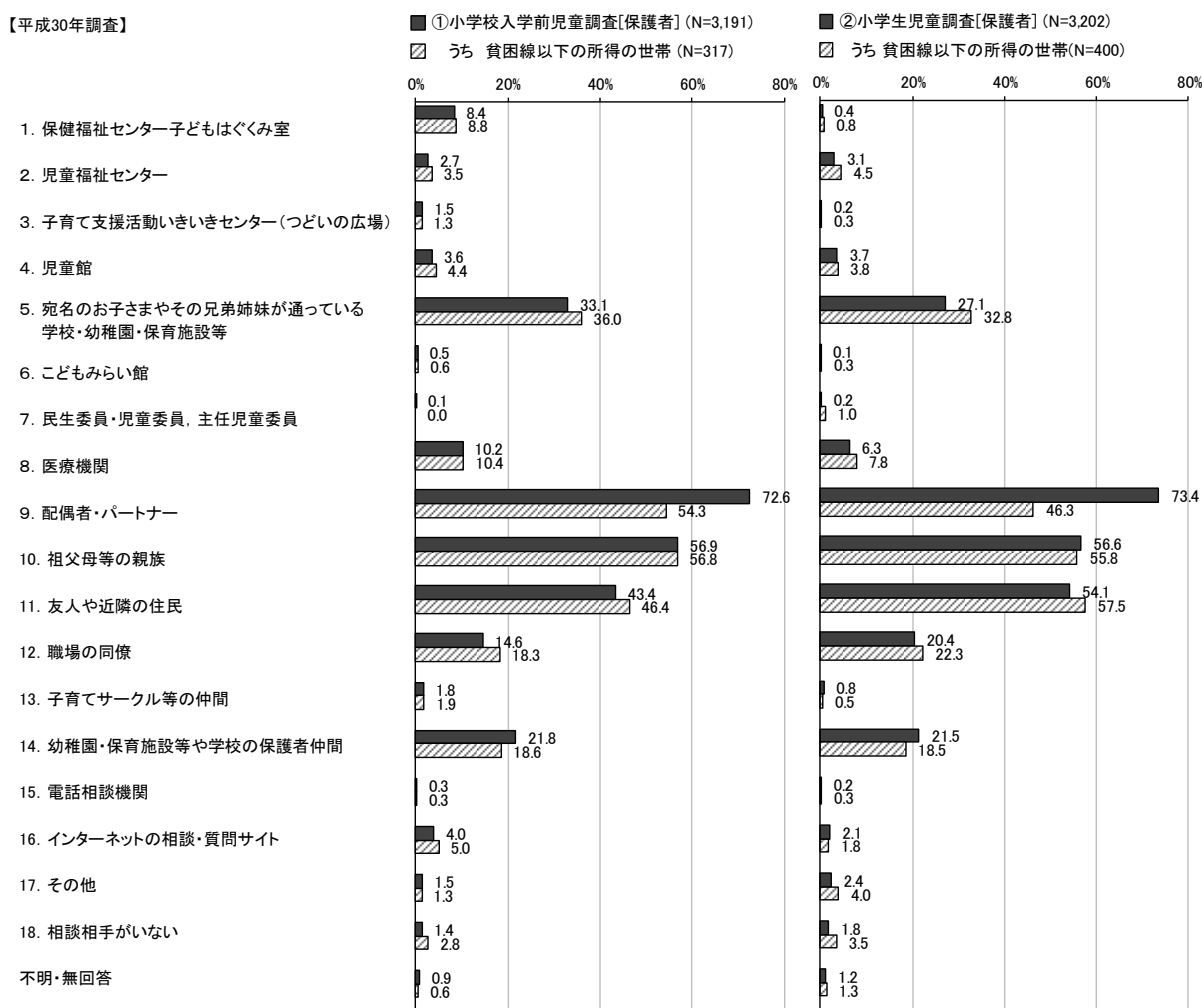


エ 子育てについて日頃気になることの相談相手・相談先 (MA)

・全体では、①小学校入学前児童調査(保護者)、②小学生児童調査(保護者)において「配偶者・パートナー」の割合が最も高くなっています。

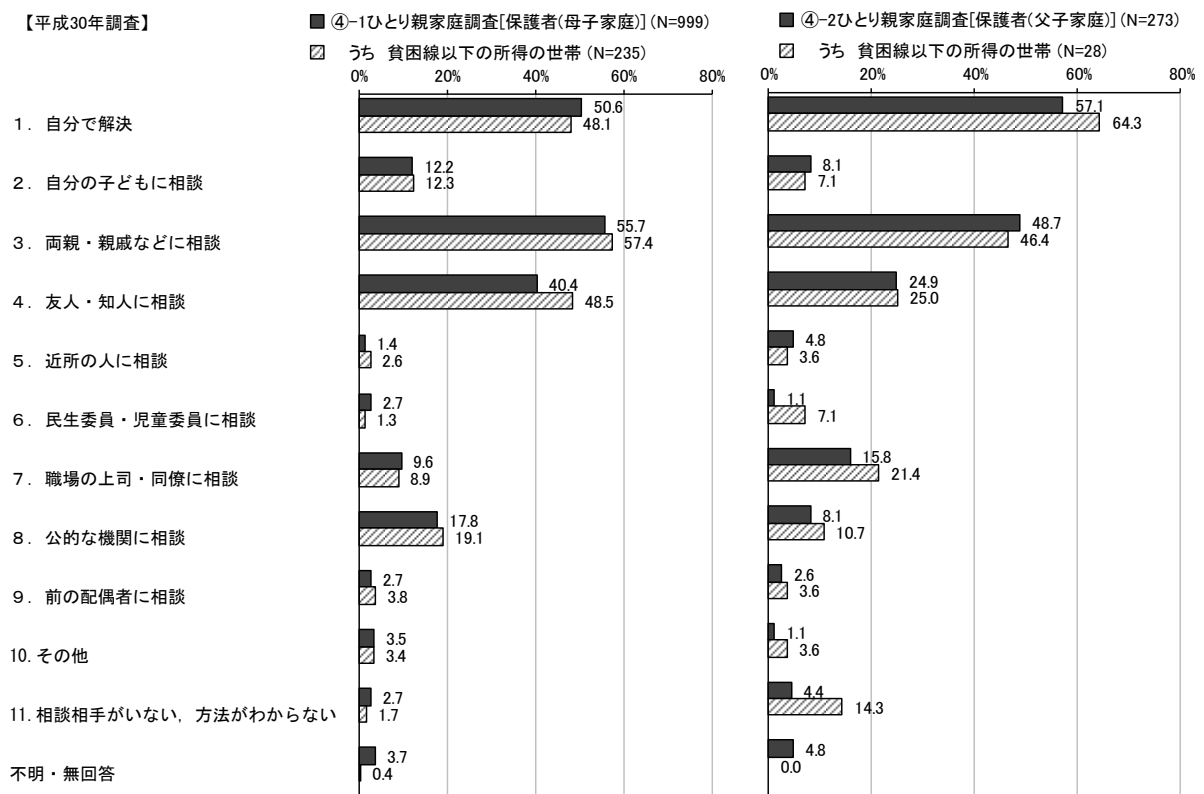
・「貧困線以下の所得の世帯」では、両調査ともに「配偶者・パートナー」の割合が低くなっており、「宛名のお子さまやその兄弟姉妹が通っている学校・幼稚園・保育施設等」の割合が全体よりも高くなっています。

・「悩みごとなどを相談したことがある公の期間等」は、全体では、④-1ひとり親家庭調査(保護者(母子家庭))において、「学校」、「保育園(所)・認定こども園・幼稚園」、「児童福祉センター(児童相談所・発達相談所)」が高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。



【困った問題が起きた場合、誰に相談したか】

【平成30年調査】



【悩みごとなどを相談したことがある公の期間等】

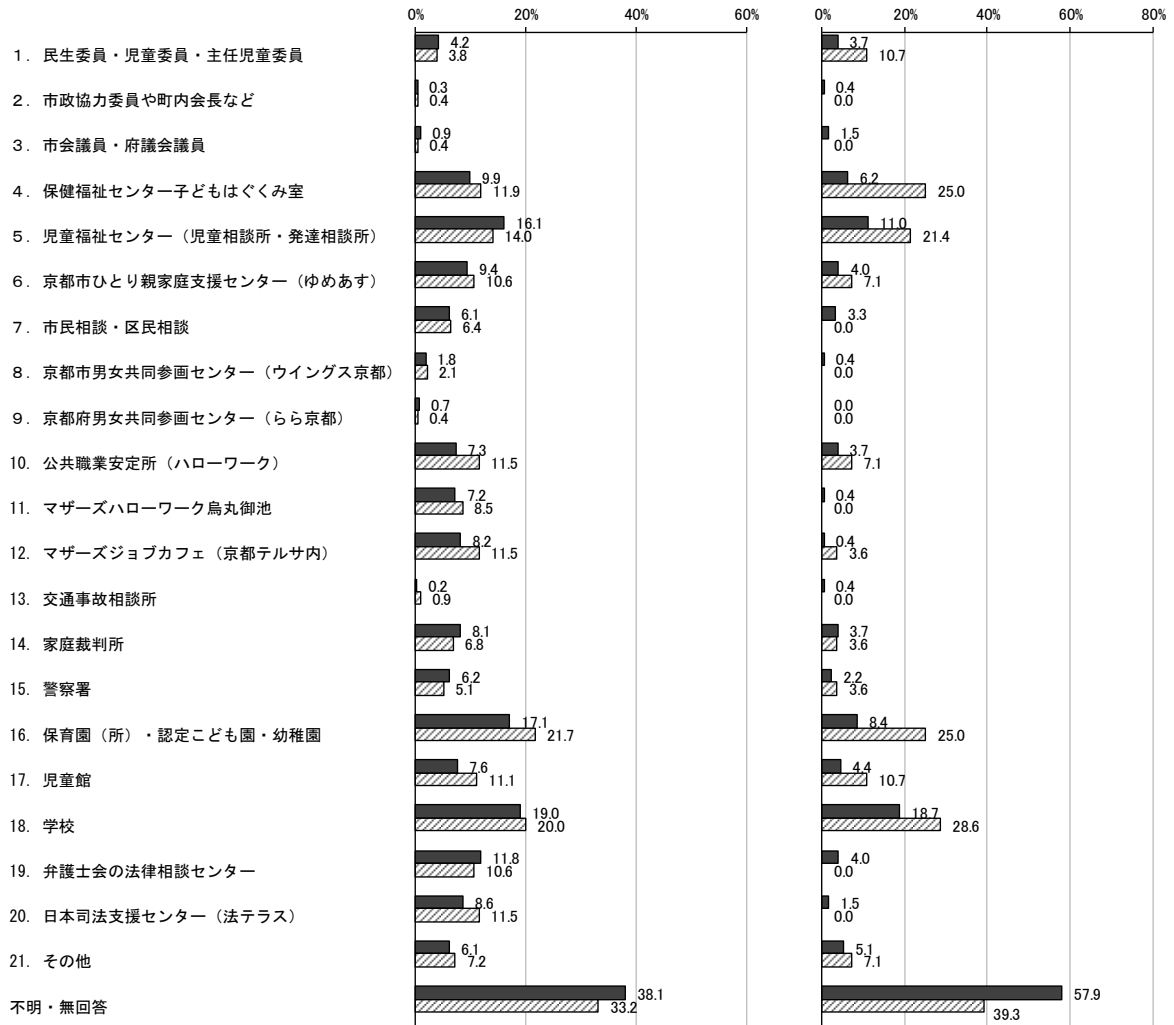
【平成30年調査】

■ ④-1ひとり親家庭調査[保護者(母子家庭)](N=999)

■ ④-2ひとり親家庭調査[保護者(父子家庭)](N=273)

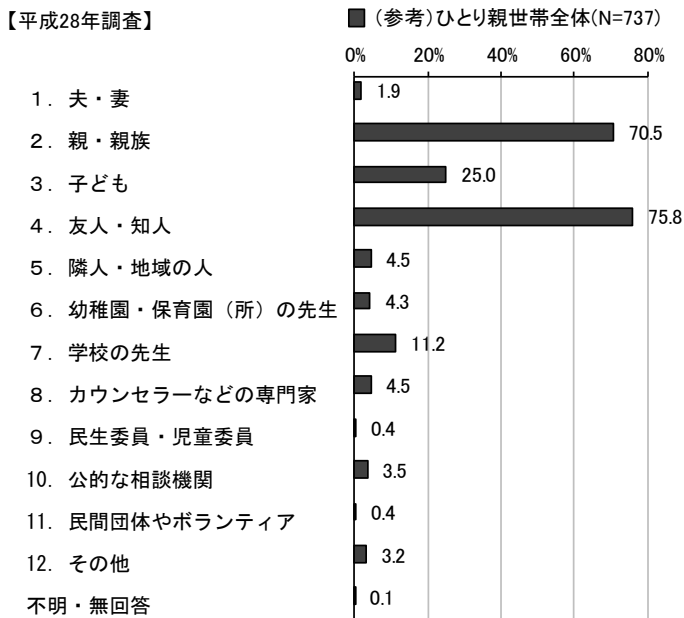
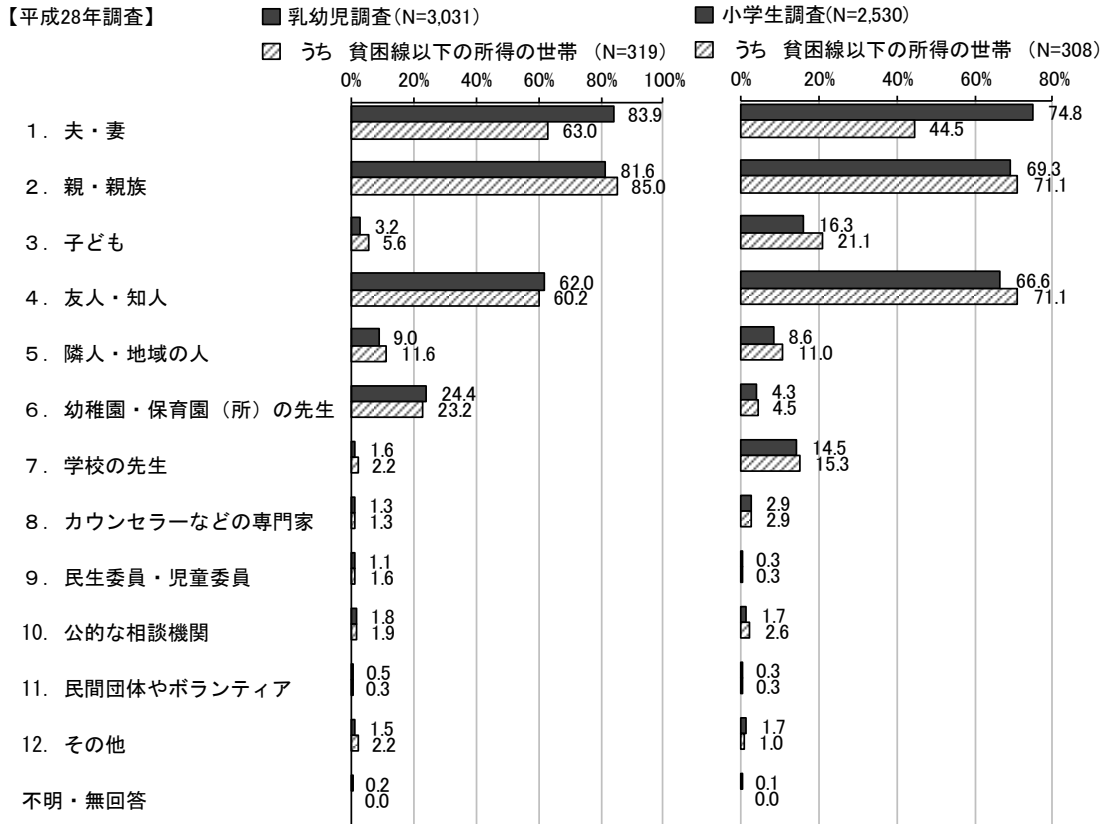
▨ うち 貧困線以下の所得の世帯(N=235)

▨ うち 貧困線以下の所得の世帯(N=28)



【参考】

相談相手の状況(平成28年度調査)

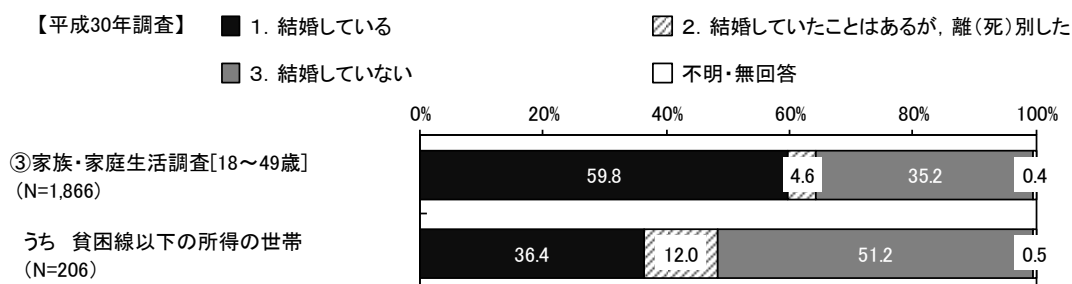


(5) 結婚・出産に対する考え

ア 結婚に関する考え

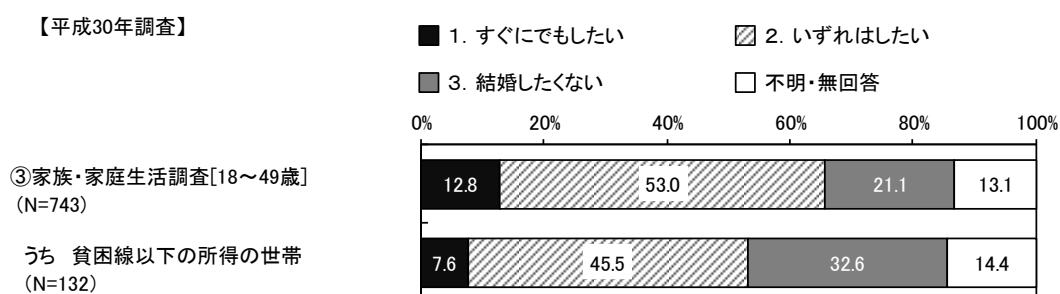
【婚姻状況 (SA)】

- ・全体では、「結婚している」の割合が最も高くなっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、「結婚していない」の割合が全体よりも高くなっています。



【結婚願望 (SA)】

- ・全体では、「いずれはしたい」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。
- ・「貧困線以下の所得の世帯」では、「結婚したくない」の割合が全体よりも高くなっています。

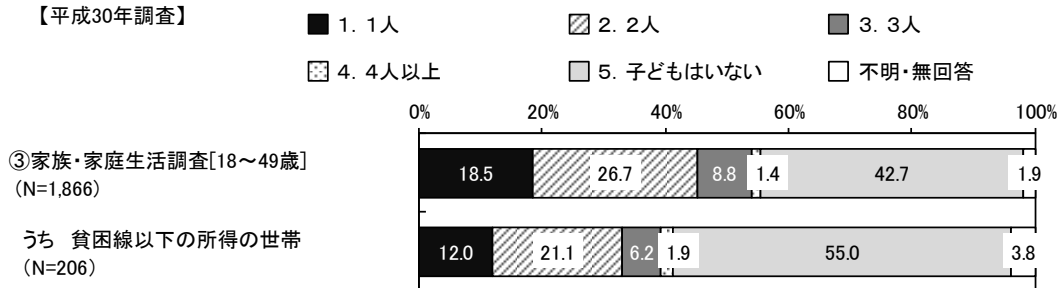


イ 出産に関する考え

【現在の子ども数 (SA)】

・全体では、「子どもはいない」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

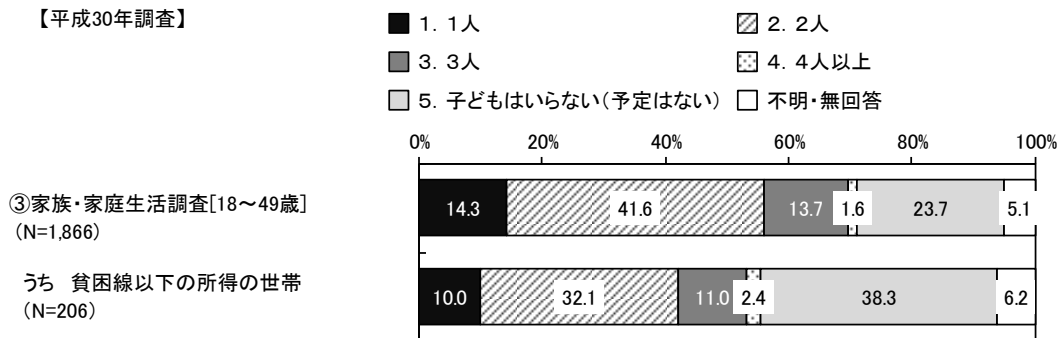
・「貧困線以下の所得の世帯」では、「子どもはいない」の割合が全体よりも高くなっています。



【予定の子ども数 (SA)】

・全体では、「2人」の割合が最も高くなっています。

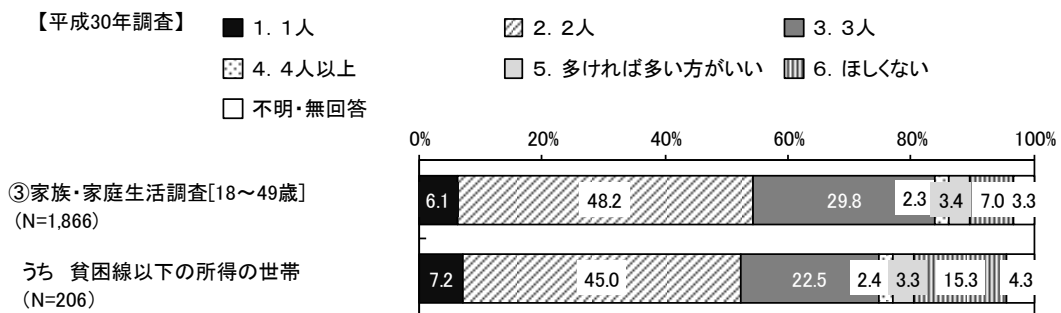
・「貧困線以下の所得の世帯」では、「子どもはிரらない(予定はない)」の割合が最も高くなっています。



【理想の子ども数 (SA)】

・全体では、「2人」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、「ほしくない」の割合が全体よりも高くなっています。



【子どもを持たない理由 (MA)】

・全体では、「結婚するつもりはないから」の割合が最も高くなっており、これらは、「貧困線以下の所得の世帯」でもおおむね同様の傾向となっています。

・「貧困線以下の所得の世帯」では、「出産・育児・教育にお金がかかるから」の割合が全体よりも高くなっていきます。

